

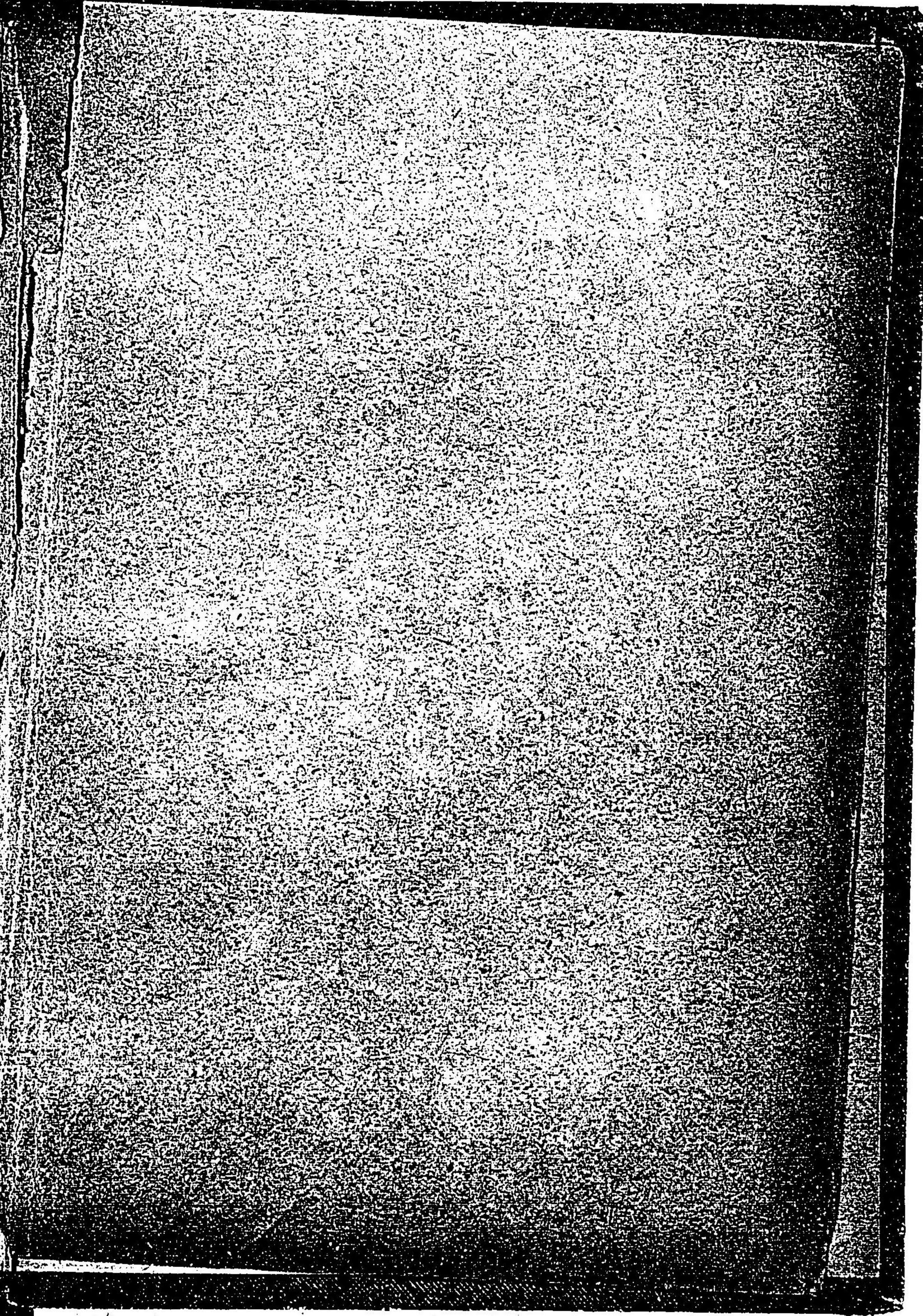
野上青左文嘉

日本上野園清道

名所

上野園

冥之部



71
162。

野村胡堂著

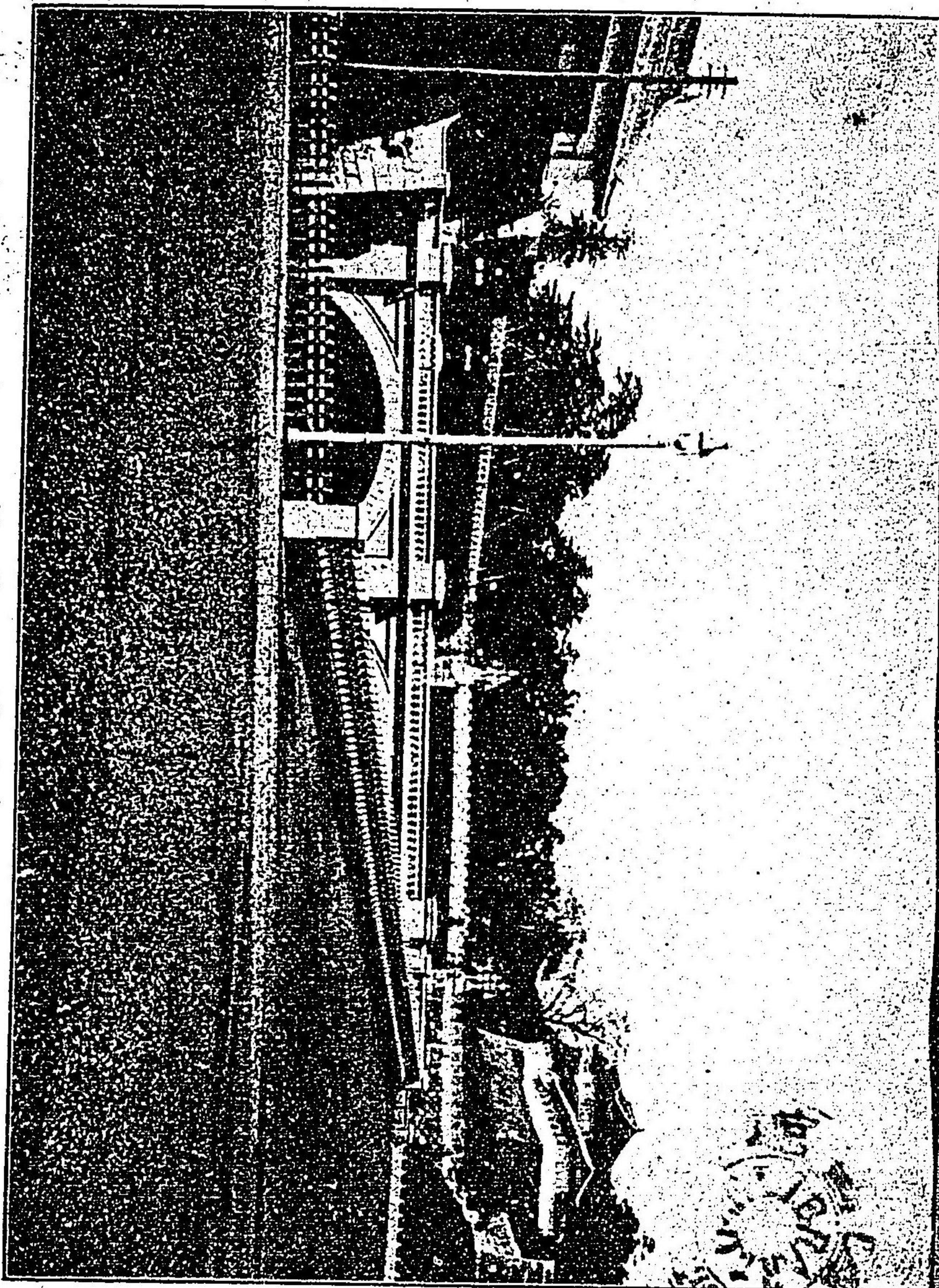
全國名所
寫真版入

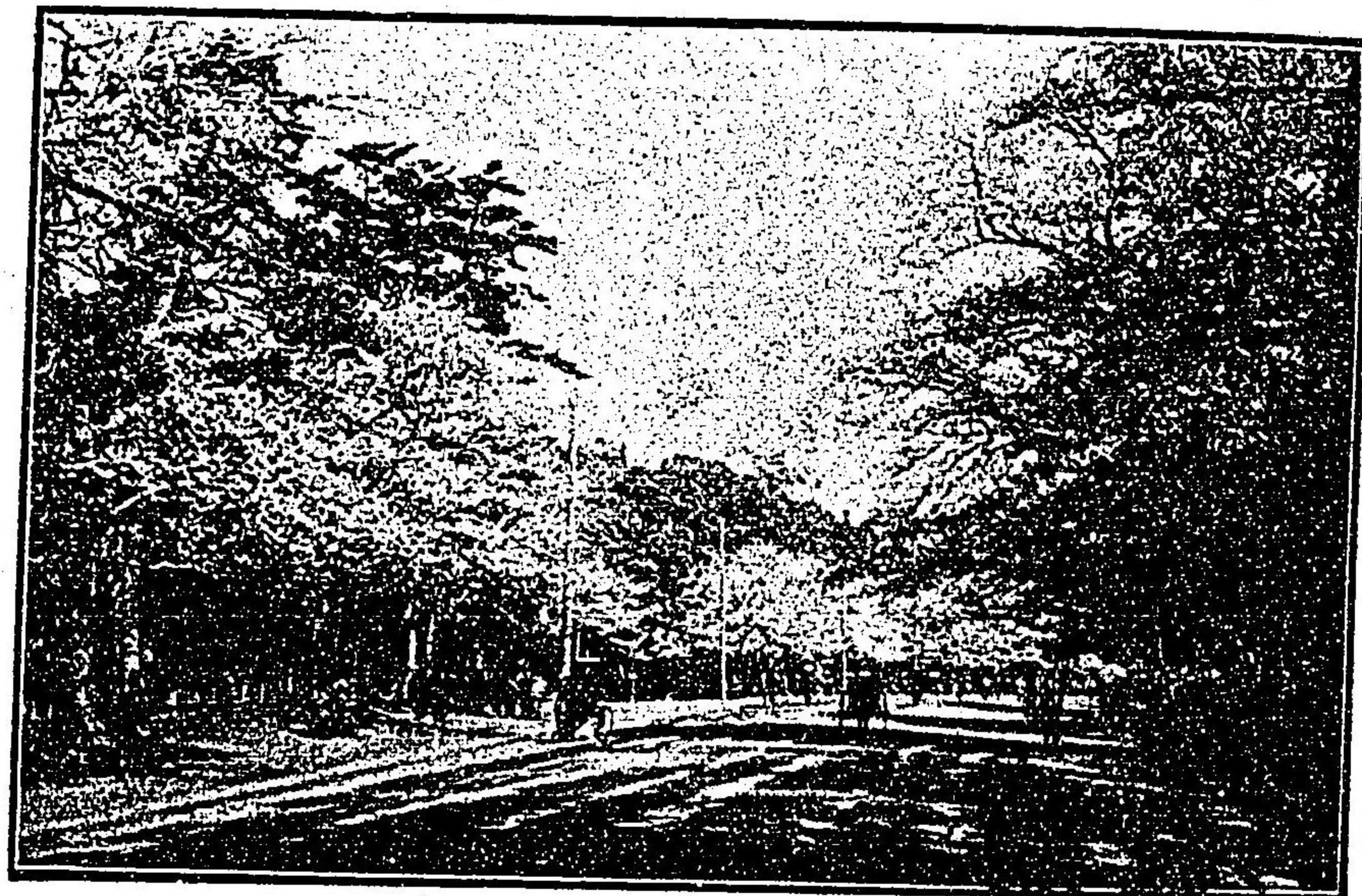
日本全
國鑄道

名所案内

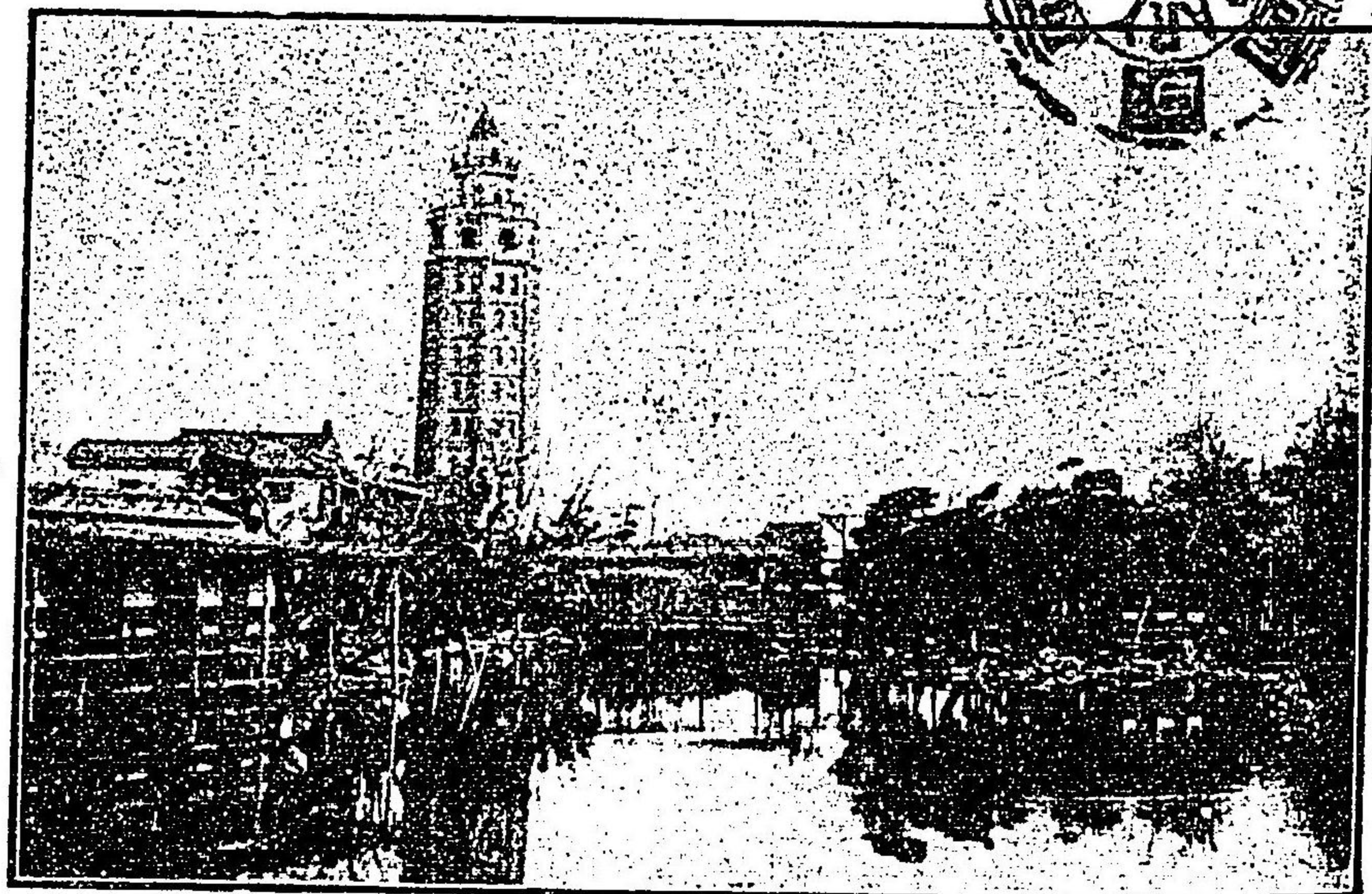
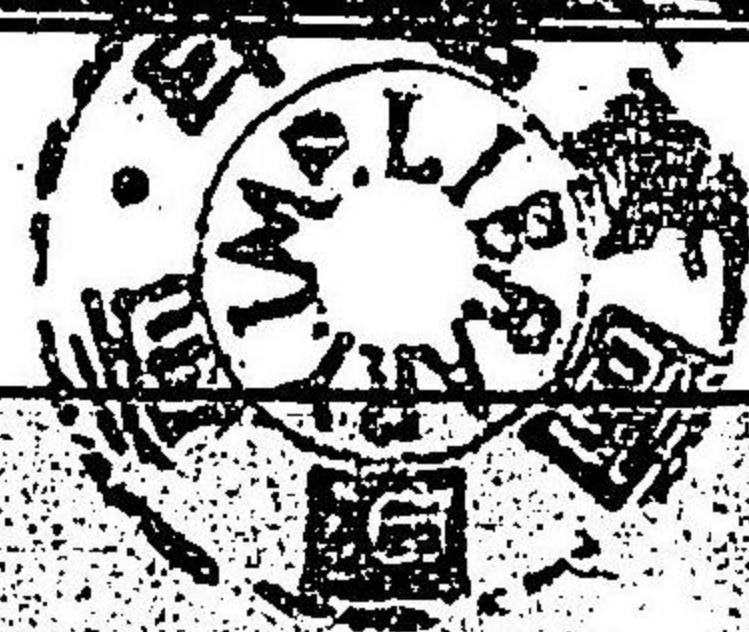
東京 二葉書局藏版

橋重二城皇

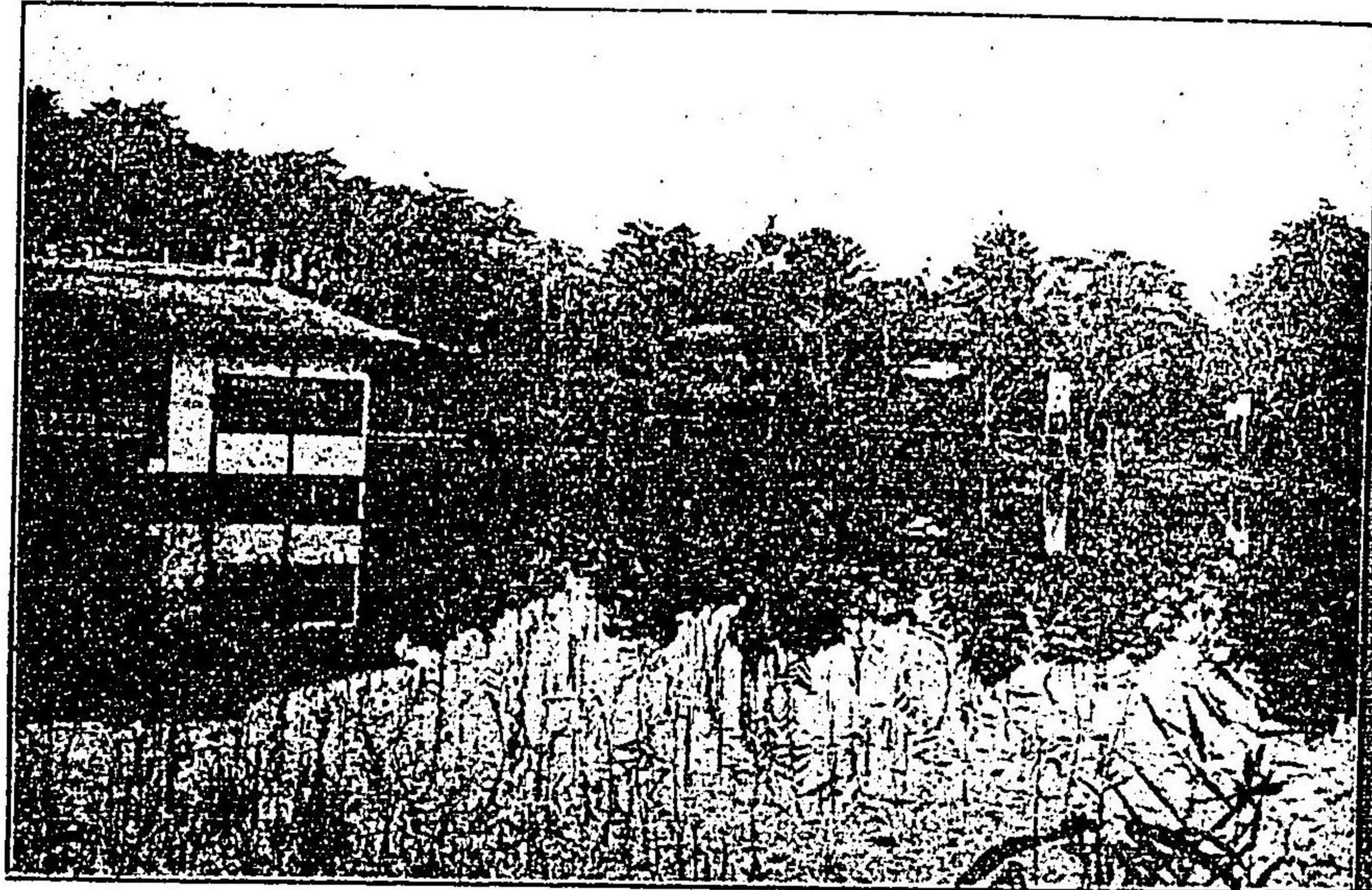




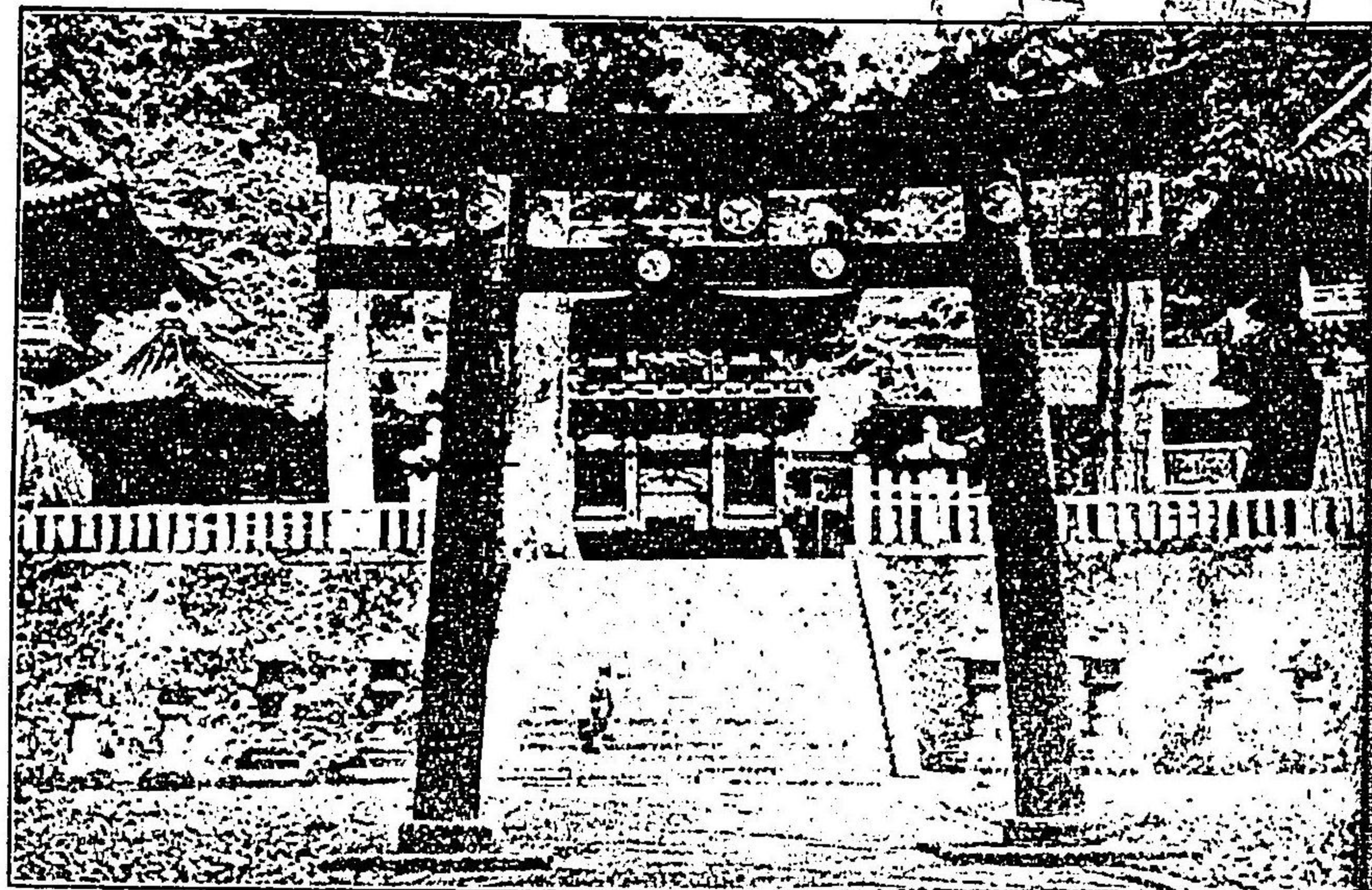
上野公園



淺草公園

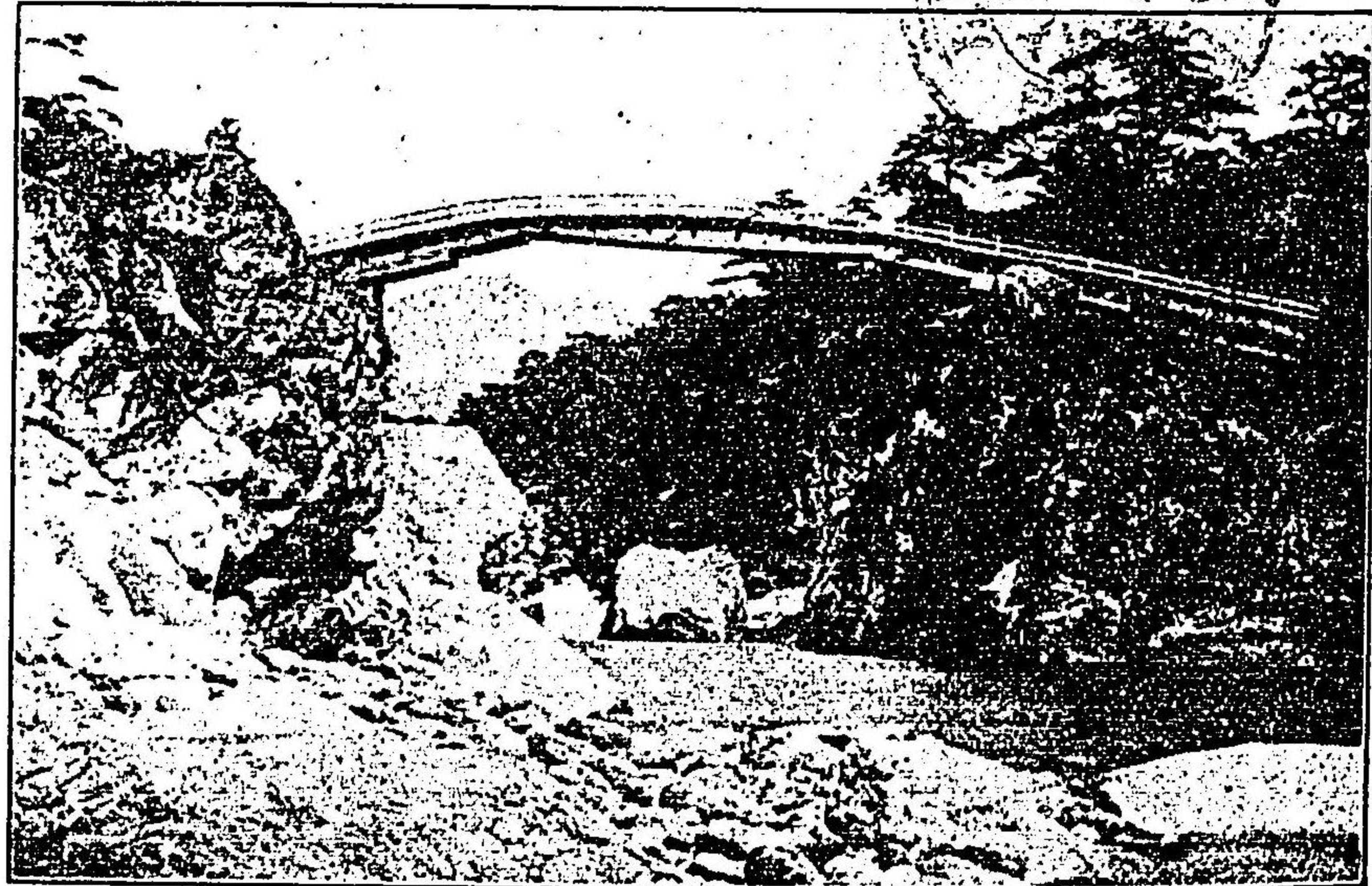
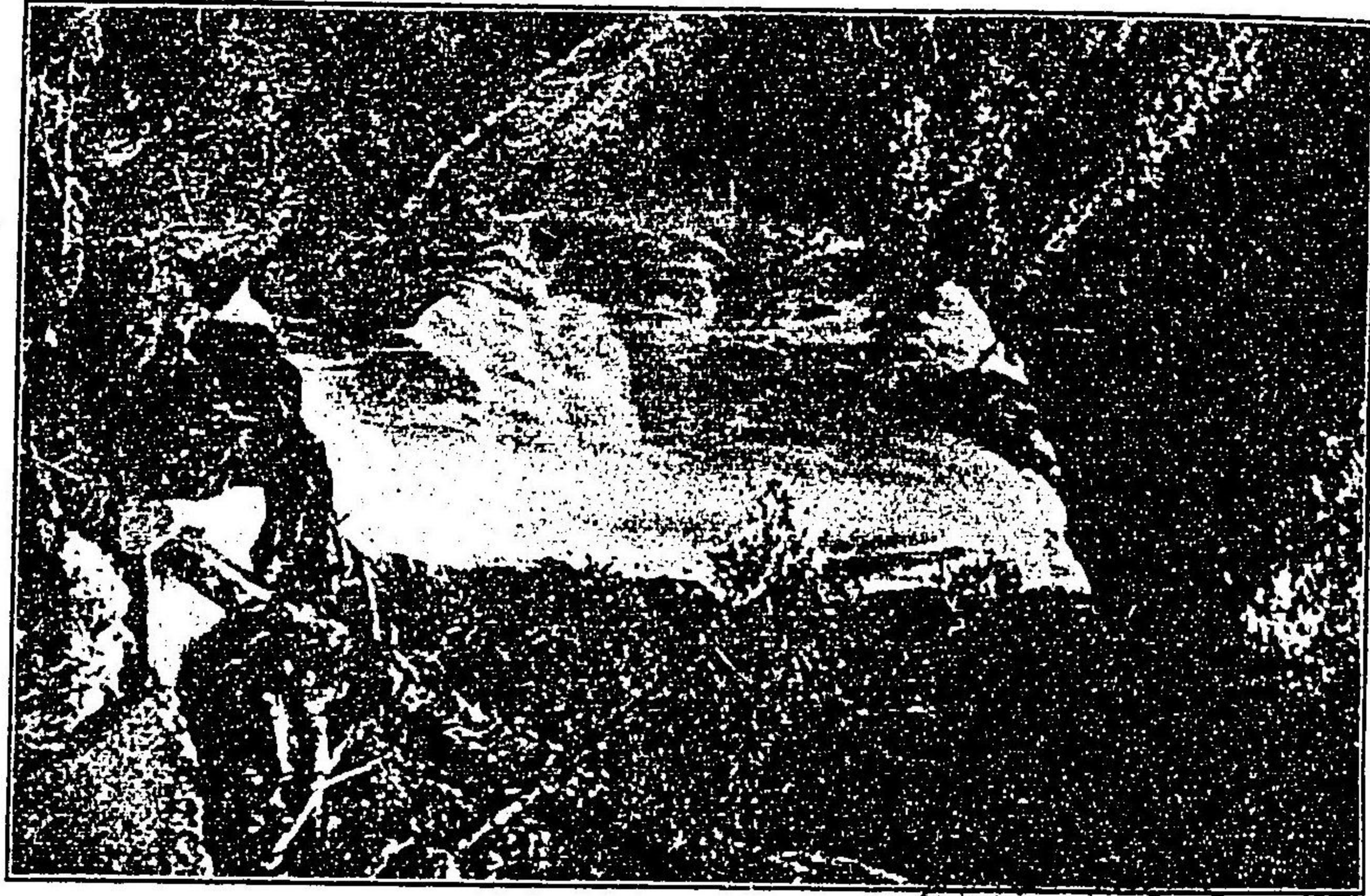


武州大宮氷川公園



日光陽明門

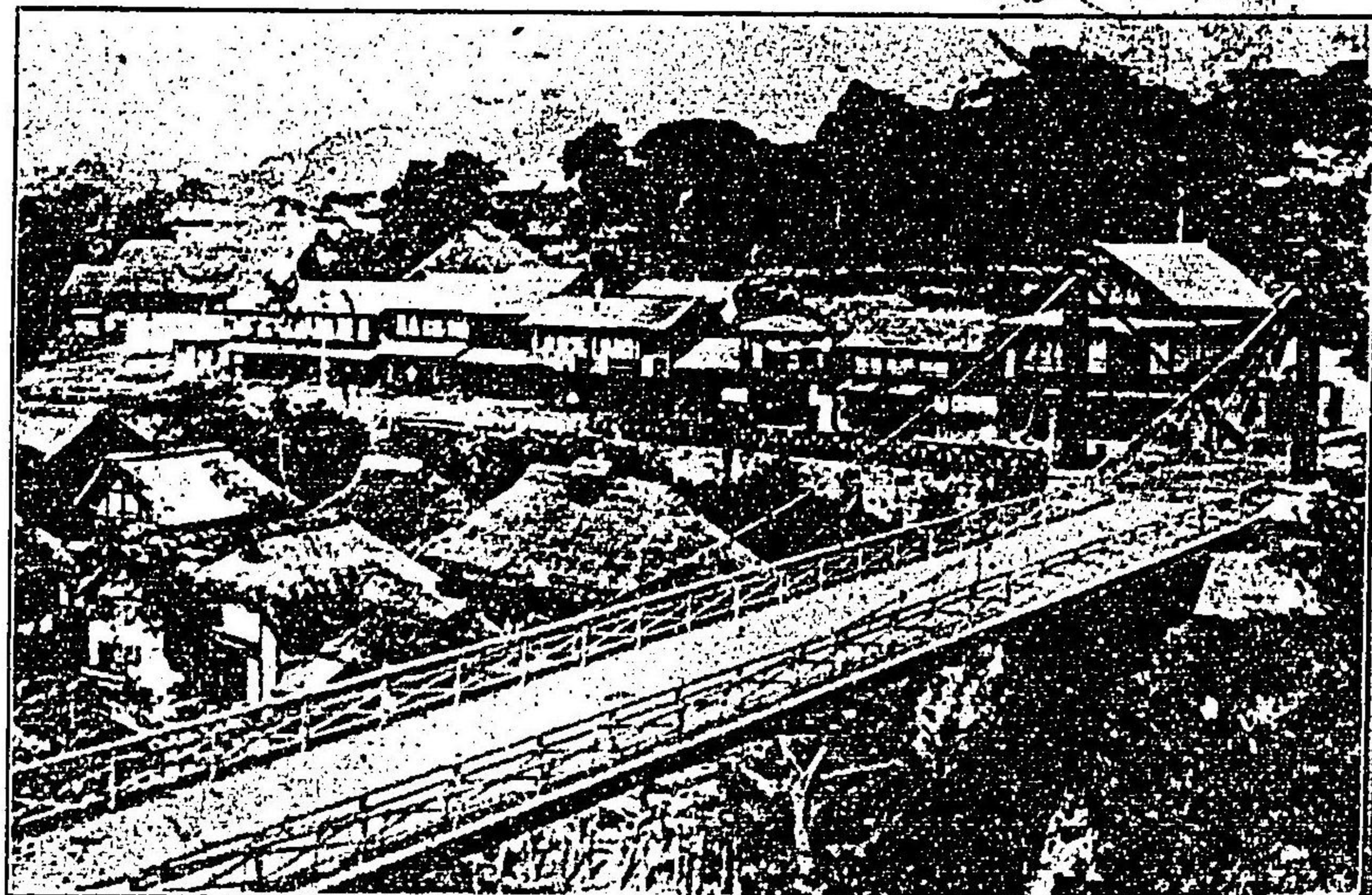
瀧の一日



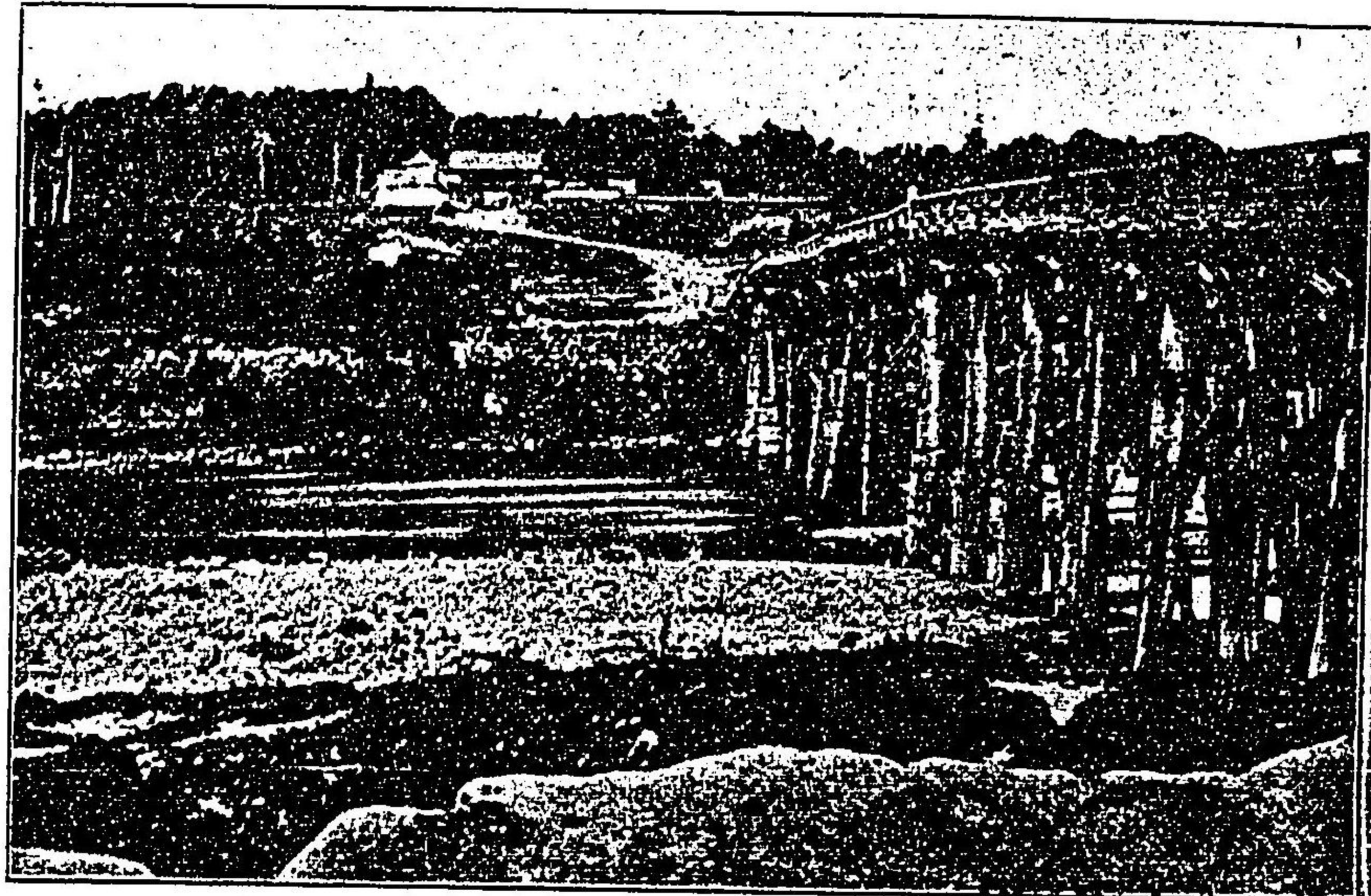
野州小佐越橋



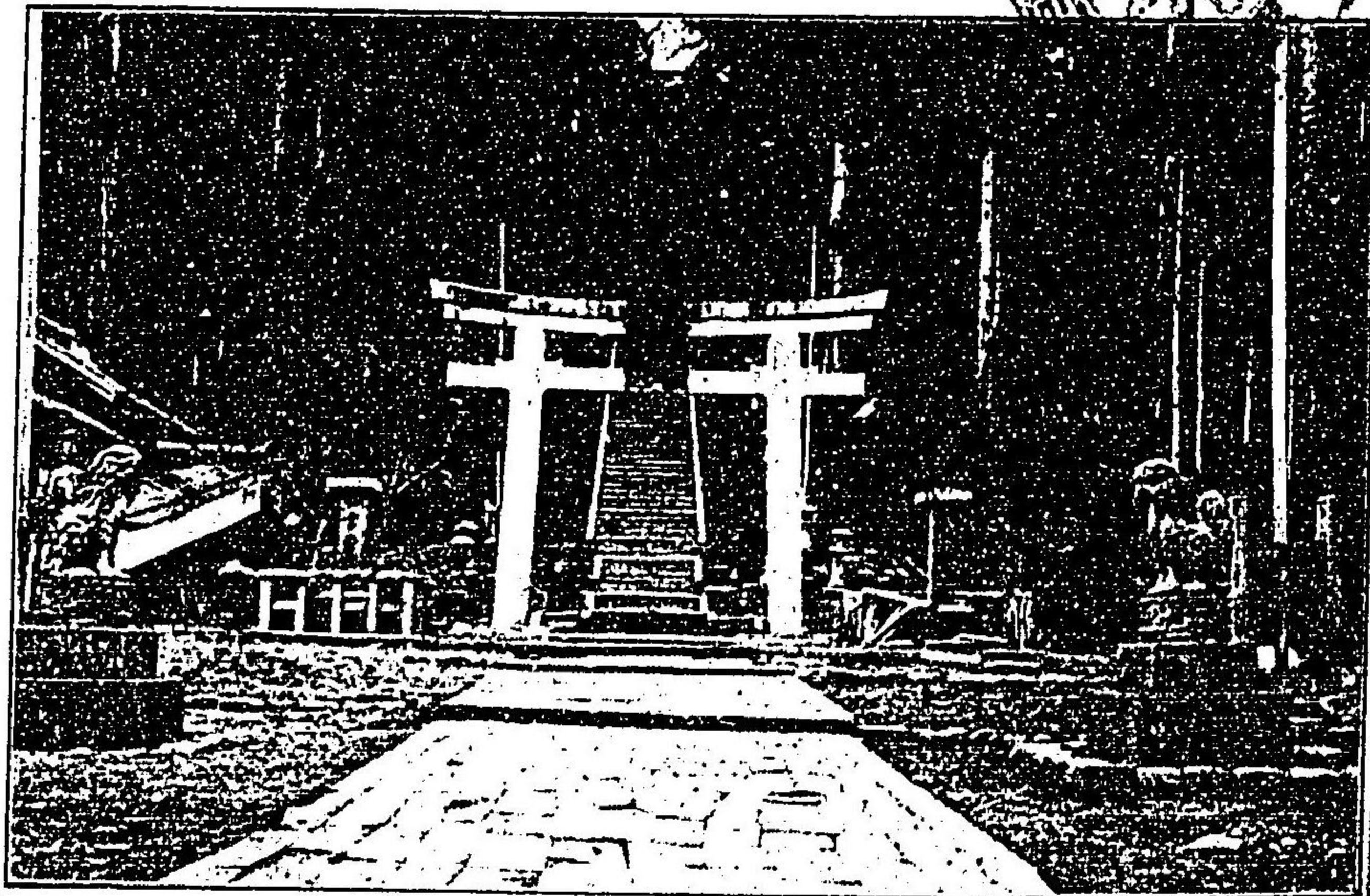
野州鹽原溫泉場



岩代飯坂の溫泉場



陸前仙臺の青葉城



陸前鹽釜神社





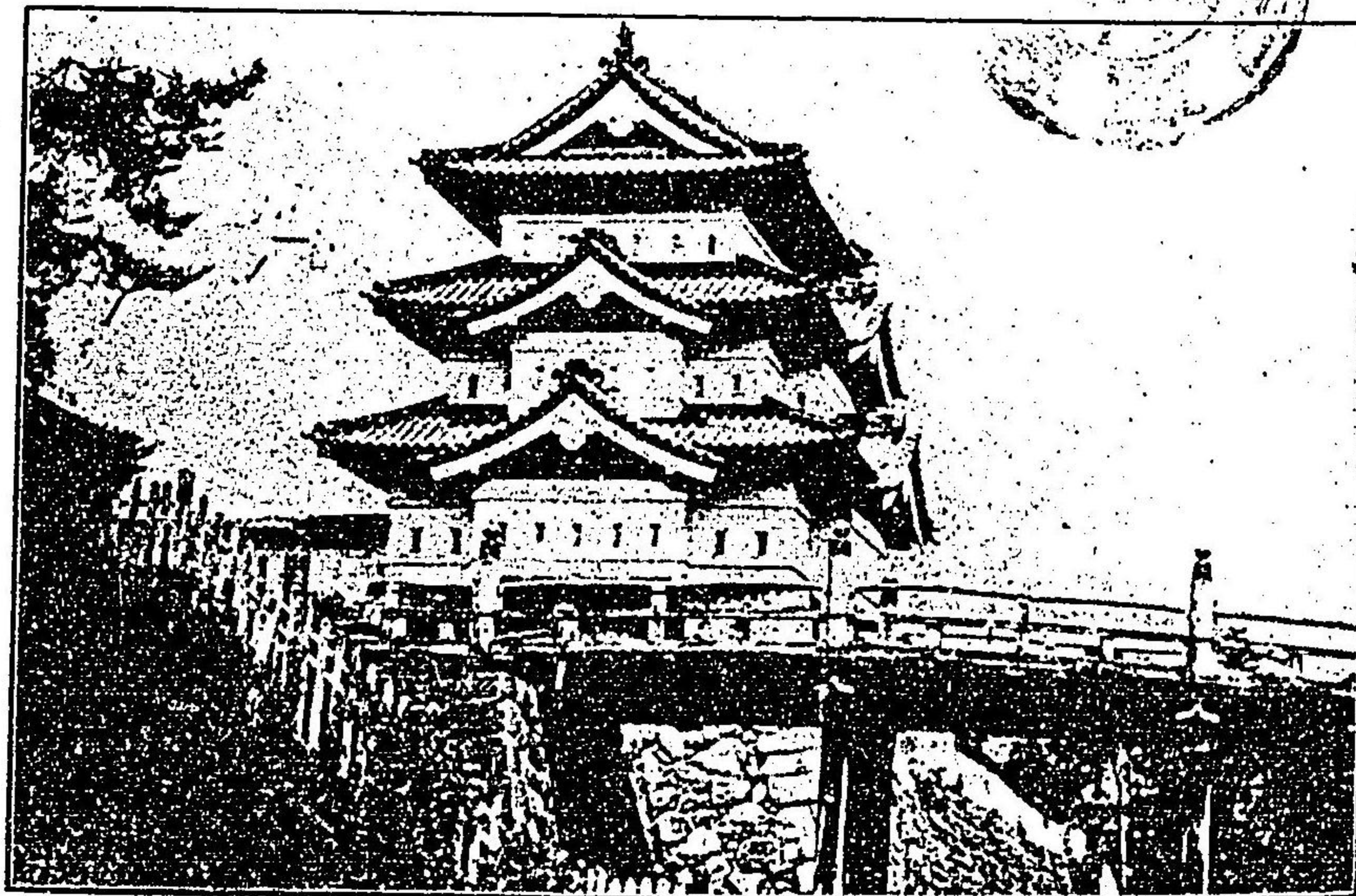
陸前松島の景



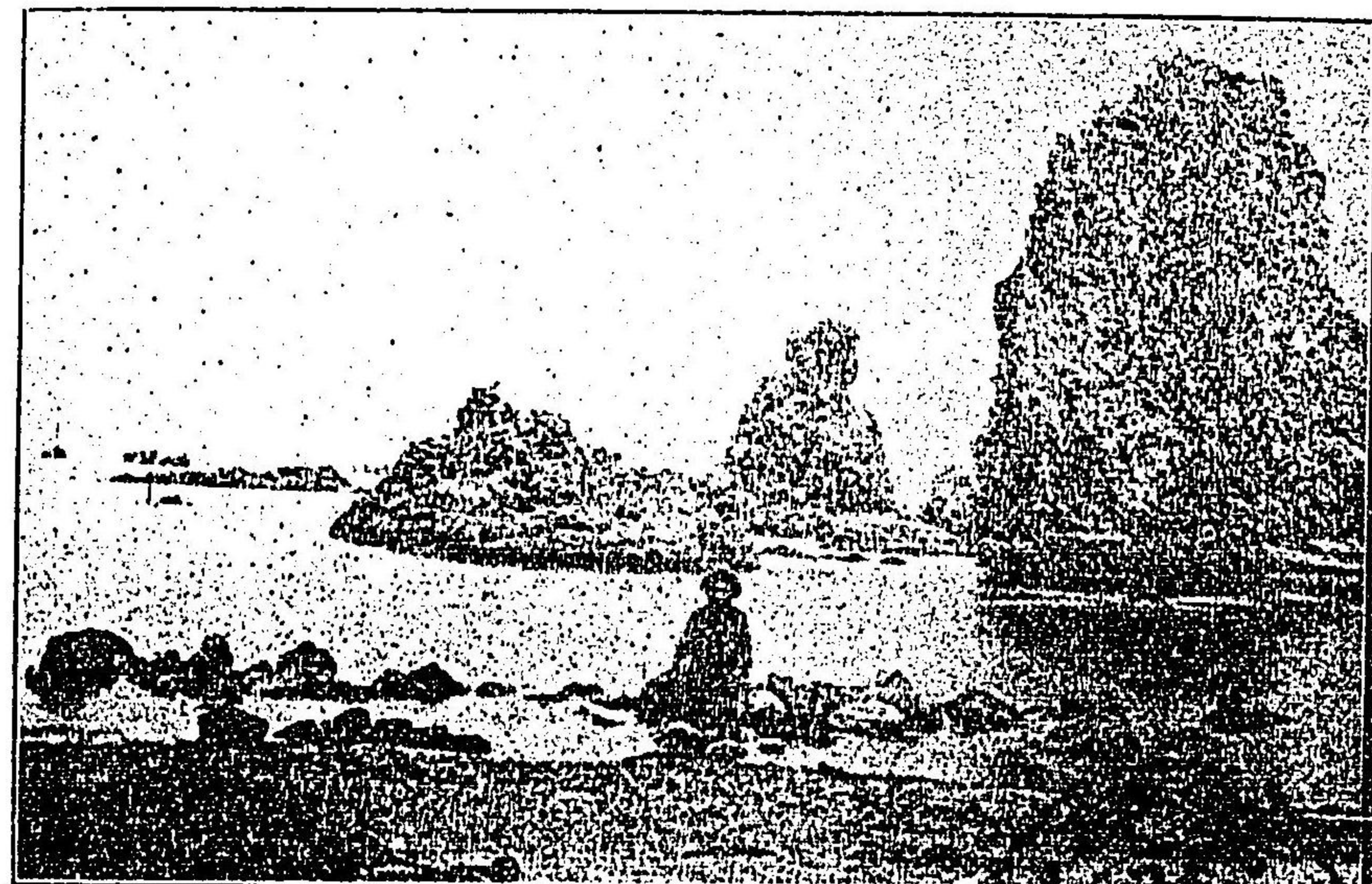
陸中石巻の港の景



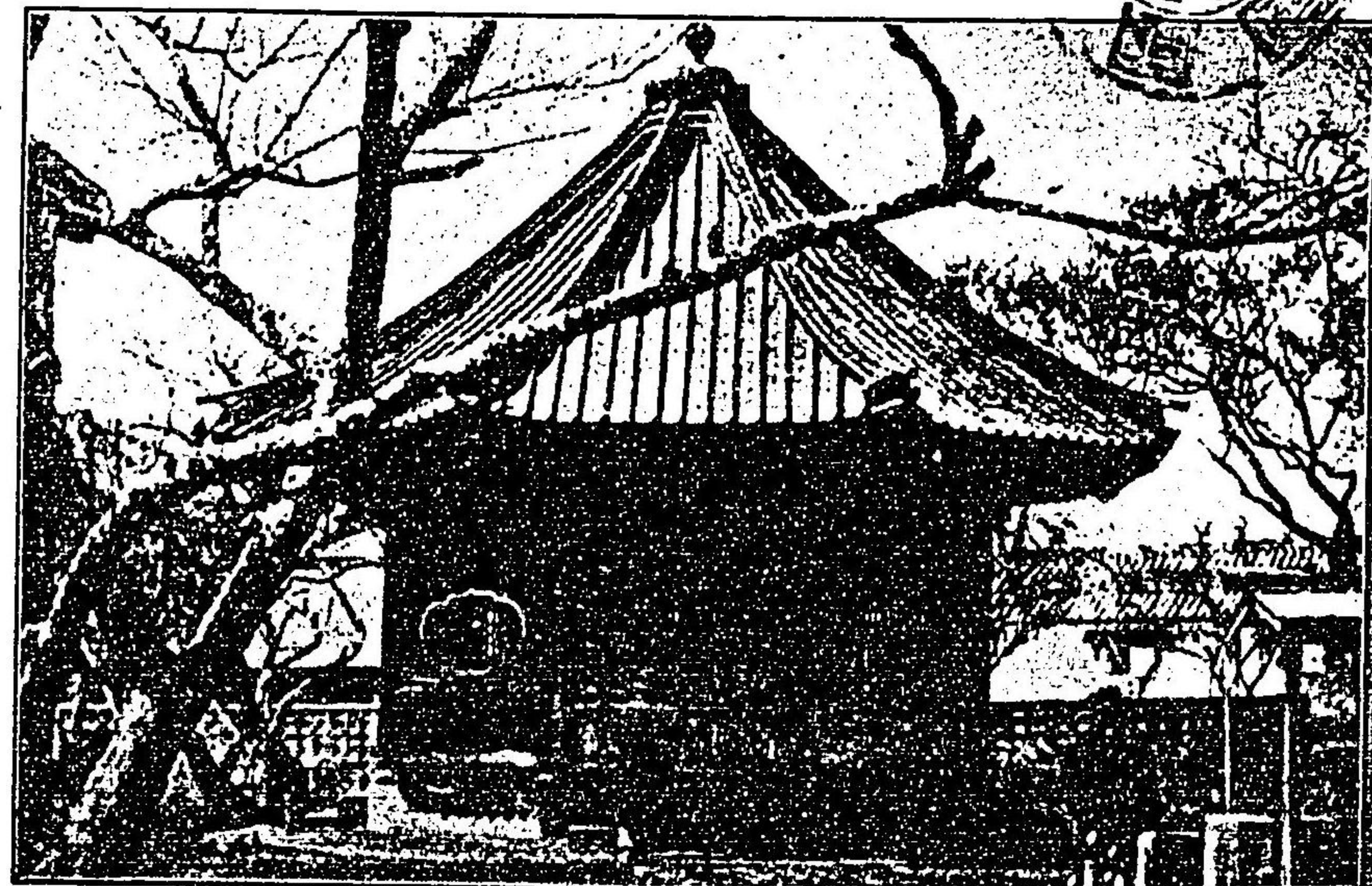
陸奥青森市の雪景



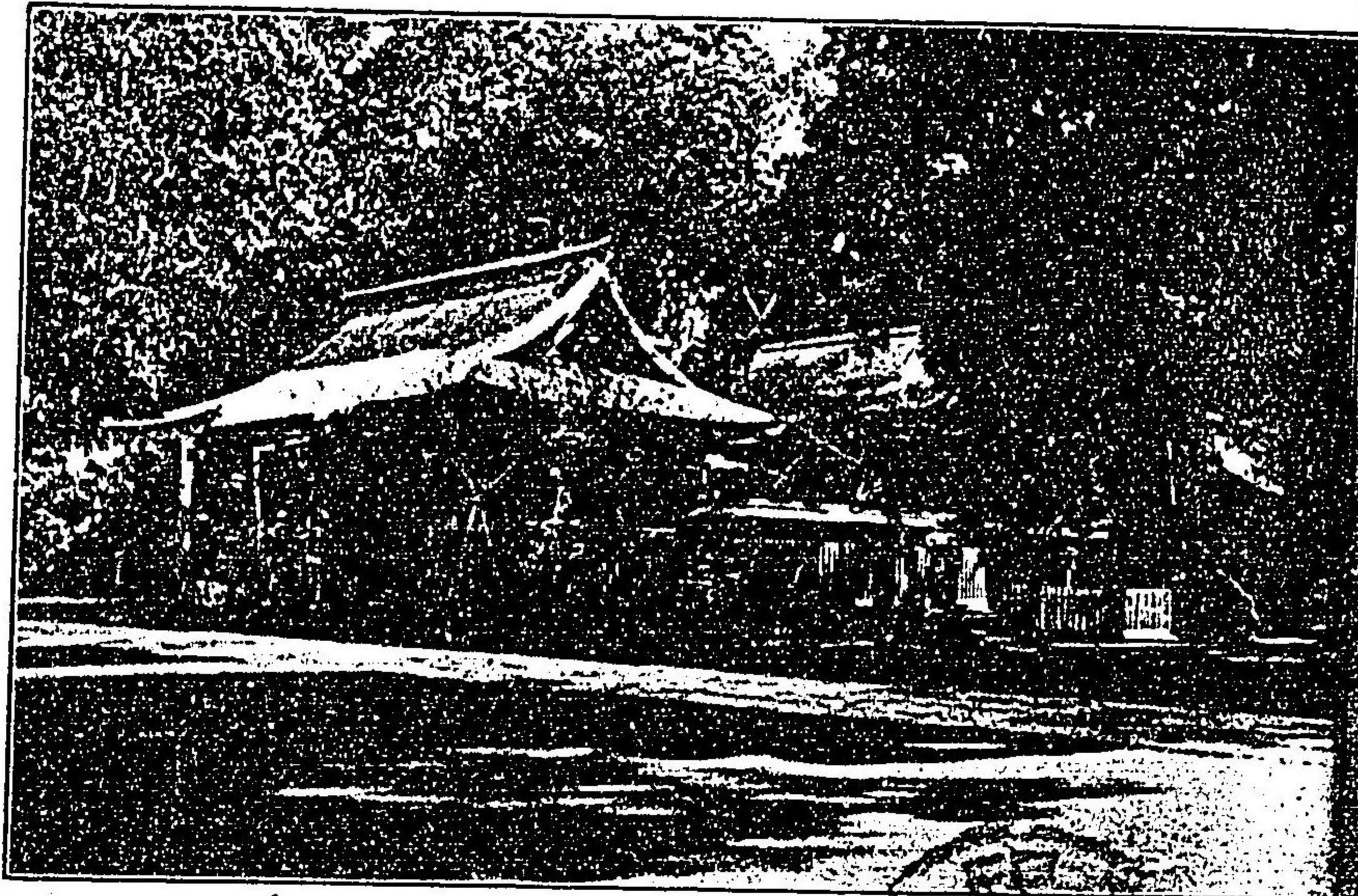
陸奥の弘前城



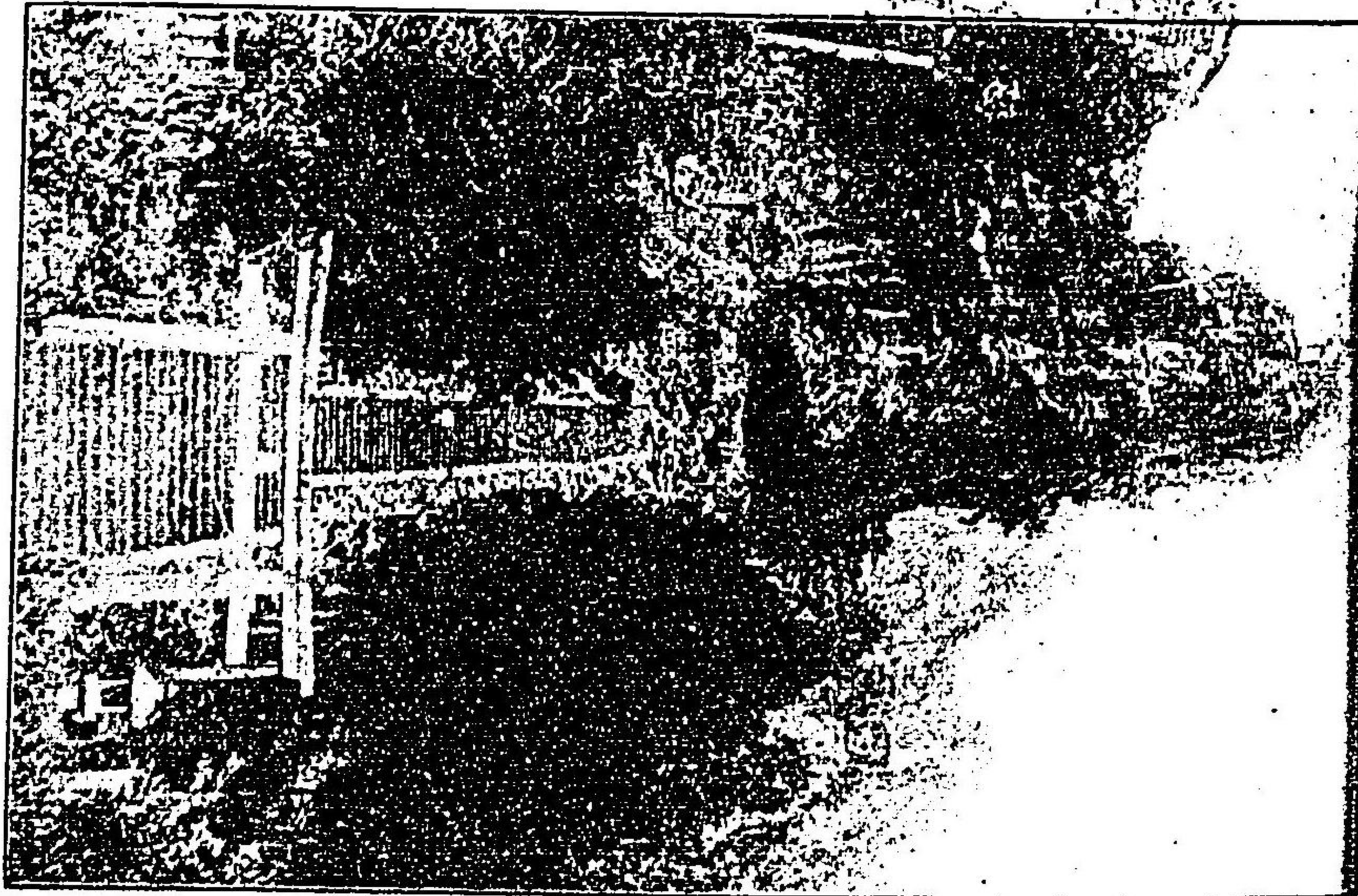
北海道小樽港



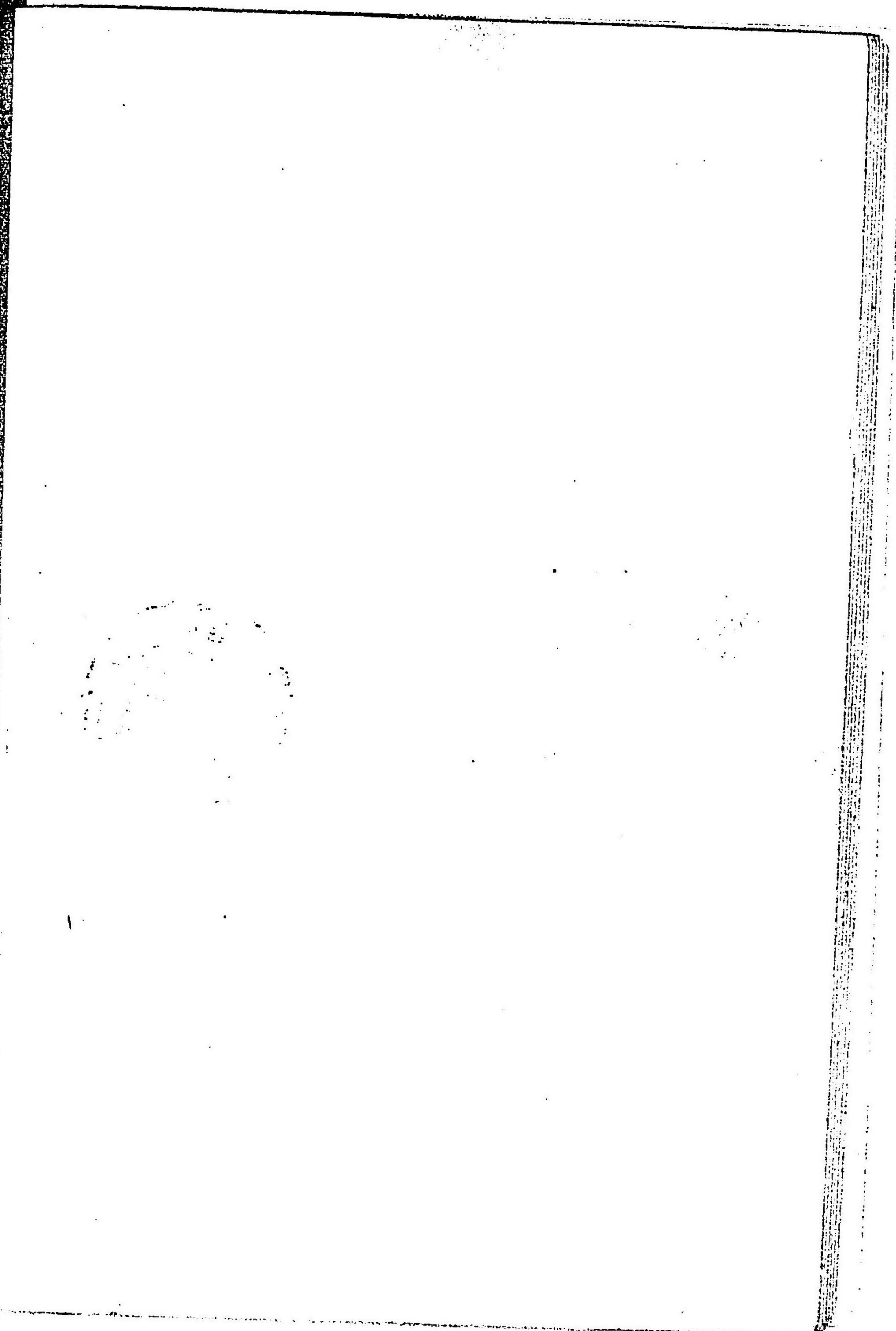
常陸水戸偕樂園

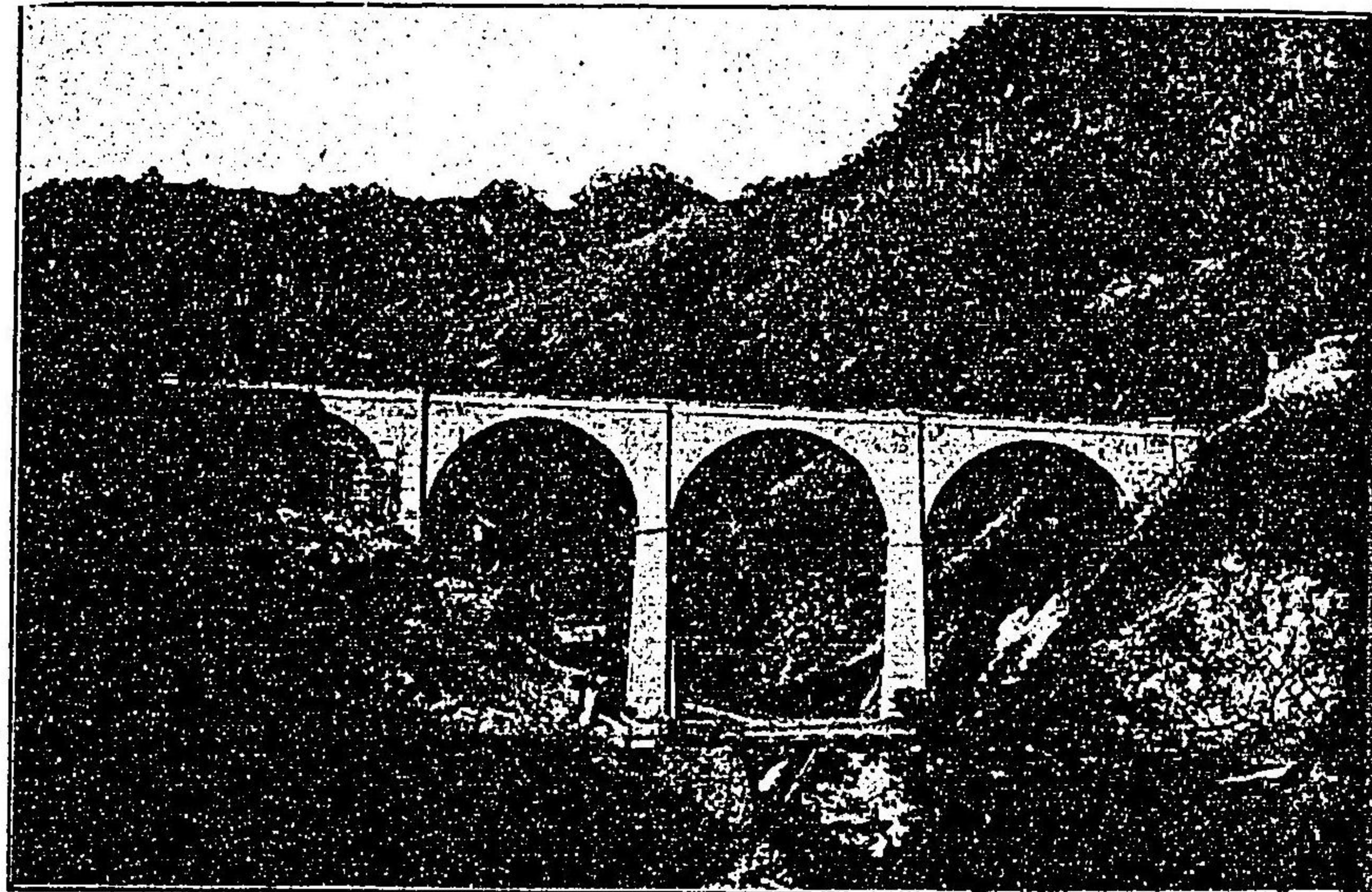


常陸鹿島神社



上山妙義山





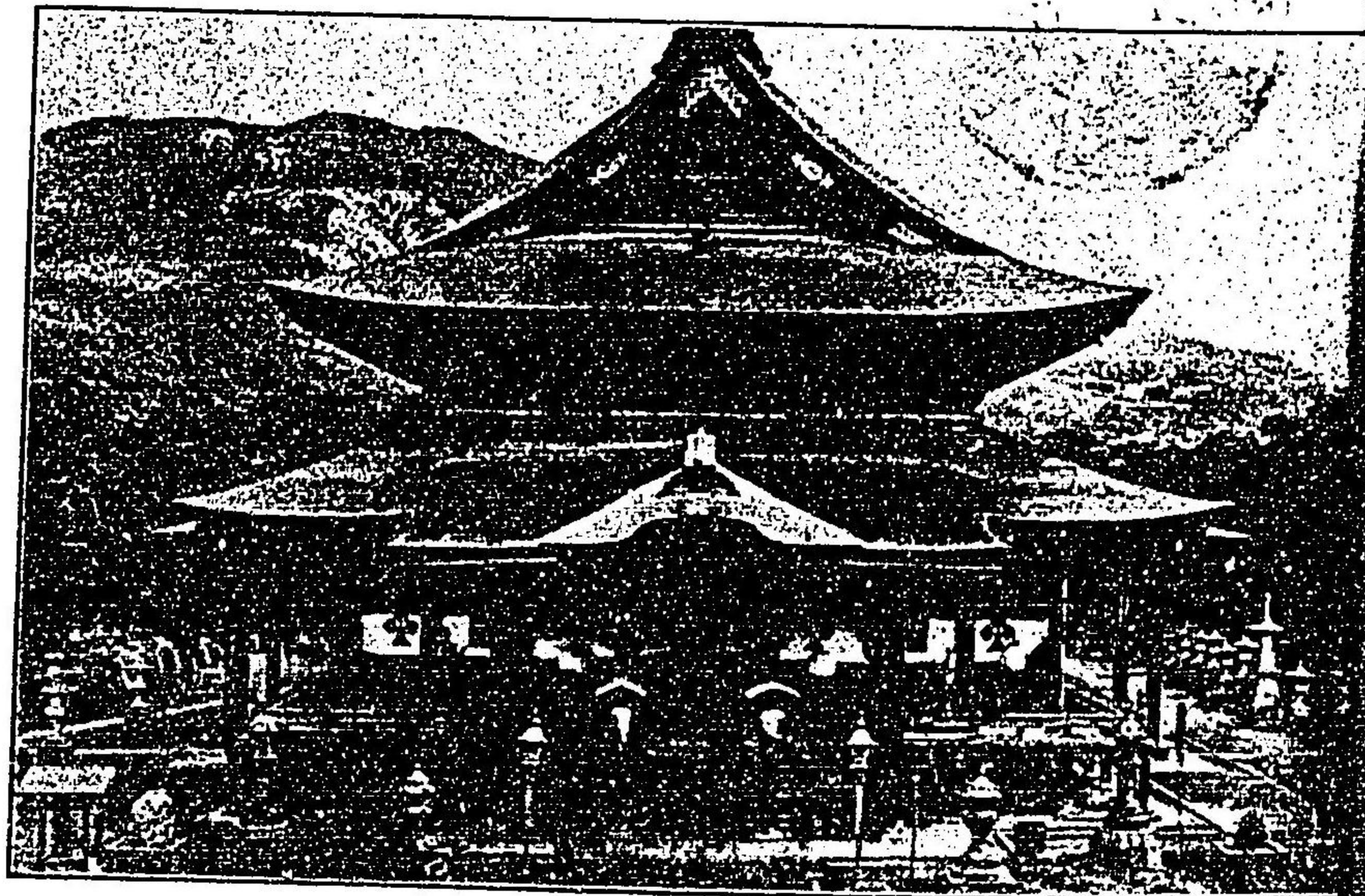
上州碓氷峠



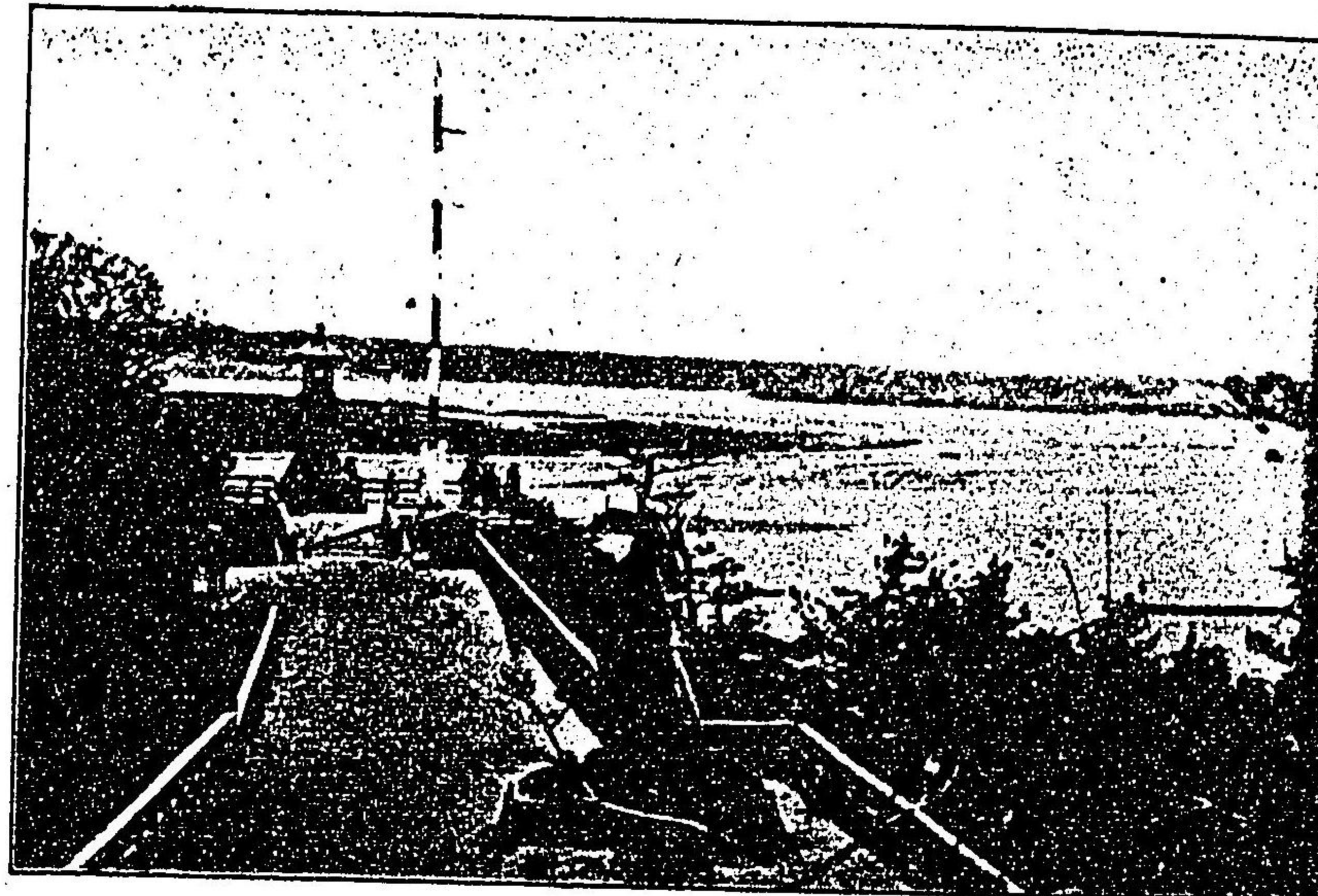
信州松本城



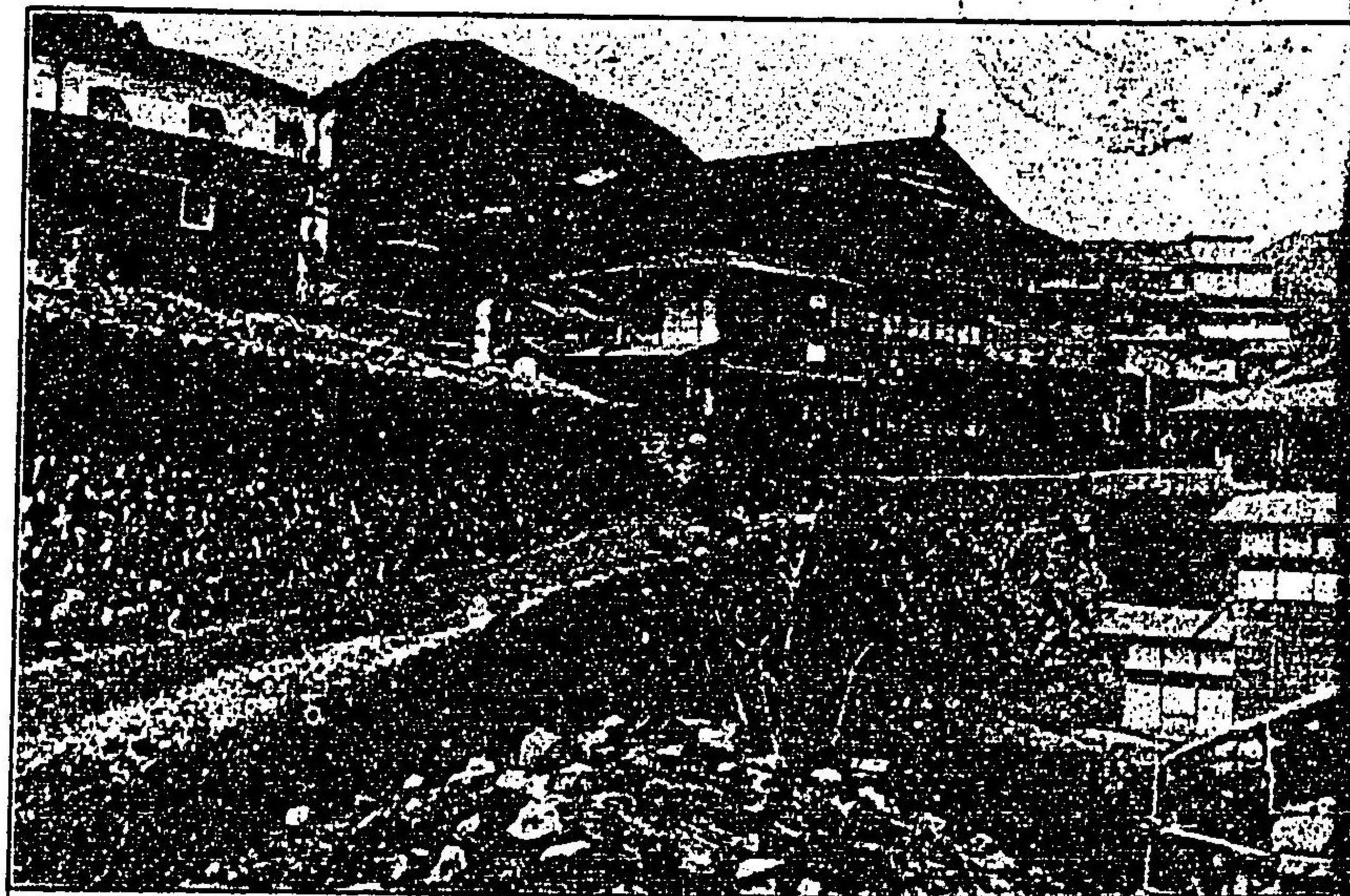
信州訪諏湖



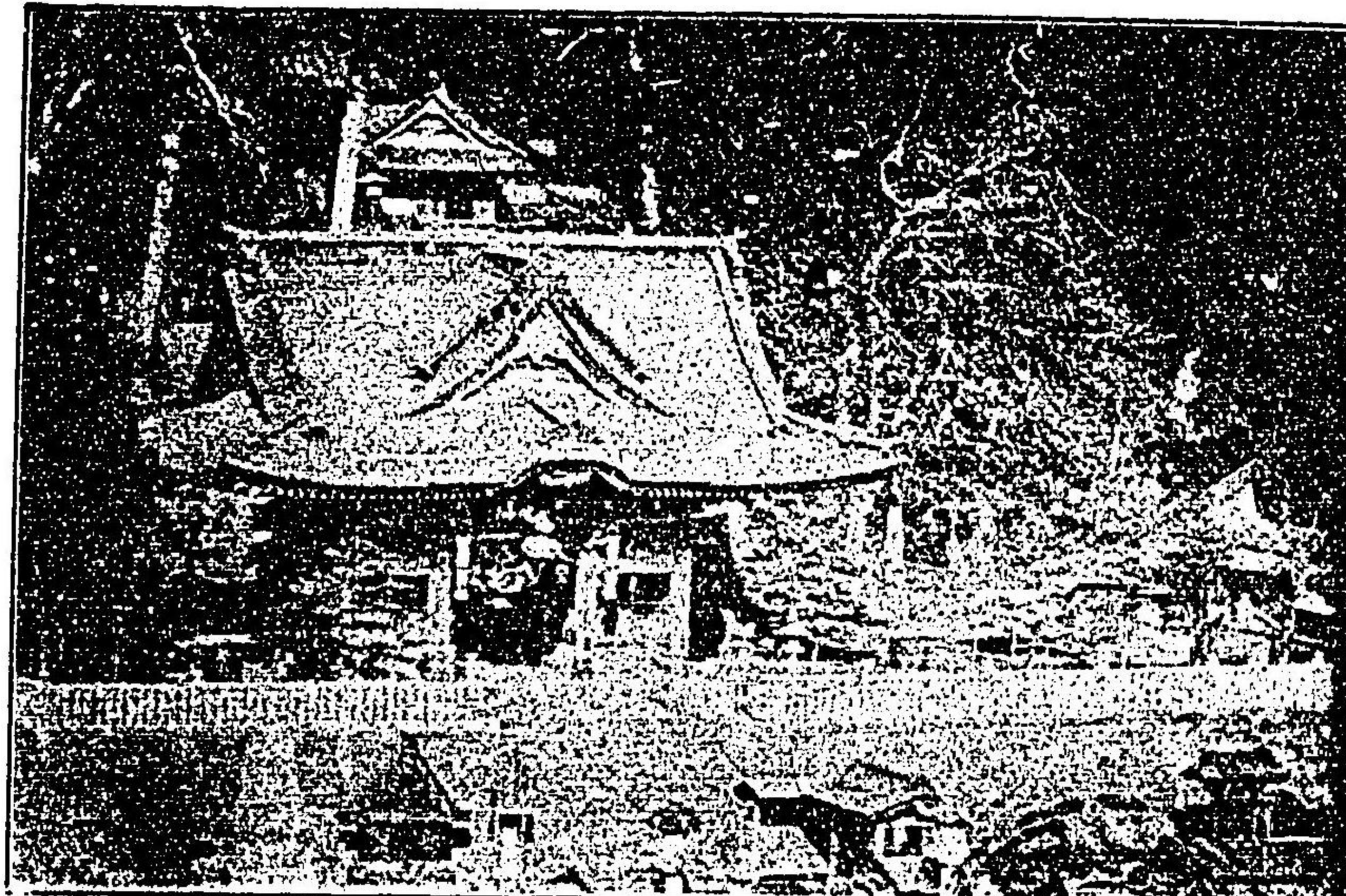
信州善光寺



越後酒田砂濱



上州伊香保温泉



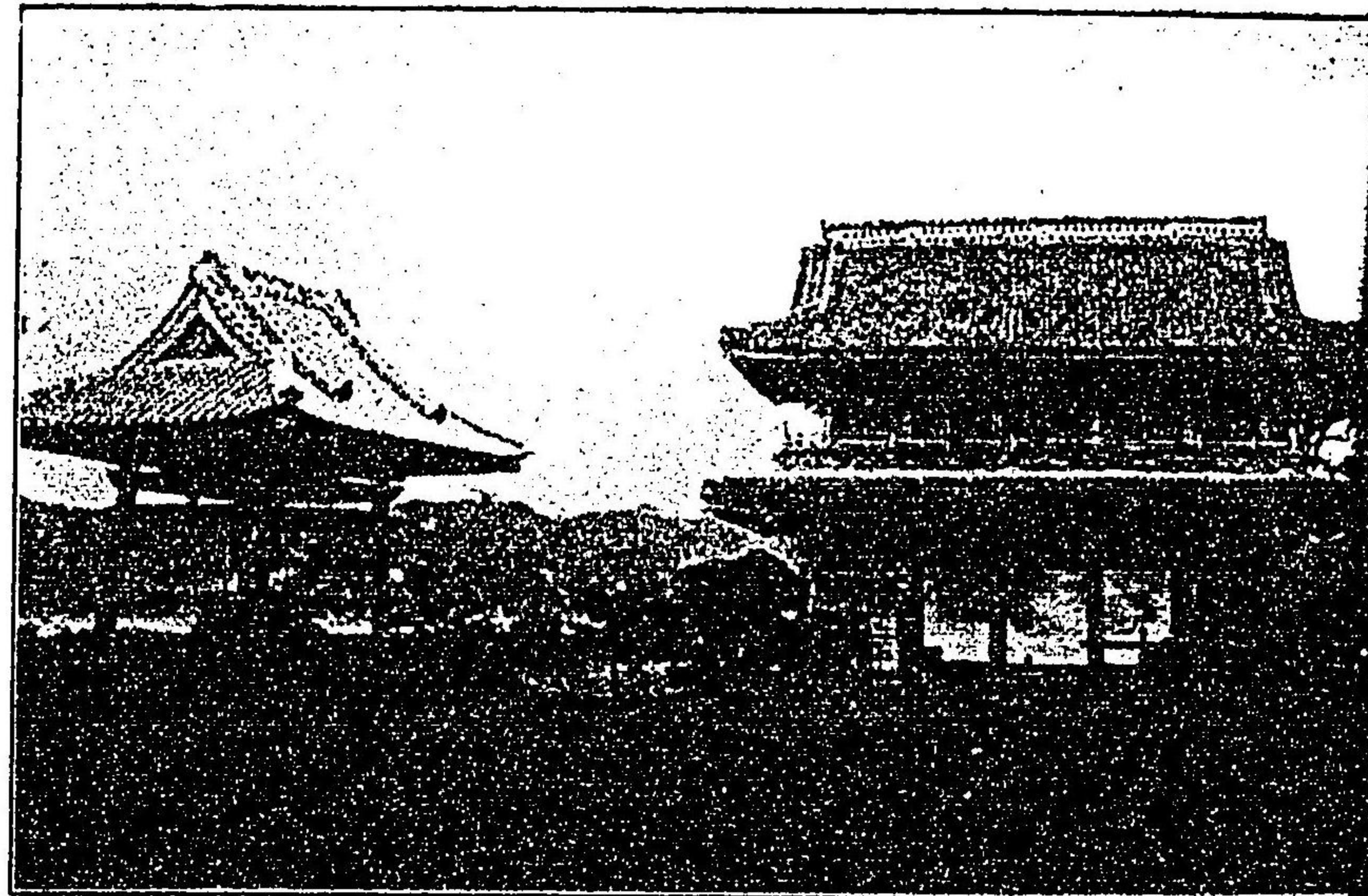
寺勝新山田武總下



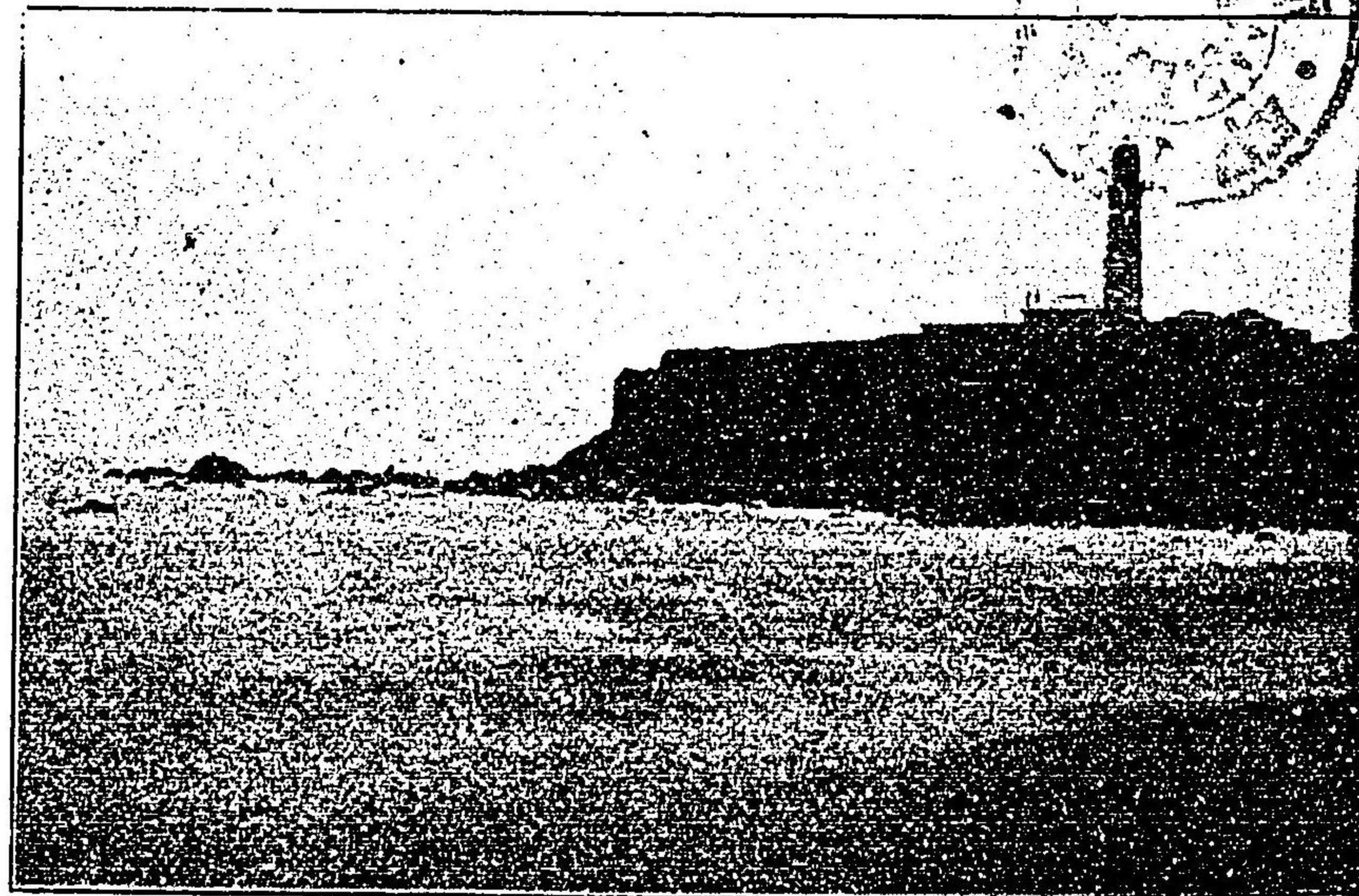
尊王二の山芝總下



東京府立第一



房州小港誕生寺



下總銚子港の燈臺



寺法妙内の堀州武



櫻の井金小州武

目次 (關東之部)

鐵道總記

鐵道哩表

東北鐵道之部

上野停車場
田端停車場
王子停車場
飛鳥山
王子神社
不動の瀑布
赤羽停車場
品川停車場
目黒停車場
目黒不動
祐天寺

澁谷村

新岩停車場

十二社

目白不動

鬼子母神

板橋停車場

戸田川鐵橋

川口停車場

善光寺

蕨停車場

浦和停車場

與野公園

大宮停車場

八本松

潮田山

遷田停車場

久喜停車場

栗橋停車場

靜御前の墓

古河停車場

鮭延寺

源三位の墓

間々田停車場

小山停車場

小金井停車場

藥師寺舊趾

石橋停車場

宇都宮停車場

二荒神社

鐵の碑

松川停車場
福島停車場
信夫文字摺石
北畠顯家の故蹟
飯坂温泉
大島城址
湯野村温泉
吾妻山
長岡停車場
桑折停車場
半田銀山
阿都賀志山
伊達大木戸
越河停車場
白石停車場
鎌先温泉
青根温泉

刈田嶽
峨々温泉
小原温泉
大河原停車場
遠刈田温泉
槻木停車場
岩沼停車場
増田停車場
實方中將の墓
埋木
仙臺停車場
青葉城址
經ヶ峰の靈廟
櫻岡公園
林子平の墓
榴ヶ岡
愛宕山

青葉神社
東照宮
燕澤蒙古の碑
宮城野
茂嶺の城址
秋田御湯
作並温泉
定義温泉
岩切停車場
多賀城址
野田の玉川
十符池
洞雲寺
鹽竈停車場
鹽竈神社
神釜社
松島の奇景

蒲生君平舊趾
大谷山
清嚴寺
粉河寺
大谷山
砥上停車場
鹿沼停車場
文挾停車場
今市停車場
藤原温泉
瀧温泉
川治温泉
籠目巖
日光停車場
東照宮
二荒山神社
大猷院殿の靈屋

霧降の瀑
慈観の瀧
華巖の瀧
中禪寺湖
湯本温泉
湯瀧
庚申山
湯本停車場
氏家停車場
鹽の屋の里
片岡停車場
矢板停車場
西那須野停車場
那須國造の碑
鹽原温泉
黒磯停車場
那須七湯

黒田原停車場
芦野古城址
豊原停車場
白河停車場
南湖
白川の關址
甲子温泉
湯本温泉
矢吹停車場
須賀川停車場
郡山停車場
安積山
本宮停車場
二本松停車場
安達ヶ原古蹟
嶽の湯温泉
安達太郎山

- 住吉神社
- 湯本停車場
- 三函温泉
- 温泉神社
- 綴停車場
- 平停車場
- 龍門寺
- 子鐵倉神社
- 草野停車場
- 專稱寺
- 如來寺
- 四ッ倉停車場
- 久ノ濱停車場
- 波立藥師堂
- 木ぬ美が浦
- 中村停車場
- 中村神社

- 水戸 鐵道之部
- 竈黃金山神社
 - 相馬神社
 - 松川浦十二景
 - 新地停車場
 - 坂元停車場
 - 吉田停車場
 - 互現停車場
 - 荒濱
 - 抽矢澤
 - 岩沼停車場
 - 小山停車場
 - 結城停車場
 - 玉日宮ノ墓
 - 川島停車場
 - 下館停車場

- 權尾山藥師堂
- 下妻町
- 光明寺
- 岩瀬停車場
- 櫻川の櫻花
- 富谷觀音
- 雨引山
- 筑波山
- 福原停車場
- 稻田神社
- 西念寺
- 笠間停車場
- 佐志能神社
- 片庭大杉
- 宍戸停車場
- 内原停車場
- 水戸停車場

- 水戸舊城
- 常磐公園
 - 常磐神社
 - 第二公園
 - 大洗海水浴
 - 大洗磯崎神社
 - 鹿島神社
 - 根本寺
 - 香取神宮
- 両毛鐵道之部
- 小山停車場
 - 栃木停車場
 - 錦着山公園
 - 太平山
 - 柏倉琴平社
 - 國分寺

- 三峰山
- 出流大悲窟
 - 岩舟停車場
 - 慈覺大師誕生の故蹟
 - 佐野停車場
 - 唐澤山の城趾
 - 八州園
 - 安蘇沼の古跡
 - 館林町
 - 足利町
 - 足利城趾
 - 大日如來
 - 足利公園
 - 小俣停車場
 - 桐生町
 - 新町鑛泉
 - 高津戸の奇景

- 大間々停車場
- 樽下及廣萱鑛泉
- 赤城山
- 湯の澤及び不動鑛泉
- 國定停車場
- 伊勢崎停車場
- 藥師山鑛泉
- 岩理及び入長岡鑛泉
- 高山神社
- 世良田
- 大胡城
- 駒形停車場
- 前橋停車場
- 臨江閣
- 藥水園
- 敷島河原
- 岩神

松島停車場
 石の巻港
 金華山
 利府停車場
 松島停車場
 鹿島台停車場
 小牛田停車場
 温泉村八湯
 瀨峯停車場
 石越停車場
 花泉停車場
 義經の墓
 一の關停車場
 平泉の由來
 判官館
 中尊寺
 五串の瀧

前澤停車場
 水澤停車場
 駒形神社
 鎮守府の址
 黒澤停車場
 花巻停車場
 石鳥谷停車場
 日誥停車場
 高水寺
 盛岡停車場
 陸奥館
 南部富士
 網張温泉
 好摩停車場
 沼宮内停車場
 弓羽清水
 中山停車場

小鳥谷停車場
 一ノ戸停車場
 未の松山
 禍岡停車場
 三ノ戸停車場
 尻内停車場
 八戸停車場
 長者山の風景
 源義經の遺物
 櫛引八幡
 下田停車場
 古間木
 沼崎停車場
 牧場
 壺の碑
 野邊地停車場
 馬門の戰場

陸前濱街道線

小湊停車場
 淺虫停車場
 青森停車場
 善知鳥神社
 外ヶ濱
 油川
 田端停車場
 南千住停車場
 北千住停車場
 西新井大師堂
 龜有停車場
 金町停車場
 柴又帝釋天
 松戸停車場
 柏停車場

我孫子停車場
 日天子社
 取手停車場
 大鹿城址
 本多重次の墓
 藤代停車場
 牛久停車場
 荒川沖停車場
 土浦停車場
 土浦城址
 平國香墓
 弘法井
 神立停車場
 高濱停車場
 石岡停車場
 羽鳥停車場
 岩間停車場

友部停車場
 佐和停車場
 大沼停車場
 下孫停車場
 助川停車場
 八幡清水
 裸島
 川尻停車場
 高萩停車場
 八幡神社
 手綱の濱
 磯原停車場
 關本停車場
 佐波々神社
 勿來關趾
 植田停車場
 泉停車場

住吉神社
湯本停車場
三函温泉
温泉神社
綴停車場
平停車場
龍門寺
子鉄倉神社
草野停車場
專稱寺
如來寺
四ッ倉停車場
久ノ濱停車場
波立薬師堂
木ぬ美が浦
中村停車場
中村神社

龍黄金山神社
相馬神社
松川浦十二景
新地停車場
坂元停車場
吉田停車場
互現停車場
荒濱
抽矢澤
岩沼停車場
水戸 鐵道之部
小山停車場
結城停車場
玉日宮ノ墓
川島停車場
下館停車場

權尾山藥師堂
下妻町
光明寺
岩瀬停車場
櫻川の櫻花
富谷觀音
雨引山
筑波山
福原停車場
稻田神社
西念寺
笠間停車場
佐志能神社
片庭大杉
宍戸停車場
内原停車場
水戸停車場

水戸舊城
常磐公園
常磐神社
第二公園
大洗海水浴
大洗磯崎神社
鹿島神社
根本寺
香取神宮
両毛鐵道之部
小山停車場
栃木停車場
錦着山公園
太平山
柏倉琴平社
國分寺

三峰山
出流大悲窟
岩舟停車場
慈覺大師誕生之故蹟
佐野停車場
唐澤山の城趾
八州園
安蘇沼の古跡
館林町
足利町
足利城趾
大日如來
足利公園
小俣停車場
桐生町
新町鑛泉
高津戸の奇景

大間々停車場
樽下及廣萱鑛泉
赤城山
湯の澤及び不動鑛泉
國定停車場
伊勢崎停車場
藥師山鑛泉
岩理及び入長岡鑛泉
高山神社
世良田
大胡城
駒形停車場
前橋停車場
臨江閣
藥水園
敷島河原
雲神

利根橋
 龍海院
 八幡社
 雙兒山
 東照宮
 生井鑛泉
 伊香保温泉
 物聞山
 船入山
 二ツ嶽蒸風呂
 澤渡温泉
 四萬温泉
 川原湯温泉
 草津温泉
 榛名山

富岡鐵道之部

高崎停車場
 山名停車場
 吉井停車場
 多胡の碑
 多胡ノ城趾
 辛科神社
 仁叟寺
 福島停車場
 富岡停車場
 金剛院
 一ノ宮停車場
 貫名神社
 蛇ノ井停車場
 下仁田停車場

北越鐵道之部

上尾停車場
 浦和停車場
 桶川停車場
 鴻の巣停車場
 勝願寺
 箕田八幡社
 吹上停車場
 熊谷停車場
 蓮生山熊谷寺
 鎮守彌左衛門稻荷
 深谷停車場
 岡部六彌太の舊跡
 本庄停車場
 新町停車場
 陽雲院
 藤岡町
 多胡之碑

淨法寺鑛泉
 鬼石の奇景
 高崎停車場
 高崎城趾
 大信寺
 定國寺
 清水の觀音
 佐野舟橋舊跡
 カラメキ温泉
 前橋停車場
 飯塚停車場
 八幡村八幡宮
 安中停車場
 狛谷津鑛泉
 里見城趾
 鷹の巢山の城址
 磯部停車場

磯部温泉
 佐々木盛綱城趾
 佐々木盛綱の墓
 大野九郎衛の墓
 横野
 松井田停車場
 妙義山
 郷原温泉
 横川停車場
 碓氷嶺
 霧積温泉
 輕井澤停車場
 淺間山
 御代田停車場
 岩村田町
 小諸停車場
 田中停車場

上田停車場
 上田城趾
 松本停車場
 淺間温泉
 辰城停車場
 姨捨山
 宗良親王鑿塚
 屋代停車場
 松代停車場
 篠の井停車場
 犀川停車場
 長野停車場
 善光寺
 川中島古戰場
 戸隱山
 豊野停車場
 湯田中温泉

象山先生の碑
澁温泉
神明山
牟禮停車場
柏原停車場
芙蓉湖
關川
關川温泉
田口停車場
赤倉温泉
關山停車場
關山温泉
新井停車場
高田停車場
謙信の軍扇
直江津停車場
春日山城趾

林泉寺
國分寺
春日新田停車場
犀潟停車場
瀧町停車場
柿崎停車場
鉢崎停車場
柏崎停車場
三島神社
北條停車場
不動の瀧
長岡町
草生津町
金崎神社
火の出る井
本成寺
三條町

一ノ木戸停車場
加茂停車場
青海神社
田上温泉
矢代田停車場
新津停車場
五泉町
草生水
柄目木火の井
龜田停車場
沼垂停車場
白山神社
新潟市
奥羽鐵道之部
青森停車場
新城停車場

妙見堂
炭焼藤太の舊趾
大釋迦停車場
浪岡停車場
金光上人の墓
黒石停車場
黒石神社
中野溪
板留温泉、温泉
川部停車場
猿賢城趾
大光寺城趾
弘前停車場
東照宮
八幡宮、熊野神社
長勝寺
高照神社

岩木山神社
岩木山
嶽の湯温泉
長慶天皇御陵
大澤停車場
乳井毘沙門堂
石川城趾
藏館温泉
碓夕關停車場
大鰐温泉
阿闍羅山
太田鐵道之部
水戸停車場
青柳停車場
三國瀧
清水瀧

下菅谷停車場
上菅谷停車場
上宮寺
額田停車場
久慈川停車場
總武鐵道之部
本所停車場
龜戸神社
龜戸臥龍園
柳島妙見堂
四之橋牡丹園
弘法寺
眞間の繼橋
手兒奈堂
國府臺
總臺寺

松戸町
本行徳停車場
中山停車場
法華經寺
妙正夕池
曾谷妙見堂
勝間田ノ池
船橋停車場
意富比神社
慈雲寺
慕張停車場
稻毛海水浴
千葉停車場
猪の鼻臺
千葉神社
大日寺
來迎寺

登渡神社
羽衣の松
四ツ街道停車場
佐倉停車場
佐倉城趾
將門山古城趾
海隣寺
八街停車場
成東停車場
八幡神社
不動院
鳴戸城趾
光明寺
松尾停車場
横芝停車場
觀音寺
八日市場停車場

西光寺
千瀉停車場
幸藏寺
旭町停車場
眞福寺
飯岡停車場
飯岡岬
玉崎神社
松岸停車場
犬吠夕崎
銚子停車場
房總鐵道之部
千葉停車場
寒川停車場
白旗神社
寒川神社
千葉寺

蘇我野停車場
小弓館趾
野田停車場
土氣停車場
土氣城趾
大綱停車場
本納停車場
橘神社
茂原停車場
八幡神社
茂原寺
一ノ宮停車場
玉前神社
觀明寺
成田鐵道之部
佐倉停車場
酒々井停車場

東光寺
清光寺
淨樂寺
大佛頂寺
宗吾靈神
麻賀多神社
成田停車場
同不動堂
滑川停車場
東三井寺
耀窟神社
兒場
滑川觀音
朝日夕淵
菊水山
小御門神社
郡停車場

佐原停車場
甲武鐵道之部
新宿停車場
中野停車場
堀の内祖師
新井藥師
幡ヶ谷不動
荻窪停車場
境停車場
深大寺村
小金井櫻
田無町
國分寺停車場
醫王山國分寺
貫井辨財天
府中停車場

大國魂神社
 谷保天神社
 百草園
 立川停車場
 普濟寺
 日野停車場
 八玉子停車場
 子安明神
 散田真覺寺
 高雄山
 川越鐵道之部

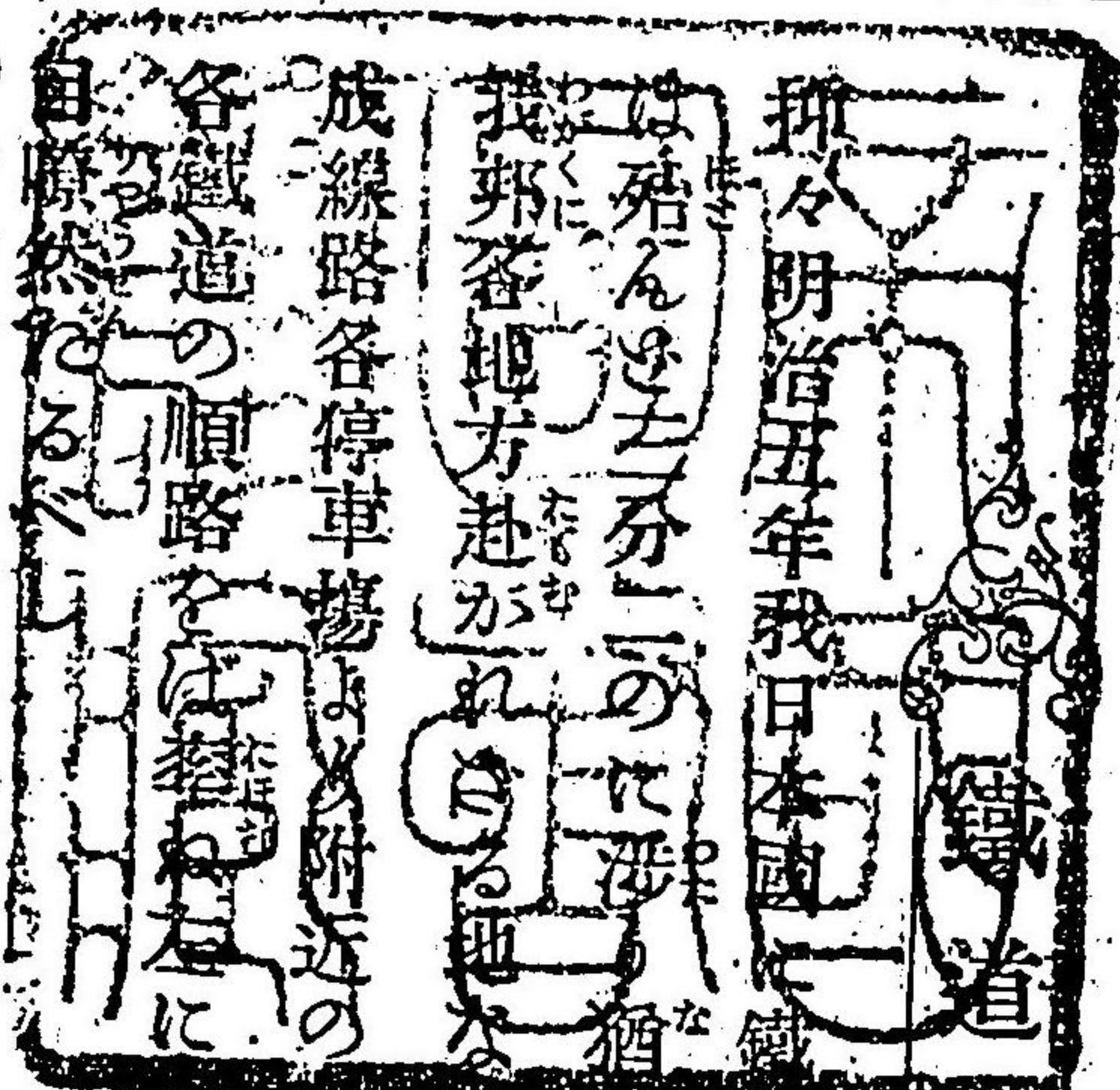
小川停車場
 東村山停車場
 所澤町
 永源寺
 小手指原古戰場
 物部天神社
 山口觀音堂
 入會停車場
 入間川停車場
 堀兼停車場
 川越停車場
 三芳野神社

喜多院
 蓮馨寺
 入間の里
 青梅鐵道之部
 拜島停車場
 羽村停車場
 水道碑記
 網代鐵泉
 青梅停車場
 御嶽山
 小河内温泉

目次終

日本全國鐵道
 名所案内
 關東之部

東京 野崎 左文 著



班々明治五年我日本國鐵道汽車の開けしより以來目下全國既成の線路は殆んど五分の一のたゞに猶ほ工事中のものあり計畫中のものありて今や我邦各地方赴かれりる地なきに至る又至大なる便宜とは云ふべし今其既成線路各停車場より附近の名所舊蹟を續記し以て殊更遊歴者の便とす亦各鐵道の順路を右に掲ぐと雖も猶ほ卷首の線路圖を參照すれば一自瞭然たるべし

東北鐵道 日本鐵道會社の敷設にして上野停車場(東京)を起點とし上野公園の背後を繞り田端(茲より千住)に出て常陸の土浦を経て水戸に

至り夫より濱街道に出づる支線あり)王子の二驛を経て赤羽に至り(茲より品川行支線あり)岩淵より荒川を渡り川口、蕨、浦和を経て大宮に達し(茲より左に分れて高崎並に前橋、磯部、直江津、及び北越等に至る路線あり)夫より右折して蓮田、久喜田、栗橋等を過ぎ利根川を横ぎり古河、野木、間々田を経て小山に至り(茲より右には水戸行左には前橋行の支線あり)夫より小金井、石橋、雀ノ宮等を経て宇都宮に達す(茲より日光への支線あり)同所より岡本を過ぎ鬼努川を渡り氏家、片岡、矢板を経て針生隧道を過ぎ那須野の廣原を經過し黒磯、黒田原、豊原等を経て白河に至り須賀川を過ぎて阿武隈川に接し郡山、二本松其他の諸村を經過し福島に達し夫より長岡縣外二驛を経て白石に至り白石川に沿ひ船岡に於て此川を渡り槻ノ木より岩沼に至り(此にて濱街道の支線と連絡す)夫より仙臺市に達し岩切には鹽竈線あり松島より數驛を経て一ノ關に出て街道と北上川の間を進行し前澤外數驛を過れば盛岡の西に

至る沼宮内より大塚谷の隧道を過ぎ中山に至り中山隧道を經過し(此邊最高處にして海面を抽く一千四百九十呎)夫より瀧驛、小繋等の隧道を潜り小鳥谷に至り馬淵川を横ぎり一ノ戸、福岡、三ノ戸、劔先等を過ぎ尻内に達す(茲より湊への支線あり)小鳥谷より茲に至る間馬淵川を渡る十二回隧道を穿つ四所、夫より沼崎、野邊地を経て街道を横ぎり小湊を過ぎ浅虫に達し青森灣の岸に沿ひ數驛を經過して青森に到る之より官設奥羽鐵道に联接す

(東北線には數多の分岐線あり卷首の線路圖及び哩表を参照すべし)

甲武鐵道 は飯田町(東京)を起點とし牛込、市ヶ谷、四ツ谷、信濃町等の諸驛を過ぎ新宿より中野、荻窪、境、國分寺、立川等を經過し左曲して多摩川を横ぎり日野驛を過ぎて八王子に至る

川越鐵道 は甲武鐵道國分寺驛に接續なし此を起點とし直に右折し小川、東村山、所澤、入會、入間川、南大原等を經過して川越に達す

青梅鐵道 是甲武鐵道立川驛に接續なし此を起點として右斜し拜島、福生、羽村、小作等を経て青梅に達す

總武鐵道 是本所停車場(東京)を起點とし江戸川を渡り市川、中山の二驛を過ぎ船橋に出て津田沼、幕張等を経て千葉に達し左折して四ッ街道を過ぎ佐倉に出て之より左折して八街を過ぎ成東より左折し松尾、横芝、八日市場、干潟、旭町、飯岡、松島等の諸驛を経て銚子に達す

成田鐵道 是總武鐵道佐倉驛を起點とし之に聯續なし此を起點とし酒々井を過ぎ成田に至り夫より滑川、郡の二驛を経て佐原に達す

房總鐵道 是武總鐵道千葉驛に聯續なし茲を起點とし寒川、蘇我、野田、土氣等を過ぎ大網より右折して本納、茂原を経て一ノ宮に達す

太田鐵道 是常陸の水戸より發し青柳、下菅谷、上菅谷、額田等を経て久慈川に達す

佐野鐵道 是下野の名越を起點とし両毛線の佐野驛を通過し吉水、田

沼、多田等を経て葛生に達す

奥羽鐵道 是東北鐵道最終驛青森に接續なし此を起點として新城、大釋迦、浪岡、川邊等の諸驛を経て弘前に至り大澤を過ぎて碓ヶ關に至る

北越鐵道 是越後新潟信濃川の東沼垂町より起りて東南し一大弓形をなして龜田、新津、矢代田、加茂等を過ぎ一ノ木戸に達し(是より北條

其他工事中なり)北條より柏崎に至り左折して青海川を渡り鉢崎、柿崎、瀧町、犀瀉等を経て春日新田に達し荒川を渡れば直江津に至る是を北越

鐵道とす、東京よりの順路は東北鐵道の大宮驛より左に分れて中山道の街道に沿ひて上尾、桶川、鴻ノ巣、吹上、熊ヶ谷、深谷、本庄、新町、

倉賀野等の諸驛を経て高崎に至り此より官設線となり飯塚、安中、磯部、松井田等を經過し横川より碓氷峠の峻嶺に達して輕井澤に至る此

間は全國鐵道中第一の難所にして二十六の隧道を穿ち頗る奇觀なり之を過ぎて御代田、小諸等を経て街道と千曲川の間を進行し田中、大原、上

田、坂城等を過ぎ屋代より千曲川を渡り篠ノ井より長野に達し夫より豊野、牟禮を経て二個の隧道を潜り柏原より關川に浴ひて進行し關山、新井を越へ高田に達し猶ほ進みて直江津に至り之より前記の北越鐵道に接續す

中越鐵道 は越中の高岡に起りて戸出、出町、福野、福光等の諸驛を経過して城端驛に達す

炭礦鐵道 は北海道後志の小樽港より石狩を経て膽振の室蘭港に達する長線路にして小樽の西方手宮を起點とし住吉其他の諸驛を経過して岩見驛に出で之より三方に分る左折すれば歌知内及び空知太等に達し直線すれば幌内、幌内太、幾春別等に至り右折すれば追分に至り猶ほ分岐し左すれば夕張に達し直行して右過すれば室蘭港に至る此間各數驛の停車場あり

全國鐵道哩程 關東之部

○官設鐵道

高崎、横川間 一八、〇〇
 横川、輕井澤間 七、〇〇
 輕井澤、直江津間 九二、一〇
 青森、碓ヶ關間 三五、六〇

通計百五十二哩七十鎖

○日本鐵道

品川、赤羽間 一二、七六
 上野、青森間 四五四、六六
 田端、久ノ濱間 一四一、五七
 大宮、前橋間 四五二、三六
 小山、前橋間 五〇、七五
 小山、水戸間 四一、四五
 高崎、下仁田間 二一、〇〇
 宇都宮、日光間 二五、〇〇
 岩沼、中村間 二二、三四

岩切、鹽竈間

四、二三

尻内、淡間

五、〇四

上野、秋葉原間(貨物線)

一、二〇

水戸、那珂川間(全上)

〇、六一

通計八百三十四哩十七鎖

○甲武鐵道

飯田町、八王子間

二六、七七

○川越鐵道

國分寺、川越間

一八、四〇

○青梅鐵道

立川、青梅間

一一、三三

總計千四百八十三哩

○總武鐵道

本所、銚子間

七一、七四

○成田鐵道

佐倉、滑川間

一五、五五

○房總鐵道

千葉、一ノ宮間

二六、六七

○太田鐵道

水戸、久慈川間

九、七七

○佐野鐵道

越名、葛生間

九、五六

○北越鐵道

春日新田、北條間

二七、二七

沼垂、一ノ木戸間

二四、七四

通計五十二哩十七鎖

○中越鐵道

高岡、城端間

一八、四〇

○炭礦鐵道

手宮、幌内間

五六、五二

幌太、幾春別間

四、三九

岩見澤、空知太間

二四、七四

砂川、歌志内間

八、六四

室蘭、岩見澤間

八六、一三

追分、夕張間

二六、四九

通計二百七哩五十一鎖

○訓路鐵道

標茶、跡佐登間

二五、七八

ウノシゴイ間

〇、六九

ナツコケヤル間

通計二十六哩四十七鎖

總計千四百八十三哩二十三鎖

東北鐵道

●上野停車場

○上野 は新橋と等しく南北に相對立し最も重要な停車場にして東北は陸奥青森に至り尙ほ奥羽鐵道に連續し東は田端より分れて陸羽濱街道あり西北は大宮より分れて高崎に達し之より接續なして官線は遠く越後の直江津に至り北越鐵道に導きて新潟に達す小山には水戸行、前橋行の支線あり宇都宮より分る、日光線は東照宮を拜し社殿の結構なるを觀るべく仙臺より分る、鹽竈線は松島に遊びて光風絶佳を賞すべし又赤羽より分れて品川に至れば東海鐵道に接續なして東京以西各地方に旅行するも亦自在にして共に遊歴者の至便なり列車は日々數十回の發着ありと雖も直行するものと途中にて宮線又は支線等に乗換るものとあれば乗車前に豫め發着時間表を調べ其驛を乗越ざるやう心掛るを肝要とす停車

場内には小荷物取扱所あり待合室には諸新聞を備う場内には各鐵道時間表及び賃金表、哩程其他數十の廣告等を掲げり亦唐物店あり煙草店あり麵麩、菓子、新聞、雜誌などの店舗等ありて特に旅客の便利とす旅客は貨物と共に輻輳し頗る雜沓を極むるが故専はら注意をなすべし扱亦此地は頗る繁盛の地にして停車場附近には郵便電信局あり亦茶亭、料理屋、旅舎、運漕店等軒を列らね鐵道馬車は前を通過して新橋、淺草等に往復なし廣小路には觀工場あり仲町邊は百貨共に備らざるなし今近傍の名所を舉れば上野公園、不忍池、湯嶋神社、神田神社、根津神社、淺學公園、入谷の朝顔、根岸にはお行の松、等なり亦鷺谷には温泉あり其他數舉するに遑あらず「東京獨案内」の記數書あれば之に就きて遊覽するを可とす

●田端停車場

○田端 是は上野を距る僅かに二哩十三鎖、茲より陸羽濱街道の支線あり

り近傍に田端梅園あり亦日暮の里は虫に名あり道灌山は古へ太田道灌茲に築城せしが故に城山とも云ふ近時數百の櫻樹を増植し大に風致を補ひ公園となす亦眺望に富り花觀、納涼、聽虫、觀觀共に他に優れり

●王子停車場 (東京府武藏國北豊島郡王子村)

○王子村 是東京近傍の勝地として人の知る所なり、土地最も静閑にして夏は避暑に宜しく、春は飛鳥の花、秋は瀧の川の楓樹、冬期に至れば飛鳥の雪雪又更に趣ありとて四時遊人絶ゆる事なし、この地上野を距る僅々三哩七十三鎖、下等乗車賃五錢を投ずれば瞬刻にして至るべし、停車場前より右の方沿道には旅亭料理店軒を並べ就中海老屋を以て最とす、近傍に於て一顧すべきは飛鳥山、王子神社、王子稻荷社、瀧の川の楓樹、不動の瀑、名主の瀑等にして何れも六七町以内在り
飛鳥山 是停車場の南に敬てる高丘にして青き芝生は數萬歩に涉り其間に櫻樹の點々たるを見る、往時近傍平塚村より此の邊りまで豊島左

衛門が居城なりしと聞けど今は原ぬるに由なし、初め豊島左衛門丘上に飛鳥の祠を移し因て飛鳥山と稱しけるが寛永年中王子權現を造營するに方り山上の飛鳥祠を遷して權現の社頭に鎮坐せしめたるに依り今は名のみ残り、元文の比に至り台命に依て櫻樹數千株を植ゑ年を越えて花木林となりしより騷人墨客杖を曳く者夥しく今は隅田飛鳥を以て並稱せらるゝに至れり、丘上よりは汽車の來往を眼下に瞰下し、近くは一面の青田を見晴し遠くは筑波榛名の翠黛を一眸に集め、風光頗ぶる佳なり、山に對し數町を隔て巍然たる煉瓦石造の巨屋あり、常に數條の煙突より黒烟を噴くを見る、是れ有名なる王子製紙場なり、曾て庶人の縦覽を許したるが今は許さず

王子神社 は飛鳥山の地方音無川を隔てたる處に在り、境内には樹木鬱蒼として夏時暑氣を覺ゆす社殿の結構また壯觀を極む、本社祭神は中央伊弉册尊、左速玉男命、右事解男命にして禪夷山金輪寺は本社及び稻

荷社の別當寺たりしが維新後神佛混同の弊を革めしより二社共に金輪寺の關係を斷ち別に社掌を置く本社、拜殿、舞臺、額殿等あり

不動の瀑 は停車場の西北六町許り正受院の本堂の後坂路を廻り降ると數十歩の所に在り、飛瀑丈餘蒼樹鬱鬱として天目を蔽ひ青苔露滑らかなにして爽氣肌を襲ふ、夏時に至れば瘋癲者などの來り浴する者多し、名主の瀑は停車場より北の方五六町に在り人造瀑布にして其の細き不動の瀑に比すれば雅俗同日の論にあらず、又稻荷にも瀑あれど名主より一層水細くして浴すべからず、楓樹は音無川の上流に在り秋期に至れば兩岸の錦繡水に映じ其美觀云ふべからず遊人は飛鳥の花に亞で多し

●赤羽停車場 (東京府武藏國北豊島郡赤羽村)

○赤羽 は王子を距る二哩廿一鎮、元一小寒村に過ぎず此地の鎮守赤羽山八幡宮は文明の頃太田道灌の再興せしものにて頗る舊社なりと云ふ此驛は品川線と連続する處なれば以下品川驛より記載す

●品川停車場

(東京市芝區高輪南町字谷山下)

東海鐵道第二の停車場にして日本鐵道會社支線の分岐點なり、支線は品川硝子製造所の背後を過ぎ直ちに一大屈曲を爲し西して居木橋、大崎二村を經、永峯往還の下に長さ百十二呎の隧道を貫き茲を過ぎて自から列車の停まる所即ち目黒停車場なり、品川近傍の名所は上編東海鐵道の部に詳らかなれば重複を厭ひて茲に掲録せず

●目黒停車場

(東京府武藏國荏原郡大崎村字上大崎)

目黒停車場は白金臺町より行人阪に至る途中永峯町の北傍に在りて停車場は道路水平線の下十數尺の階段を降りたる處に之を設く、目黒村は停車場の西に方り上、中、下及び三田の四小村に分れ戸數六百八十餘戸、人口三千五百八十人、村内に竹林多く筒子を以て名産とす

目黒不動

は停車場の西凡そ十町字中目黒村に在り其途中の峻阪を行

人阪と云ひ左傍に明王院あり古へは此阪の東傍を夕日ヶ岡と稱へ楓樹數十株枝を交へ晚秋霜深き頃は夕陽其葉に映じて紅を漲らし頗る奇觀なりしと云ふ、阪を下りて太鼓橋を渡り行くと四五町にして家續きの處に出で蛸薬師堂の前より西折すれば即ち不動堂の門前に到る、不動堂は瀧泉寺と號し天台宗にして東叡山に屬す、門を入れば正面に樓門あり二王を安置し後水尾帝宸筆泰叡山三字の額を掲げ左に垢離場ありて獨鈷の龍は龍の口より迸しり出で、炎天旱魃の時と雖も涸るゝとなし樓門を入りて石階を躡れば本堂に達し本尊は慈覺大師作の不動明王にして脇士は八大童子なり、堂後に大日堂、鬼子母神、開山堂等あり賽人常に蟻集するが中に一、五、九の三ヶ月に於る廿七八兩日は殊に賑へり又門前數町の間には茶店酒樓軒を並べ橋和屋、内田、角伊勢等其名高く橋和屋の牡丹花の如き都下名勝の一に算へらる、其西三町ばかりにして平井權八小紫の比翼塚あり茶亭角伊勢屋にては其の墓地を預り望みに應じて客を案内す

祐天寺 目黒停車場より西の方二十餘町、同く不動裏門より西北十二三町の處に在り享保年間二世祐海和尚祐天僧正遺跡の地を下して草創し則ち祐天僧正を以て開祖とす總門を入れば二王門あり持國廣目の二王を安置し祐海筆明顯山三字の額を掲ぐ門を入れば右に鯨鐘あり左に阿彌陀堂、經藏あり其の正面に巍然として屹立するものは本堂にして開山八十歳の影像及び臨終の眞影を安す又經藏の後に開山の廟あり、開山祐天僧正(顯譽上人)が寛文年間下總岡田郡羽生村與右衛門の女房累の怨靈を法力に依りて解脱せしめし事普く世の口碑に傳はり當時僧正の用ひたる法衣其他の遺品を藏し毎年八月十一日庶人の縦覽を許す

●澁谷停車場 (東京府武蔵國南豐島郡中澁谷村)

澁谷村は東京市青山北町の町續にして西南世田ヶ谷、二子等を経て相州厚木に至る縣道あり此地に昔し澁谷長者宗順なる者ありて今猶ほ其宅趾及び墳墓を存す近傍に氷川神社、澁谷八幡、長谷寺等あり又停車場より東

南半里許りにして廣尾の笑花園及び祥雲寺等あり青山麻布に住ふ者此の停車場より乗降するを便利とす

●豪徳寺

停車場より二子街道を西南の方に行くと五十町世田ヶ谷村の入口に在り曹洞派の禪刹にして文明年間の創建に係り高輪の泉岳寺に屬す中興の開基は井伊掃部頭直孝にして同く開山は天極秀道和尚なり、堂舎壯嚴、釋迦、彌勒、彌陀の三世佛を以て本尊とし寺内に清涼橋、黃鳥哺、星嶽丘、碧雲關、楓樹林、松柏壇、臥龍櫻、選佛場、枯華塔、照心堂等の十勝あり此寺元と弘徳院と稱し吉良治家封を世田ヶ谷郷に賜はりし時其の菩提所たりし所にして寺内に吉良氏の舊城趾及び吉良氏累代の墓あり又寺より西の方の岡續きに宮阪八幡宮あり吉良頼貞の建立する所と云ふ

●新宿停車場 (東京府武蔵國豐島郡角筈村)

○内藤新宿 は東京市の西隅に在り街道の岐る、所を追分と云ひ右を青梅街道とし左を甲州街道とす、停車場は追分の西角筈村に在り赤羽線

及び甲武鐵道線と接続する所にして西すれば八王子に至り東すれば市内飯田町に達し北に向へば赤羽、大宮を経て陸奥、青森又は高崎、碓氷峠を経て越後の直江津に至り南すれば品川を経て京都、大阪若くは山陽各地に旅行し得べき四通八達之地にして乗客常に群集し新橋上野に亞ぐの繁忙停車場なり

十二社 新宿停車場の西十餘町角筈村に在り家津御子神を祭り紀州熊野神社と同神なり故に十二所熊野神社と云へるを世俗誤り傳へて十二さうと呼ぶ境内廣潤にして山あり池あり頗る風致に富めり又一條の瀑布ありて夏日納涼の爲め來り遊ぶ者頗る多し

●目白停車場 (東京府武蔵國北豊島郡高田村)

高田村は東京小石川區の西端に方り停車場は高田老松町及び關口町を距る僅かに十町餘の所に在り北は雜司ヶ谷村に隣り南は源兵衛村に接し西一里にして新井村藥師堂あり、高田は慶長年間越後少將忠輝の北堂高田

の君遊覽の地を拓きたる處にして後ち寛永年間徳川氏其跡に馬場を築きて高田の馬場と稱せり、又同村内に古へ所謂山吹の里あり太田持資放鷹の途中急雨に遇ひ、雨具を借らんとして少女の爲めに山吹の枝を示され終に其意を解せざりしと云ふの舊跡なれども今は其地さだかならず

目白不動 停車場の東十八町關口臺町目白阪の上に在り地は關口の崖に臨みて南に早稲田の稲田を見晴し眺望稍や快濶なり、寺は眞言宗にして新長谷寺と號し本尊不動明王は弘法大師の作なりと言傳ふ當時は元和年間和州長谷の小池坊秀算僧正の中興にして徳川秀忠公の命に依りて堂塔伽藍を建立し後ち長谷寺本尊と同作の觀音像を移して新長谷寺を改め三代將軍家光公之に目白の號を賜ひぬ、寺内茶亭多く四時どもに遊人絶えざるが中に最も雪中の景を好しとす

鬼子母神堂 停車場より北七八町雜司ヶ谷村に在りて法明寺に屬す本尊鬼子母神銅像は星の清水より出現せしものと傳へ之を信仰する者頗

る多く參詣人常に群集し殊に十月八日より廿三日迄の會式には其雜沓云
はん方なし、堂宇壯麗を極め寺域また廣寛、老杉鬱然として之を圍繞し
入口兩側には茶亭いと多し

●板橋停車場

(東京府武蔵國北豐島郡瀬川村)

○板橋驛 是東京市の北、中仙道第一次の宿驛にして上下二宿に分る
驛は則ち下板橋にして停車場を距る十町ばかり驛内に北豐島郡役所、警
察署及び旅店妓樓等軒を並べ車馬絡繹として往來最も繁し驛の入口にて
道二つに岐れ左すれば上板橋を経て川越町に至り右は即ち本街道にして
旗驛まで二里十五町、浦和町まで三里廿五町なり又驛内に乘蓮寺、氷川
神社等あり、驛の左の方少し入込みたる處に平塚山あり一祠ありて源義
家の靈を祭り祠背の塚を鎧塚と稱へ義家の鎧一領を埋めたる處なりと言
傳ふれども確かなる據とて無きもの、如し(線路は此驛の南を横ざり
十條、稻村を經、赤羽にて奥羽及び中仙道幹線と聯絡す、

此驛(赤羽)より上り列車は即ち上野に至る、亦是より以下の記は即ち
下り列車赤羽以北の案内をなす

戸田川鐵橋

は赤羽を距る數町に架す三千〇三十二呎の長橋なり

●川口停車場

(埼玉縣南安立郡川口町)

○川口町

は荒川の北に在り此地には鑄物師多し往時は川口の鍋つく
りと云ひしが近時は鐵瓶、釜なども鑄造し漸次其製作進歩に越けり

善光寺

は同町の西北に在り平等山と號す建久五年僧定尊靈夢に感じ
此寺を創建すと本尊金銅の阿彌陀如來は四十八粒の佛舍利を納めしと云
ふ亦當伽藍の階下には戎壇巡りと云ふあり

●蕨停車場

同北足立郡蕨町字塚越

○蕨町

は停車場の西十餘町に位し中仙道の一驛にして東京を距る四
里許り、驛の廣袤東西二町、南北七町餘、人戸二千餘、維新前に比すれ
ば稍や衰頽の狀なきにあらずと雖も今鐵道の便を假らば更に其の衰

運を挽回するの期あるべし、近傍案内すべき名所舊跡等なければ是より直ちに浦和驛に進むべし

●浦和停車場 (埼玉縣武藏國北足立郡浦和宿)

○浦和町 是埼玉縣廳の所在地にして驛の長さ南北拾餘町、戸數千八百餘、人口六千零四十七、所謂る中仙道中の一驛なり、裁判所あり警察署あり郵便電信局あり又中學校あり埼玉縣下屈指の繁昌地となす然れども此の地東京に接近し交通の便利却つて商業不振の原由となり他の縣廳所在地に比しては稍や寂寥の憾なき能はず、驛の南端蕪積たる森林あり之を調神社といふ今は浦和公園となれり、境内幽靜にして茶店あり夏日暑を避け閑を遣るに足る

●浦和町の西北一里餘、與野町に一公園あり、地は一丘陵を爲して高低一ならず丘上には櫻花數百株枝を交へ老樹には幹空洞にして三人を容るゝに足るものあり、園の廣さは凡そ五千坪にして西隅に築山あり之に登れば眼界忽ち開け四方田園を見晴して風景頗る佳なり、花候に至れば近傍の士女鷹集して頗る殷賑を極む

●大宮停車場 (埼玉縣武藏國北足立郡大宮町)

○大宮町 是所謂る北越鐵道の起點にして東北鐵道線と分岐する所なり、故に東北地方に行く人、前橋高崎及び直江津地方に行く人は、互ひにこの停車場に於て乗換るなり、此驛も亦中仙道の一驛にして戸數九百餘、人口三千百三十八、武藏總鎮守と仰ぐ氷川神社は此の地に在り所謂る武藏の一の宮なり、今は其の境内を以て大宮公園と爲す

大宮公園 是東京近傍に於て有名の勝地たり、停車場を距る僅々十二町、人力車に賃すれば六錢にして達すべし、境内に鎮座する氷川神社は官幣大社にして社殿の結構甚だ壯觀ならずと雖ども古松老杉鬱爾として枝を交へ頗る神威を添ふるに足る神社の前面には周回十餘町の古池あり之をみたらしの池と呼ぶ、之に目鏡橋を架し橋上に立て手を拍ば池中の

鯉魚鱗に應じて群集し餌を投ずるを待つ、公園内第十四區より亞兒加里性の鑛泉涌出するを以て旅店萬松樓は館内に浴室を設け之を引きて客の一浴に便す、其他松友館、公木樓、藤ノ戸の旅店ありて割烹を兼ね

八本松 は氷川神社南大門八丁目を三丁ばかり東に入りたる所に在り往時日本武尊東征の時御陣を据ゑさせられたる舊地なりと云ひ傳へり、

○潮田山 は文明中上杉定政の老臣太田資清の次男資忠の城址にして大宮壽能の城といふは是なり天正十八年秀吉の爲めに亡ぼさる○九郎塚稻荷 は足立藤九郎盛長なる者其住地に塚を築き稻荷の祠を安置せしを以て初め藤九郎塚と云ひ後年誤りて黒塚と書するに至れり今も尙ほ稻荷の祠ありて公園より遠からず

○蓮田 は南埼玉郡の西隅に在る一小村にして今は綾瀬村の大字に屬し戸數二百戸、人口九百八十を有す、村内記して傳ふべきものなし但し

●蓮田停車場 (埼玉縣武藏國南埼玉郡綾瀬村)

是より岩槻町へ壹里餘、粕壁町へ二里半

●久喜停車場 (埼玉縣武藏國南埼玉郡久喜村)

○久喜町 は戸數六百五十餘、人口二千三百五十九、驛の長さ五町許り人家軒を並べて一市を成す、是より東北里許にして幸手驛あり所謂陸羽街道の一驛なり、當驛及び栗橋の間に流る、一川あり權現堂川と云ふ、利根川の支流にして一朝洪水氾濫する時は必らず其の患を被ふる、明治八年幸手栗橋の人民相商り堤防を築きて其の患を防ぐ、其の長さ十餘町に亘る、同九年車駕東巡の時駕を堤上に駐め其工事に與かる者に金賜を以て之を賞す、因て名けて行幸堤といふ事記して碑石に在り、又是より左折里許にして霞ヶ關舊趾あり古松一樹を餘す、東京霞ヶ關は此名を移すものなりといふ

●栗橋停車場 (埼玉縣武藏國北葛飾郡栗橋町)

○栗橋町 は陸羽街道の一驛なり、停車場を降り右一町許りにして驛

に出づ、宿の長さ五六町、戸數七百餘、人口二千七百四十五、北葛飾郡中幸手驛に次ぐの繁昌地なり、是より利根川の川幅最も廣き所の鐵橋（長さ一千五百二十七呎）を渡りて古河に達す、此の所は川を以て武藏下總、埼玉茨城の國縣を分ち川の中心を以て堺とす、古河は即ち下總の西葛飾郡に屬せり、幕府は曾て關を此所に設けて行旅を驗したるが維新の後之を廢せり

● 靜御前の墓 是栗橋停車場を距る西南數十歩伊坂村に在り、舞妓靜義經の陸奥に在るを聞き往て從はんと欲し途にして既に死するを聞き還て此に來り會ま病に冒されて死す因て葬あるといふ、利根川の北中田村に光了寺といふ古刹あり、今に靜の舞衣ををさむ、越中守少將松平定信其事を記して收めたる箱あり後人のつくり物にはあらざるべし

● 古河停車場（茨城縣下總國西葛飾郡古河宿）

○ 古河町 是下總の西端に在りて茨城縣に屬す、土井氏の舊城下にし

て古來下總の要地とし所謂陸羽街道の一驛なり、戸數三千餘、人口九千七百五十九、人烟稠密、車馬絡繹管内屈指の名邑たり、是より東南に鴻巣及び茶屋新田あり、此地は中古足利成氏の據るところにして古河公方の城址是れなり

● 鮭延寺 是古河驛の東十五町許り大堤村に在り、此の寺は出羽の最上義光の家人鮭延越前が爲めに建てし寺なり、越前曾て最上の家にて一萬五千石を領したりしが最上侯亡びて後從者二十人と共に浮浪の身となり古河に來りしに城主土井利勝之を聞き越前に五千石を與へて抱へたり越前之を自ら受けずして二十人の從者に分ち各々五十石の士となし己は一日かはりに二十人の家を巡りて養はれけり年經て病歿せしを二十人の者悲嘆遣る方なく遂に一寺を建立して鮭延寺と名けたりとぞ、熊澤番山の墓も亦境内に在り

● 源三位の墓 是土井氏の舊城内に在り、傳へ云ふ賴政宇治の役自殺せ

んとし其の臣渡邊唱に必らず吾首を瘞めよと命せしかば唱其首を囊にし此に來りて下河邊行平に投じて以て葬ふる、行平は嘗て射を三位に學ぶ者、故に其恩に酬ゆるなりと、近傍に足利成氏時氏等の古墳あり

●問々田停車場 (栃木縣下野國下都賀郡問々田村)

問々田は陸羽街道の一驛にして戸數凡そ一千戸、人口五千人あり市街は南北に長くして其の繁昌小山宿と伯仲の間に在り、陸羽街道を旅行する者古河より當驛に來る間一二の古跡あるを見るべし野木明神は野木村に在り皇子菟道稚郎子を祭る其西南八町ばかりに臺手函古墳あり仁徳天皇の御宇下野の國造奈良別命の任に赴くに方り稚彦皇子の遺骨を奉じて來り葬る即ち往古野木宮の舊趾なり

●小山停車場 (栃木縣下野國下都賀郡小山町)

○小山町 は古河を距る九哩七十五鎖、野木、問々田を経て到るべし、此の地從來宇都宮に亞で殷盛なりしが維新以來馬車及び小汽船等の往來

開け、爲めに旅客は足を止めず、商賈また活路を失なひ頗る衰狀を呈したりしが近時鐵道の敷設ありしより水戸鐵道の起點となり、兩毛線路も亦此驛に於て岐れ東北線も亦此を過つて北行し、實に四通八達の最要地となりしを以て漸く其の衰頽を挽回するの運に會せり、現今の現況を聞くに戸數一千三百餘、人口四千八百五十二尙ほ漸々増加の勢ひありと、驛の中央より左折すれば小山氏の城趾に至るべし其他名勝舊跡の案内すべきなし

●小金井停車場 (栃木縣下野國下都賀郡小金井村)

○小金井 は今は國分寺村に合し字となれり、國分寺村は戸數千餘、人口三千七百七十八、此の地又小市を成す近傍一顧すべきは左記の藥師寺の舊蹟なりとす

藥師寺舊趾 小金井驛を距る東州町に在り、驛のはづれより右に入る昔し廢帝の寶字五年始めて戒壇を下野の藥師寺并に筑前の觀世音寺に立

らる、凡そ天下に戒壇ありしは南都東大寺と此の二ヶ寺あるのみ此外に
立るを許されずとなり、偕此舊跡を探らんと欲せば先づ驛の外れより右
に入り那須野に實きたる曠野の草むらの小徑を行けば薬師寺村に至る、
此處に祥雲山龍興寺といふ古刹あり門を出て右の方に弓削道鏡の墓あり
道鏡罪あり流されて薬師寺の別當となりて死せしといふ、又鑑真法師の
墓あり、碑の表に鑑真大和尚、傍に天平寶字七壬寅五月五日と鐫つけた
るがあざやかに見ゆ、又一古墳あり傳へて稱徳帝の陵墓とす、然れども
道鏡の墓あるを以て附會したるならん、茲を去つて醫王山安國寺に至れ
ば境内に戒壇のありし所とて六角堂を建てたり、此の二寺共に薬師寺の
跡なりとて兩寺争ひを起し享保の頃幕府の處分を受けしが何れとも決せ
ずして止みたりと

●石橋停車場 (栃木縣下野國下都賀郡姿村)

石橋は姿村の一部にして大字石橋といふ、姿村は戸數千餘人口四千三百

二十九ありて頗る大村なり、是れより雀の宮に至れば縣社雀の宮あり、
この邊りより東に當り筑波足尾、北には黒髮山などの諸山見えて風景頗
る佳絶なり

●宇都宮停車場 (栃木縣下野國河内郡宇都宮町)

○宇都宮町 は舊戸田因幡守の城下にして陸羽街道中屈指の名邑た
り、市の廣袤東西壹里拾二町、南北一里二十三町餘、市坊四十九、戸數
九千五百餘、人口三萬零百三十二、此の地往昔宇都宮氏の居城にして子
孫此に住し兵威大に振ひ終に州主と稱し壬生、泉、山田の諸族皆な來り
屬せり、天文中に至り那須氏と戰つて大に敗れ、北條氏亦州の南境を畧
せしかば兵勢漸やく衰ふ、後國綱に及び豊臣氏に屬し功を以て舊封十八
萬七千石を全うするを得たるが慶長二年又罪を獲て其の封を收め之を蒲
生秀行に賜ふ、六年徳川氏秀行を會津に徙し奥平家昌之に代り、又數姓
易封の後寶永中戸田忠貞を封ず、忠貞一旦島原に徙されしも曾孫忠實に

至りて封を復し以て維新に及べり、王政革新の始め日光縣を置き既にし
て之を廢して宇都宮縣を置き、又廢して栃木支廳を置きたるを又々廢し
て遂に栃木縣廳を置くに至れり、縣廳の外裁判所、大林區署、警察署、
監獄署、郵便電信局及び師範學校等あり、東北鐵道線の一驛にして殊に
日光線路の起點たり、縣下唯一の繁昌地たる知るべきのみ、旅亭の重な
るものは手塚屋、白木屋、稻屋、丸屋、高澤屋、林屋等なり

二荒神社

は宇都宮市に在り是れ所謂る宇都宮なり、二荒は此の社の

地より日光山に續ける山の惣稱なりといふ（詳しくは日光の部に記す）

日光の二荒神社と孰れが本家なるや分家なるや、知り難し祭神は共に大
己貴命なり或は皇子豐城入彦命を祭れりともいふ神殿は維新の際兵火

に罹りて燒失せしを數年前造營せり先年官幣中社に列せらる、境内には
下野十神社、猿田彦社、天神宮、招魂社等多くの末社あり例祭は九月九

日を以て執行す

鐵の碑

市中誓願寺といふ寺に在り正和元年宇都宮公綱其母の十三回

忌に建てしものなりといふ、因みに記す公綱より五代ばかりの祖に宇都

宮彌三郎頼綱といふ者あり、入道して蓮生法師といふ、和歌を好くし老

て後京師に至り嵯峨の中院に住めり、世にもてあそぶ京極黃門の百人一
首は此の入道の住居の障子に押す料として書きしものなりといふ

蒲生君平舊趾は市中禪林寺に在り、君平は勤王の王なり數々朝廷よ
り追賞の特典を蒙り曾て勅して正四位を贈らる、著はすところ職官志
山陵志等あり世に知らる

大谷山

は宇都宮を距る西北二里半に在り、人力車に賃すれば金十五

錢にして行くを得べし、山は巖石より成り奇岩性石簇立して峰を爲す、
就中巖を穿ちて數多の佛像を爲す者最も奇觀なり、門あり之を入れば廣

さ百歩許り内に千手觀音の石像を安置す身の丈一丈六尺、山巔に上れば
婆川の上流に望み眼界豁然爽快云ふべからず、是れ實に全國無比の仙

境なりとす

清嚴寺 は宇都宮町に在り、旭蓮舎儀翁を開山とす弘治年間の創建にして御室念佛堂の舊蹟なりと云ふ

粉河寺 は同所に在り、本尊千手觀世音は紀州の粉河寺を移せりと云ふ、南朝紀傳に北朝の應安三年五月宇都宮氏綱紀州に敗れて粉河寺に入りて卒す云々蓋し之に由て茲に移せるものなるべし

是より以下日光支線に導き日光及び其近傍の名勝を案内す

●砥上停車場 (栃木縣下野國河内郡妻川村大字下砥上)

○砥上 は一小村のみ、日光支線第二の停車場にして宇都宮を距る三哩四十八鎖、今は上下砥上鶴田等の諸村を合して妻川と稱す、停車場は字下砥上に在り、近側觀るべきものなし

●鹿沼停車場 (栃木縣下野國上都賀郡鹿沼町)

○鹿沼町 は日光線路中第一の繁昌地にして町の廣袤東西十一町二十

五間、南北三十四町三拾八間、市坊十五、戸數三千、人口九千五百八十二、麻を以て名産とす停車場を降り六七町にして石造の巨屋あり、是れ有名の麻紡績會社なり、大津の麻紡績、札幌の製麻紡績、之を日本三紡績といふ、其の盛大推して知るべきのみ、驛は停車場を距る十餘町の低地に在り、上都賀郡役所、警察署、郵便電信局等皆な市中に在り、又驛の西方に鹿沼入道の古城址あり

●文挾停車場 (栃木縣下野國上都賀郡落合村大字小倉)

文挾は落合村の一部にして小代、板橋、明神、文挾等を合して一村たり大谷山の麓に位し山中の一驛なり、是より西北二十三町にして小代温泉あり此温泉は笕を設けて日光湯本温泉を遠く引來りて浴客の便に供したるなり、旅舎一戸あり庭前の池には鯉鮒をやしなひ室また清潔なり、宿料一日十五錢位、入浴料三錢、料理は客の好みに應じて調進す

●今市停車場 (栃木縣下野國上都賀郡今市町大字平ヶ崎)

○今市町 は日光を距る四哩一鎖の所に在り戸數一千七百餘、人口五千百餘、鹿沼に亞ぐの繁昌地なり、維新の際兵火に罹り民家過半燒燼したるが今は全く舊に復せり、又此地に二宮尊徳翁の墓あり

藤原温泉 は下野國鹽谷郡藤原村大字藤原に在り、今市停車場を距る北の方四里半、倉ヶ崎、大桑を経て高德に出で同村より鬼怒川の東岸に沿ひ大原を過ぎて藤原に到る、東に金山を負ひ、西南に日光の連峯を望み、鬼怒川は村の西を流れ、土地高燥にして空氣乾燥せり、夏日陰雨多く秋季晴日多し、常に西北風多くして盛夏は九十度以上に昇り隆冬と雖も積雪尺に満たず、温泉は鬼怒川の東岸岩石の間より湧出し無色透明反應は弱亞兒加里性にして九十六度の温度を有す其分拆表を見るに一リ

硫酸	少	量	—	硫酸	少	量
鹽酸	少	量	—	鹽酸	少	量
加留基	少	量	—	加留基	少	量

那 葛 倫 少 量 麻 痺 温 失 亞 痕 跡

此の温泉は明治二年創めて發見し明治十二年三月浴場を設けたり温泉宿は幸屋(星猷治)一戸あるのみ、幸屋の宿料は一日上等二十五錢、中等二十錢、並十五錢にして坐敷料は一日貸切六錢より十錢までとす、今市より此地に到る人力車賃二十五錢、駕籠賃は四十五錢、當温泉場より鬼怒川の流れを隔てて對岸に

瀧温泉 あり藤原村に屬す河上に假橋を架して相往來す、東北に高原山あり西南は黒髮山の餘脈なる栗山諸山あり、氣候風土は藤原温泉場に異ならず、温泉は鬼怒川の南岸砂石中より湧出し大出某浴場を設く、湯槽四個あり浴客は夏秋に多く冬春に少なし、泉質は硫黃泉にして無色透明、其の反應は亞兒加里性にして百七度の温度を保つ、之を發見せしは今より百三十餘年前寶曆年間在り、今市停車場よりの順路、人力車賃

等は藤原温泉に異ならず

川治温泉 藤原温泉場より鬼怒川の東岸に沿ひ行くと北方一里餘にして高原村に至り橋を渡れば即ち川治なり、此の橋を追欄橋と呼び川を男鹿川といふ、男鹿川は高原村にて鬼怒川と合するなり、温泉は河岸の岩罅より湧出し男鹿川に接近するを以て流水を混ず、泉質は鹽類泉にして百十三度の温度を有し打傷、創傷、疝氣、痔疾、胃病、肺病等に効あり地勢は西南一帯高山を帯ふるを以て纒かに朝暘を受くるに過ぎず、その風向は常に西北風多く雨の多少、空氣乾濕の有様等は藤原温泉に異ならず、同所は戸數十四、温泉宿二戸近江屋鬼子三、神山某あり近江屋の母屋は後に温泉ヶ嶽を負ひ長屋は前に男鹿川を臨みて景色頗る佳なり籠目巖 は今市より東北二里餘、岩生村に在り大渡の渡船場を渡り鬼怒川の北岸に沿ひ行くと十五町許にして達す、奇觀云ふべからず此近傍の勝地を探らんと欲せば必らず一遊して可なり

日光停車場 (栃木縣下野國上都賀郡日光町)

○日光町 停車場を出れば道の兩側に各旅亭の出張店あり之より爪頭上りに道を行き大谷川假橋に至るの間を出町といふ、兩側に旅店、料理店及び日光名物の挽物細工、獸皮、羊羹等を賣る家軒を并べ夏日は頗る繁昌を極む、市街は盤戸町、松原町、君屋町、御幸町、稻荷町、鉢石町等の十三町より成り、其の廣さ東西三十町、南北五町、戸數二千、人口六千五百七十五を有す、又市中觀るべきもの多し、瑞雲山龍藏寺の觀音(石屋町に在り)は慈覺大師一刀三禮の作にして坂東第三十二番の札所たり、又惠心の作れる辨財天あり、石山觀音寺(鉢石町に在り)より少しく登りて觀音堂あり、茲に安置する千手觀音の像は弘法大師の作なりといふ日光町にて旅亭の名高き者は左の如し

- 小西屋 一郎
- 會津屋 平
- 神山 徳平
- 古橋 保平
- 紙屋 中平
- 油屋長之助
- 登屋三郎

旅客は先づ此の旅店に投じ豫かじめ行く所を定め案内者を雇ふて見物に赴くを善しとす、請ふ東照宮の案内より始めん

東照宮 是は贈正一位太政大臣徳川家康公の靈社なり、元和二年十月始めて宮廟を營み、公の遺命を奉じて久能山(公の遺骸は久能山に葬むる)より此地に遷葬したりといふ、元和三年二月朝廷宣して東照宮大権現の號を賜ふ、同三月九日勅使江戸に降り正一位を贈らる、明治六年別格官幣社に列す、東照宮に参詣するには先づ出町より西して大谷川の岸に至る、茲に假橋ありて左方に神橋を望む、神橋は初めの名を山菅の蛇橋と云ひ、長さ十四間幅三間朱を以て塗り勾欄擬寶珠に渡金の金物を用ふ、假橋を渡り老杉翫齋たる間を過ぎ石階を登り行くと三町にして華表あり高さ二丈七尺、笠木七尺、總て花崗石より成る、額面は後水尾天皇の宸筆なり、華表の左方に五重塔あり高さ十七間二尺、承塵の上圍に十二支の彫刻あり、華表の右方に番所あり是より表門を過ぎ左手に三神庫、神

既を見て進めば突當りに鍋島信濃守の寄進せし花崗石の手水鉢あり又銅の華表あり之より又石階を登れば右に鐘樓あり左に鼓樓あり、又此近傍に諸侯の献納せし燈籠數十基あり、朝鮮國より献納せし虫喰鐘、琉球より献せし蓮燈籠、和蘭國より贈りたる廻燈籠等は殊に奇品なり、是より又石階を登れば陽明門あり、俗に之を日暮門といふ、美術の妙を盡し終日眺むるも猶ほ飽ざるの思ひありとて斯くは名づけたりとぞ、陽明門は破風造りの樓門にして破風下軒端には四方に金鈴を懸け表に極彩色の隨身あり裏には金色の獅子を排置す、其の欄間欄干には人物花鳥等種々の彫刻あり或は角木の端に刻し、或は丸彫にせるあり總て良工名匠の手に成り精密なる彩色を施し且つ室毎に鍍金の金物を隈なく鏤めたるを以て光彩燦然として人目を眩ます、陽明門と相對して正面に唐門あり總て索木造りにして四方棟、唐破風造りなり正面の破風の上に唐銅製の恙の虫を繋ぎ破風下、欄間、梁、柱ともに彫刻の妙を極む、又他木を接ぎ飾

れる所なく其の精微に至りては筆舌の能く盡す所にあらず、唐門を入りて拜殿に達す、拜殿は間口九間奥行五間の廣厦にして向拜付階段五級、すべて鍍金の金ものを張り濱椽高欄は蠟色塗にして殿内の柱は總金箔なり唐戸も亦蠟色塗金蒔繪なり、中の間は六十三疊、折揚格天井には青地に蟠龍を畫き、承塵の上には後水尾天皇御染筆、土佐左近將監畫の三十六歌仙の額面を掲ぐ、東に將軍家着座の間あり、十八疊にして其の天井は折揚天蓋造り、中心に伽羅木を以て葵の紋章を着け、又正面左右には唐木の密木を以て桐に鳳凰を彫付けし羽目あり、西に輪王寺宮休息の間あり、亦十八疊にして天井に天女の像を彫り、羽目は鷲松梅等の唐木彫あり、拜殿と石之間の間に四季の柱あり 堆朱の柱にして一基の價當時八萬兩宛なりといふ、拜殿の正後に本殿あり、本殿は桁行七間五尺、梁間六間、破風には鳳凰の彫刻あり、梁、欄間等には鳥獸草木の高彫あり、殿内には内陣、空殿など稱する所あり何れも金銀珠玉を鏤め滿目燦

爛、人をして目眩し魂飛ぶを知らざらしむ、唐門を出で、神樂殿と社務所との間に至れば茲に猫の門あり、承塵の上に丸彫の睡猫あり左甚五郎の作なりといふ、門を入れば坂下門あり素木作りにして椽は黒塗なり、冠木には牡丹鶴を彫刻す、之より石階を登りて本殿の正後に當る山頂に達す茲に奥殿あり、唐銅の華表の内に拜殿ありて其後に玉垣を廻らし中に唐銅の寶塔を建て下に家康公の尊骸を斂む、以上巡覽し畢らば案内者は更に參詣人を二荒山神社に導くべし

二荒山神社 是東照宮の表門より右折して新宮馬場を出で數十歩にして其の本社に到る、此の社は二荒山三社の新宮と稱し祭神は大己貴命なりといふ、社傳を按ずるに今を距ると二千餘年の昔し崇神天皇の御宇皇子豐城入彦命東國を治めんとて降りたまひ親から崇祀し奉つる云々是れ禰祀の緣由なり、其後幾多の變遷ありて明治六年國幣中社に列せられ自今官祭を仰せ出ざる云々、東に向ひて唐銅の華表あり高さ二丈二尺、

周圍六尺五寸、有栖川熾仁親王揮毫の額を掲ぐ、又素木造り三間四方の神庫、素木づくりの舞樂殿及び高野槇の神木、俗に化燈籠と稱ふる唐銅の燈籠あり、茲を過ぎて拜殿に至る、拜殿は間口七間奥行四間半にして總朱塗なり其の後に唐門あり、唐門の正面は即ち本殿なり、本殿は所謂八棟造りにして濱縁向拜付、總朱塗、正面の扉は黒塗なり、本殿の外通り長押欄間には花鳥木獸を或は畫き或は彫りて總て彩色を施こし又内殿の左右に神寶を並列す、唐門外の西南に前記の化燈籠あり高さ七尺許りにして古色を帯び且何故にや數多の刀痕を見る、正應五年鹿沼入道教阿の獻寄する所、拜殿の傍に高野槇あり、相傳ふ弘法大師登山の時苗木を高野山より齋らし來りて植る所なりと

大猷院殿の靈屋 是徳川三代將軍家光公を葬る所なり、正面に二王門あり桁行四間半、梁間二間半、三棟造り左右に右彌那羅延金剛、左輔密迹金剛の二王を安置す、裏の左右にも同形の二王を安す是は東照宮の表

門に在りしを明治六年此所へ移せり、二王門を入りて左折すれば二天門あり樓上の高欄擬寶珠等にはすべて鍍金の金ものを用ひ且つ所々に葵の紋を點す、此門北に向ひ右に持國天、左に廣目天の木像を安す、又裏面に風雷の二神を假置し其の題額は後光明院の宸筆なり、茲を入り右曲左折して七十二級の石階を昇れば左右に鐘鼓の二樓對峙す二樓の間より望みて正面に輝き立つものは夜刃門なり桁行四間二尺、梁間二間半、唐破風造り兩面の左右に健陀羅、毘陀羅、烏摩勒、阿跋摩の四夜刃を安置す門の左右に廻廊あり玉垣の前には諸侯の獻納せし燈籠十基を羅列せり、茲より敷石を歩いて内に入れば唐門あり鍍刻の精采畫の美また言を俟たず、唐門より左右後へ折廻して拜殿本社を圍む玉垣あり、羽目は地紋をすかし上の欄間は竹松梅椿及び種々の草花に群鶴を刻む、拜殿は東北に面せり其のつくり向拜付にして五級の階段あり、階は臘色の研出しにして高欄は朱塗に鍍金の金ものを鏤め唐戸は金色にして地彫高彫あり、殿

内は六十二疊敷、中央に滅金の天蓋を掲げ其下に金梨子地の高机及び三具足を備ふ、拜殿の次に間室あり間口一間二尺、奥行四門半許り、次に在るものは本殿にして方五間半ばかり、佛殿造り二重屋根左右の破風板は金の向龍、枇杷板は牡丹其下に双頭の犀を刻せり、内扉は常に鎖して人に見せしめず、其内は壯嚴赫灼として大猷公の靈牌を安置すと聞けり、是より唐門を出で右の方塀重門を入り更に包裏門を出で、石階を登れば皇嘉門あり、是は朝廷より賜はりし門なりといふ其形他の諸門と異なり俗に龍宮造りと唱へ樓腹は白堊を以て塗り内外の桁は堆朱に地紋を刻り天井には天女の像を畫けり、門内に二條の石階あり左は寶庫に至り右は奥の院に至るべし、奥の院拜殿の中央には天蓋を掲げて下に高座を据ゑ左右に厨子入の佛像を安置す、又殿後に石垣を築き正面に唐銅鑄抜の堅門を設け其の兩袖より圓筒の石柵を廻らし中央に黃銅製の寶塔を安す、高さ一丈許り基石は八角五級なり都て奥院の構造は東照宮の奥宮と

殊なる所なしといふ、以上拜覽し了りたる後は更に近傍二三の瀑布及び勝地に案内せん

霧降の瀑 は神橋假橋を渡りて右折し日光小學校の前を過ぎ新道を進みて御料地の右を過り假橋より一里半にして山頂平垣の所に達す此所に望瀧臺ありて瀧の全形を望むべし夫より又九々折なる峻隘の小道を二三町下れば瀧壺に至る、瀧は二級に飛下す上級を一の瀧と云ひ下級を二の瀧といふ、一の瀧は高さ十三四丈幅三四間、二の瀧は高さ十二三丈幅十間許り、其の形勢二の瀧の半ばかり二流に分れ突起せる岩角に觸れ、激して飛散す、水氣煙霧の如く溪口に滿ち殆んど咫尺を辨せず遊客爲めに衣を濕す依て霧降の名あり

裏見の瀧 は日光町より西南一里十五町、霧降とは全く正反對の方位に在り、假橋より大谷川に沿ふて上り田母澤橋を渡りて蓮華石を過ぎ大日堂の近傍を過り、中禪寺道より左に岐れ新道を行くと凡そ二十餘町に

して荒澤の麓一茶亭のある所に達す、この茶亭より道を左に取り崎嶇たる逕路を躋り更らに溪に浴みて下れば裏見の瀧は正面に懸り左右また小瀧を懸けたり、橋の左より更に峻岩を踏み小瀧を涉りて迂回すれば瀧の裏面に至るべし、行人皆な茲に來りて瀑水を其の背面より見るを常とす故に裏見の名あり、瀑布の落つる所の岩上に不動の石像を安置し落口の傍らに不動堂あり、今は堂宇太く頽廢し其本尊を失ひて空堂となれり慈觀の瀧 は裏見の瀧の上流に在り、荒澤の茶亭より志津道を廿町許か行きて右へ分れ爪先上りに十二三町登り又右の方へ二三町降れば瀧の在る所に達すべし、瀧の上は一大平石斜面を爲し其幅十五六間長さ五六十間、而して瀧の落口は屋簷の如く突出て出入なし瀑水は上の平石を流れ來り鼻端の凹所より數派に分れて飛下す、其水濺りて小潭をなし更に三派に分れて懸崖を下ると三丈餘り奇觀名狀すべからず、此の瀧は慈觀僧正の發見する所なりとて其名を慈觀といふ、此の所も亦楓葉の勝地たり

り秋季に至る者必ず一遊すべし

華嚴の瀧

はむかし江尻瀧、

又八鹽瀧といふ、

日光町より中禪寺道を

進み清瀧觀音堂の傍らを過ぎ牛王阪を登り行くと十町許りにして馬返村に達す、又行くと數町道は漸々に上りて屢々危橋を渡り深澤の茶屋を過れば山路ますます峻峻、其最も峻しき所を劍ヶ峯といふ、是より北に般若の瀧、方等の瀧あり劍ヶ峯より北に進み漸やく峻阪を過ぐれば大平に出で是より行くと四五町忽ち左に折れて小徑を辿り行けば水聲滔々として遠雷を聞くが如きあり是れ即ち華嚴の瀧なり、對岸高き所に一字の茶亭あり瀑に對して床几を設けて觀覽者の休憩に便す、此の瀑布は中禪寺湖より落ち大谷川の水源となれるものにして直下七十五丈、幅八間其の下は人跡の能く到るところにあらず、實に間東隨一の大瀑布と稱す又此の邊に岩燕と稱ふる小鳥あり水煙を破りて翱翔す其の數幾百なるを知らず此鳥獨り此の近傍にのみ棲息すといふ

中禪寺湖 又南湖と云ひ幸の湖とも稱す、東西の長さ三里、南北一里餘、周圍七里三十二町と稱す、湖岸には喬木修竹、蓊鬱として繁茂し、湖水を蔽ふて影を水底に浸す、水は極めて清冷にして細波漱澗汀を洗ひ艇を放つて一葦の行く所に任せば歌之濱、寺崎、日輪寺舊跡、上野島、千手が崎、紅葉浦、葛蒲沼等の名所を觀るべく、又遠近の翠巒倒さまに青鏡の面に映するあり、風光明媚にして心目ともに一新するを覺ゆ、湖畔に中宮祠及び社務所あり又泉屋、葛屋、米屋、中村屋等數軒の宿屋あり、毎年八月五日より七日間二荒山神社登拜の神事を行ふに際しては此の地の繁昌大方ならず

湯本温泉 之を中禪寺温泉といふ、舊記に天文十三年鎌倉公方入浴云々とあれば其の以前より開けたるものなるべし又正保年度前までは御所湯、姥湯、三間湯のみにて當時女人牛馬結界の場所なれば浴客も多からざりしに維新以來其の禁を解かれてより運輸の便と共に開けて浴舎の營

繕新築日に加はり二層或は三層の高樓を構へ大屋支店を分ちて客室を設く其の繁昌又昔日の比にあらず近來實顯紳士及び外國人等杖を曳く者多し、里程は日光町より六里十一町（中宮祠湖畔より三里と云へど二里強に過ぎず）地形は東西北の三面に山を遶らし南の一方は湯の湖の青くして藍を流せるが如きを望み、海面を抽と四千尺餘、氣候は土用中晝は凡そ八十度朝夕は七十度を昇降し眞に暑さ知らずの土地なり人家三十戸許り涌口は東の山麓に散在して浴場十餘槽あり皆硫黃泉に屬す、温泉宿は吉見屋善右衛門、山田屋善六、松本半才紋其他數戸にして就中山田屋、吉見屋の家居は最も手廣にして内湯の設けあり、此地冬春の季は雪深く寒威烈しきに依り陰曆四月八日初めて浴舎を開き九月八日を期とし室を閉ちて下山するを例とす、又前面の湯の湖は東西廿五六町南北十五町餘水平かにして疊を敷きしに異ならず之に小舟を泛べ網を打たせて湯治中の徒然を慰むべし

湯瀨 湯瀨の湖より落來り急斜なる岩面を飛下すると四十五六丈幅十五六間、其の水勢岩石を穿ちて響き雷の如く白泡四方に飛散して崖樹動搖せり復軒大槻氏の碑文に曰く、其麗似三霧降其大有三華嚴雄一若三龍頭觀背二瞳二乎其下一矣と以て其の壯觀を知るべし

足尾銅山 日光町を距る西南七里餘、足尾郷大字御子内字間藤に在り、銅山は足尾郷の中央に位し周圍五六里に亘り、最高所を備前楯と云ひ海面を抜くと四千三百四十尺、金山樹木を生せず唯だ燒石の如くなる岩石のみ累々として皮相を爲せり、此山は方今東京府平民古川市兵衛氏の借區地に係り、日々發掘する所の鑛石三萬貫餘、之を荒銅に製し六千貫目餘を得るといふ、其の坑道は本口、二番口、鷹の巢、有木の四大坑にして就中有木坑を以て最とす、坑道の廣さは高さ六七尺、幅六尺を普通とし獨り有木坑は幅一丈ばかりあり、何れも坑内に一條の鐵路を敷きて鑛石運搬の便に供するが中にも有木坑は二條の鐵路を敷きて往復自在

ならしむ、坑道の長さは一丈間、短きは三四尺にして内に入れば更に數百の小坑ありて其狀蛛網に異ならず、鑛業の盛んなる實に東山道に冠たる者と謂ふべし

庚申山 足尾郷北方の山奥に在り、日光町より九里半と云ふ其順路は日光町より足尾町に出で上州街道を五六町行けば路傍に一基の華表あり其左に高さ一丈二三尺もある自然石に庚申山の三字を鑿て建たるを見るべし、又其右に庚申山表口と票せる小なる角石あり此の華表より庚申山の麓まで一百十四町、一町目毎に石標を建て、參詣者の先導に供す、皆な東京講中の建つる所なり、一丁目より十二三町の坂路を登り更に十町ばかり下れば銀山平といふ所に至る即ち往時銀鑛を採掘せし所なり、夫より六十三町目までは溪水に沿ふて爪上りに登る道なれば危険の恐れなし六十三町目より數十町の間は危険なる山の中腹を昇降するを以て一步を過たば千仞の溪間に墜落すべし、八十五六町目以上は始終登りく

て山麓に達す、麓の東寄に別當の坊あり喫飯宿泊共に客の需めに應ず、此坊より奥の院まで一里十餘町といふ、山中には奇岩怪石或は屹立し或は偃臥し神工鬼鑿、筆の能く盡す所にあらず就中胎内竇、梵字石、蠟燭岩の如きは最も奇觀なり

借是にて概略日光及び近傍の案内を畢りたれば之より本線に立戻り宇都宮の次驛より案内をなすべし

●岡本停車場 (同河那郡古里村字岡本)

○岡本驛 是より鬼怒川の長鐵橋を渡りて氏家驛に達す

●氏家停車場 (同鹽谷郡氏家町)

○氏家町 是陸羽街道の一驛にして特に名邑なり、岡本を距る六哩六鎮、喜連川町は氏家を距る東二里、亦之も名邑にして頗る繁昌をなせり鹽屋の里 是喜連川町大字早乙女を云ふ古へよりの勝地にして回國雜

記に「旅衣うちふれてゆく鹽の谷に煙さびしき夕霞かな」と其他古歌に秀吟夥多あり

●片岡停車場 (同郡片岡村)

○片岡村 ば氏家を距る五哩十八鎮、此二三驛は別に遊覽所もなし

●矢板停車場 (同郡矢板村)

○矢板驛 是矢板村字矢板に在り、此村戸敷一千三百餘、人口五千二百餘、鹽谷郡中の大村たり、村内字木幡に木幡神社あり、祭神は天忍穗耳尊にして山城宇治許波多神社を奉祀すといふ、又那須郡佐久山町へ里程一里半、是より針生山の隧道を過ぎ帯川の鐵橋を渡りて列車は西那須野停車場に達す

●西那須野停車場 (同郡須賀那賀村)

○西那須野村 是那須野ヶ原中の一小村落なり、那須野ヶ原は大田原の邊より岩代の州界迄二ヶ所に分かれ、東西各六里、南北各十里の曠原

なりしが養和保元より天文の時に至り所謂那須七騎等の土豪此間に割據し、漸々開墾して部落を成し、那須野と稱する者は往昔十の六を存するに過ぎず、而して今代に至り故三島通庸氏本縣に合たるに及び奮つて開墾に従事し、又百難を排除して新道を開墾せし以來朝野力を戮せて開墾に従事し草萊變じて禾黍となり、又昔日の荒寥を見る能はざるに至れり、西那須野村は戸數四百許り、人口一千二百八十六、大田原驛を距る廿餘町の間に在り

那須國造の碑 は大田原驛の東南三里餘、湯津上村大字湯津上（昔しは湯都神と云へり）に在り、按ずるに 持統天皇の三年草壁皇子那須郡に崩御あらせたまふや朝鮮の歸化人廣津君の孫意斯磨といふ人上を敬ずるの志厚く、那須湯都神郷に碑を建つ高さ廿四尺餘、當時日本年號の絶えたるにや唐則天后一の宮中宗皇帝の年號即ち永昌元年己丑を用ひたり、此碑實に人皇四十二代文武四年庚子の建立に係る、是より數百年雨露に

侵され苔蒸して文字明らかならず、何者の碑たるを知る者なかりしに延寶四丙辰年五月那須重貞之を發見し國造の碑なることを知りて水戸黃門光國卿に謀りしかば卿其頽敗を憂ひ元祿四年受碑堂を建築せらる云々、皇子草壁は天武天皇の御子にして那須國造に任じ東國に下されしなり、今其の碑文を左に示す、圈點を附するは文義解せざるを示すなり

永昌元年己丑四月飛鳥淨御原大宮那須國造追大壹那須宣事提評督被賜歲次三庚子年正月二壬子日辰節彌故意斯磨等立碑銘偲云爾仰惟頌公廣氏尊胤國家棟梁一世之中重被貳照一命之期連見三再甦一碎骨祝隨豈報三前思一是以曾子之家死有嬌子仲尼之門死有罵者一孝行之子不改其語一銘夏堯心澄神照乾六月童子意香助坤作徒之大合言喻字故无翼飛无根更固

鹽原温泉 是西那須停車場を距る西北五里、鹽谷郡の北端鹽原山の麓に在り、此地日本鐵道線の開通せられしより順に其名を顯はし、貴顯紳

士の別業など多く造られ、夏日は浴客群集し其の繁昌伊香保、磯部をも
 凌駕せんと欲す、温泉場は上中下鹽原及び湯本鹽原の四ヶ所に分れ、就
 中中下鹽原に最も多く其地の小名を大網、福渡戸、鹽籠、鹽の湯、畑下戸、
 門前、古町といふ、先づ其の順路を記載せんに停車場より三島村を経て
 三里餘にして關谷村に至る、是より屈曲して山腰を施り屏風に似たる絶
 壁の下を過り、或は溪流を送り或は瀑布を迎ふるなど風物一町毎に變る
 を以て途に飽くとなく漸くにして大網に近づけば途に見返橋あり、長さ
 廿間橋下に見返りの瀧あり宛も水晶の簾を懸けたるが如し、橋を渡りて
 坂を下れば大網に達す○大網は箒根村大字關谷に在り箒川の北岸巨大
 なる巖石の間より湧出するを以て別に浴槽を設けず自ら温湯の陷凹所に
 滞留するを以て入浴の用に供す、土地は左右に岩石突起するを以て光線
 の直射を遮り風は箒川の流れに隨ひ西より東に吹くを多しとす温泉宿は
 佐藤久作の一戸あるのみ、茲を過ぎて猶ほ行くと八町許りにして洞門あり

り長さ十七間其の入口に架するを寒冷橋といふ、此の上流に區々龍瀧と
 いふ瀑布あり魚鱗皆な此に至り飛瀑の勢ひに壓せられ登るとあたはず又
 其上流に稚兒ヶ淵、布の瀧等ありて甚だ壯觀なり、諸洞門を入り十町餘
 にして福渡戸に達す○福渡戸は鹽原村大字下鹽原に屬し大網より西二
 十餘町の所に在り海面を抜くと一千百五十尺、東北に白倉山の峯嶺を負
 ひ西南、箒川の流を隔て、鳥居戸前山の諸岳を望む、此地戸數は二十戸
 許り内温泉宿十一戸軒を連ねて本道の兩側に在り即ち満壽屋(臼井吉右
 衛門)松屋(田代尚吉)を以て最とす其他玉屋(田代辨次)丸屋(大塚倉吉)
 叶屋(磯兵吾)磯屋(磯長作)山形屋(磯兵三郎)吉野屋(磯平吉)阪口屋(田
 代金平)榎野屋(田代米平)升屋(未詳)等にして何れも二層三層の樓を構
 む、温泉は箒川の沿岸なる岩窟の間より湧出するものを岩の湯と云ひ、
 其他不動の湯、冷の湯、薬研の湯等あり各浴舎は此の温泉を樋にて導き
 舎内に内湯の設けあり、茲を出で、行くと一二町にして右に天狗岩を望

み、左に野立石を觀るべし、野立石は高さ二丈餘、面積百坪許り此に鼓
 寶張棄床几を設けて客を憩はしむ箒川の流れば岩下に漲りて白沫を飛し
 眼界豁然風景絶佳なり、是より行く數歩にして一樓屋の見ゆるは品川子
 爵の別莊念佛庵なり尙ほ數歩を進むれば畑下戸に達す○畑下戸は鹽竈
 門前の間に在りて本道より南に位せる低地なり、西に丘阜を負ひ東に箒
 川の溪流を擁し、川の東岸は鹽湯の部内にして北岸は巒形の河原なり、
 南は富士喜十六の降巒を望み、兩山の間に瀑布あり吉井瀧といふ、前の
 宮内次官吉井伯爵深く愛して名けたり、直下十七八丈ばかり岩を傳ひ屈
 曲して落來り頗る奇觀を呈す傍らに吉井伯の別業あり、温泉は西端岡阜
 の下に在る岩窟より湧出し、河原の湯、鳩の湯、貉の湯、本の湯、冷の湯
 (中の湯ともいふ)の五あり、泉質は何れも弱鹽類泉にして無色透明無臭
 無味、温度は百二十度乃至百三十五度を保つ、温泉宿は佐野屋(君島豐
 平)紙屋(阪内仁三郎)大和屋(阪内平六)伊勢屋(阪内榮三郎)井桁屋(阪内

重太)の五軒あり、此所を斜めに見て過れば旅館甘戸ばかり檐を並べて
 一市街を爲す所に出づ即ち門前なり○門前は地形東北に山嶽を負ひ西
 南は箒川に臨み土地平坦にして空氣常に乾燥す、泉源五ヶ所あり河原湯
 及び下の湯は東方田園の間に湧出し、自樂坊及び寺の湯は妙雲寺東山の
 下に出で三島の湯は本道の東北より湧出す、温泉宿は何れも二層三層の
 高樓を築き互ひに繁昌を競ふが中にも宮田屋(深尾七三郎)を最とし松本
 屋(渡邊半三郎)山口屋(櫻井千代松)之に次ぎ福田屋(手塚子之吉)疊屋
 (渡邊長吉)關東屋(渡邊久吾)又之に亞ぐ是より町續きの一橋を渡れば古
 町なり○古町は海面を抜くと一千四百二十尺、地形東北に大久保挾間
 の峯巒巍峨として聳え西南倉下喜十六の山岳を望む、溪水あり流れて箒
 川に入る之を平井澤といふ風光明媚の地なり温泉は箒川の東岸より湧出
 し不動の湯、瀧の湯、中の湯、御所の湯、中山の湯の五ヶ所あり、温泉水宿は
 此地に最も多くして其數十二軒、就中上の會津屋(倉島峯吉)米屋(細井

久平(萬屋(倉島峯治)等有名なり其他中の會津屋(君島峯吉)永樂屋(君島
 豐三郎)稻屋(君島兼吉)那須屋(渡邊宇太吉)常陸屋(君島勝馬)鍛冶屋(君
 島兵太)角屋(君島由三郎)明賀屋(君島捨吉)銚子屋(君島直吉)等あり楓
 川樓(松井長兵衛)は料理屋兼業にて家廣く眺望に富む、此處より會津道
 を行くと六七町にして壯麗なる樓臺を小丘の上に望む、是れ眞田幸民氏
 の別業なり、是より少しく離れ八幡神社の境内に二株の老杉あり各々周
 圍四丈に過ぎ枝垂れて地を掠めんとし其幾百年を経たるを知らず土人之
 を倒杉といふ是より後戻りして鹽釜に至り鹽湊橋を渡りて斜に溪路を行
 くと十町許りにして鹽の湯に出づ○鹽の湯 是土地高燥にして海面を抜
 くと一千六百十尺、西は鹽湯山脈連亘し東は前黒山横はり四面山を以て
 めぐらし宛も壘底の如し中に一の溪流あり鹿俣川といふ温泉の湧出する
 所三ヶ所あり冷の湯、中の湯、岩の湯といふ、浴舎は明賀屋(君島五郎)玉
 屋(君島淺吉)柏屋(阪内直吉)の三戸あり就中明賀屋は家屋宏壯にして浴

容五百人を容るゝに足る、鹿俣川に浴ふて廿町許りも上れば飛泉の絶壁
 に懸るを見る其一を雷霆の瀧、其二を霹靂の瀧、其三を咆哮の瀧、其四
 を素練の瀧といふ、如何なる人の名づけしものなるや其名の唐めきてむ
 つかしげなる笑ふに堪へたり、又畑下より徑路を登ると八町許にして須
 卷に至る○須卷 是其面積甚だ狭く、南に湯上山を望み、北に須卷澤を
 瞰む、温泉は湯上山中諸所の岩窟より湧出し流れて六條の飛泉となる故
 に一名瀧の湯といふ、温泉宿は根本屋一戸あるのみ二層樓にして湯瀧室
 浴室を設く名物の團子あり風味賞すべし又古町より西二里の山中に一温
 泉場あり之を新湯といふ○新湯 是南方に高原山を控へ東方は富士山に
 面す、此山の西麓に方一町餘の場所ありて一圓硫黄を含蓄し總て灰白色
 を帯び草木共に生せず、其間諸所に空洞ありて各熱泉を湧出す温泉宿は
 之を樋にて導き各々内湯を設く其重なるは藤屋(渡邊伊三郎)大黒屋(大
 塚金藏)君島屋(君島久伸)等にして其他下藤屋、鶴屋、葛屋、龜屋、菊屋等

あり皆客室數十を有す

● 黒磯停車場 (栃木縣下野國那須郡黒磯村)

黒磯驛も亦那須野ヶ原の一部にして今は東那須野村に屬し那珂川の沿岸に位す、素より曠原中の一部落にして一の見るべきものなし、唯那須七湯の通路に當るを以て四方より來る浴客は皆な此の停車場に降り車馬の來往頗る頻繁を極む、是より舊陸羽街道の鍋掛へ壹里、越堀へ壹里廿町にて至るべし

那須七湯 是下野國那須郡那須ヶ嶽の四周に在りて其の温泉場を湯本、高雄服、辨天、北、大丸、三斗小屋、板室の七ヶ所とす故に七湯といふ、浴客は先づ黒磯停車場を降り北の方數町に至り那珂川の假橋を渡り左折すれば那須嶽は前面に高く聳えて浴客を招くに似たり、左右は那須野ヶ原にして縁野遠く連なる、是より松子、田代、廣谷地を経て喰初佛に至る、此の喰初佛の本尊は日蓮大師の眞影を自然石に彫たるものにて參詣

人常に絶えず此邊より硫氣やうやく鼻を襲ふを以て温泉に近づくを知るべし、湯川を渡り羊腸たる坂路を登り廣谷地を距ると二里にして那須湯本に達す○湯本 是那須嶽の半腹に位し海面を抜くと三千尺、炎暑の期節甚だ短くして艶陽の時期頗る長し故に避暑に適す、温泉は那須嶽の南麓に在りて湯川の東岸二ヶ所より湧出す一を鹿の湯と云ひ一を行人湯といふ、泉質は酸性泉にして無色透明、多く硫化水素臭を帯び強酸性鐵味を有す其反應は酸性にして百七十二度の温度を保つ、此地の戸數は二十戸許り其中温泉宿は小松屋、河内屋、和泉屋、中藤屋、松川屋、松屋、橘屋、清水屋の八戸あり、何れも二層三層の高樓を構へ各々繁昌を競へり、其中内湯ある者は小松屋、河内屋、松川屋等にして何れも湯口より樋にて導くなり、旅籠飯料等は物價の高低に依り一定しかたしと雖ども日光、鹽原等に比すれば頗る廉なり中には十五錢内外にて宿泊せしむる家あり、是より十二町にして高尾股温泉に至る○高尾股 是湯本地内に屬し、

湯本より一層高き所に在るを以て眺望も亦佳なり。東は原野廣く守ツム
ジガ平を負ひ西は高雄股川に浴ふ、温泉は窮谷の岩間より湧出す浴舎は
僅かに一戸あるのみ、歸途を榛莽の間に取り温泉神社に賽すべし○温泉
神社 舒明天皇の御宇に狩野三郎といふ者鹿を狩んとて此地に來り忽ち
白鹿に行逢しかば射取んとせしに荊の中に隠れたり、之を尋ねんとて深
山に入りしに忽然白衣の老人顯れ出で吾は温泉の靈神なり此深谷に萬病
を愈す靈泉あれば早く草創して萬民を救ふべしと告げて山に飛去りたま
ふ、有難しと伏拜めば朦朧たる雲霧晴れ彼の白鹿温泉に浸り居るを見たり
悦びて矢を好しと引かため兵を放てば思ふ矢つぼを射止めぬ走り
寄りて見れば常の鹿とは異れり其後温泉を開き温泉社を建立し彼の白鹿
の角を納め奉つれり云々、今尙ほ神寶として之を藏せり黃門光國卿之を
萬字の角と名けたまひたりと形萬字に似たればなり、又神社の寶藏には
那須與一の矢の根數種を藏せりと、神社を拜し石階を降れば右に芭蕉翁

の句「湯をむす布誓もおなじ石清水」を自然石に刻せり又降る數十歩左
に見立大明神あり、是より左折して峻坂を降れば復芭蕉翁の句を石に刻
す「石の香や夏草あをく露あつし」是より有名なる殺生石の入口にして賽
の河原を過ぎ教轉地獄を眺めて殺生石のある所に至る○殺生石 は砒臭
烈しく鼻を襲きて居るに堪へざらしむ、此石の起りを原ぬるに往古某帝
の寵妃玉藻前白面金毛九尾の老狐なりしに其生体を看破られ遂に逐れて
那須野に飛來り近里の人民を害ふに依り三浦助義純、上總介廣常勅を奉
じて那須野に下り之を退治せしに老狐は大石と化し以來飛鳥走獸之に觸
れて死するもの數を知らず依て之を殺生石といふ、能登國惣持寺の住僧
峨山和尚の高弟源翁和尚法力を以て之を三つに碎き遂に化生を退治せり
云々、是は昔しの造り物語りにして取るに足らず、殺生石は砒石或は礬
石と稱ふる劇毒質の礦物にて多くは礬黃及び酸素を化合し他の諸金屬と
混和して生ず、其質甚だ脆く熱すれば鎔解せずして酸素と化合し白煙と

なりて蒸發し葱蒜の如き臭氣を放つ、此の白煙は亞硫酸瓦斯なり、是は人類其他動物に害あると最も猛烈なれば今にても此の害に逢ふ者あり見物人は用心すべし砒石の中毒は那須温泉に浴して奇効ありといふ、湯本より途を北に取り進むと三十町にして辨天の温泉あり(辨天、大丸、北、三斗小屋等の温泉は其案内を略す)

●黒田原停車場 (栃木縣下野國那須郡那須村字黒田原)

黒田原も亦那須曠原中の一驛にして那須村に屬し近頃新たに開きし所なり、近傍觀るべきもの東北二里餘に苜野古城址あり

苜野古城址 是舊陸羽街道中の一驛苜野町に在り、傳へ聞く豊城入彦命四世の孫奈良別命那須國造たりしより子孫相繼で此に住す、即ち苜野氏なり、其後四郎大夫某に至り那須資忠の次子資方を養ふて家を續がしむ當時國造の世を去ると已に遠く、那須黨の勢熾んなるを以て遂に之と交親し世々城に居れりといふ

●豊原停車場 (栃木縣下野國那須郡豊原村字水原)

豊原驛は那須曠原の北端に位し那須村の一部たり、磐城國西白河郡と相接し、實に栃木福島の縣界を爲す、是より東一里許り舊陸羽街道の寄居と白坂の間に二柱の神あり共に磐城國神と云ふ、之を以て磐城下毛の境界を爲す

●白河停車場 (福島縣磐城國西白河郡白河町字舊郭内)

○白河町 是阿部豊後守の舊城邑たりしが戊辰の役戰爭數日終に兵火に罹り舉城灰燼に歸せり、此地往昔笹原の莊と云ひ結城親朝之に築きて小峯城と名く、其後丹羽氏の采邑となり大に城郭を修理し國道の要阨に當る、尋で蒲生氏に移り阿部氏に至るまで其間主を更ふる者數家、該城隳らすに逢隈川を以てし州内諸山皆な環拱擁立して山水明媚の地なり、是より西北は若松に通じ東南は常陸に達す、市の廣さ東西二十五町餘、南北十二町餘、市坊二十三、戸數三千餘、人口壹萬一千二百七十七、市に

能因法師の詠りし白川の關は關山の南旗宿の内に在り、樂翁公の建られし碑ありて其の遺蹟を存す、此處は左右巉崖にして中に一條の通路あり、當時北夷の内地に入るを防がん爲め國司などの構へし關所にて朝廷より置たるにはあらざるべしとなり、是より道を轉じて北に向ひ矢吹停車場に至るの途中轉寢の森、人なつかし山等の舊蹟あり旅客若し序あらば之を探るべし

甲子温泉　は西白河郡の西端甲子山の半腹に位し有名なる阿武隈川の上流に在りて白河を距る五里廿五町、其地は下野の那須三斗小屋温泉と相距る直徑二里半に過ぎず、先づ白河を距る二里折口といふ所より阪路漸やく峻を加へ、又二里にして高清水に至る、是より一里廿五町にして温泉場に達す土地高燥にして空氣清冷、大倉山、庭鳥山、朝日嶽等三方に連亘し阿武隈川の源流は西南より來りて温泉場の前を貫流す、温泉は微亞兒加里性にして温度百二十度を保ち湧口四ヶ所ありて之を本湯、新

湯、湯神の湯、瀧の湯といふ、温泉宿は菊地元壽の二戸なれども壽康樓を云へる三層の高樓を構へ、道を隔て、二階建の別荘あり客室の建坪都て二百五十坪許り、宏壯にして浴客數百人を宿泊せしむべし、樂翁公曾て此山に遊び風光の絶奇なるを賞す其文は載せて關の秋風にあり

湯本温泉　は白河を距る西北九里、岩瀬郡湯本村に在り布引山と白河布引との間に挾まり土地靜雅風色明媚にして晩春には桃李節を同らして開き鶯鶯一時に鳴く、温泉は鹽類泉にして温度百十度内外を保つ、村の中央に巨大なる浴槽を設けて共同浴場とし、浴舎は樋にて原泉を導き皆な内湯の設けあり、湯口屋、星野屋、角屋等を最とし其他三戸の浴舎あり、皆な二階造りの大屋にして客室數十を有す、浴舎は専ら費用の低廉を測り客より旅籠にて止宿したしと請ふも應せず豫じめ席料を定め蒲團を貸し米を買はしむ薪水の勞を取りて報酬を受くるを常とす

●矢吹停車場（福島縣磐城國西白河郡矢吹村）

矢吹村は白河を去る九哩二十五鎮の所に在り、戸數五百二十餘、人口二千〇三十八岩代國岩瀬郡に接する一村落到して近傍見るべきの勝地なれば直ちに須賀川驛に到るべし

●須賀川停車場 (福島縣岩代國岩瀬郡須賀川村)

○須賀川驛 は陸羽街道の一驛にして岩瀬郡の東部に位し人家稠密、車馬輻輳、福島以南第一の繁昌地なり、戸數三千餘、人口九千七百十八を有し驛に岩瀬郡役所、病院、産馬會社等あり物産は生絲、繭、藍、煙草等を最とし紙類、穀類陶器等之に亞ぐ此地北は釋迦堂川の流を帯ひ西は西川原に、東は東原に連なり平野に接して四通の便あり、この地三春町を距る七里許り、所謂三春馬は三春地方の産なり、然れども此の地より産する者も亦三春馬といふ、驛東南鏡田村の西に鏡沼の古蹟あり就て探るべし、又此地にて旅舎の名高きは大和屋藤兵衛なり

●郡山停車場 (福島縣岩代國安積郡郡山町)

○郡山町 は安積郡中第一の名邑にして市の廣袤東西七町、南北十三町、市坊十一、戸數二千七百餘、人口八千〇九十六を有し、人戸櫛比し警察署、郵便電信局及び農學校等あり、安積郡役所は驛の西隣桑野村開成山の上に在り、先年噴火せし磐梯山は此地の西北に聳え相距る八里許り驛の西に長者邸と稱する古蹟あり、又驛の北の外れに安積國造神社あり、按ずるに安積の國造は遠祖を比止禰命といふ、其裔神官となりて世々之を祭れり、幕府の儒者安積良齋はこの家より出たり、又重なる旅舎は海老屋、川崎屋、菊屋の三戸とす

安積山 は郡山の西三里許りに屹立する高山なり、又の名を額取山といふ、往昔葛城王を此國に遣はされけるに、國の神のまうけ疎かなりとて王の御氣色悪しかりしを采女なる女盃とてあげ「あさか山影さへ見ゆる山の井のあさき心はわが思はなくに」と詠みて酒をす、めしかは王の心おきたりとなり、此山は郡山の次驛日和田より行く道あり

●本宮停車場 (福島縣岩代國安達郡本宮町)

○本宮 は安達郡に於て二本松に亞ぐの名邑たり、市の廣袤東西二町餘、南北十三町餘、市坊七、人口六千九百九十五を有す、公立病院あり、牧牛共立會社あり、旅人宿は停車場前境屋、越後屋、水戸屋等名あり、驛は東阿武隈川を帶び、西菅山花山等の山脈を負ふ、山頂に安達太郎神祠あり、森林鬱蒼風色愛すへし

熱海温泉 は本宮停車場より西方三里半安達郡高玉村に在り、この地片倉山と吉丸山の山間に位し氣候清涼にして頗る避暑に適す、泉質は鹽類泉にして温度八十度を保ち、疥癬、眼病、微毒、痔疾其他あらゆる皮膚病に効ありといふ

●二本松停車場 (福島縣岩代國安達郡二本松町)

○二本松町 は丹羽氏の舊城邑にして戊辰の戰地たり、城址に製絲場を設け、工女三百名餘を使役して盛んに蠶絲を製出す、この製絲場は去

る明治六年始めて佐野某の起せしものにて、器械は上州富岡の製絲場にならひ更に改良を加へ、安達太耶山の麓より四里許り掛樋にて水を通じ、水車にて器械を運轉し機關の宏壯人目を驚かすに足れり、地は東西十六町餘、南北十町餘、市坊十三より成り戸數二千五百餘、人口八千四百四十餘を有す、安達郡役所あり、郵便電信局あり、講習學校あり旅舎は大和屋宗介、きくの屋の二戸有名なり、市中一小山を以て街道を遮ざる之を觀音山といふ、山脈西に延びて城山となる、此地より福島へ五里十二町餘、若松へ十六里十五町餘

安達ヶ原古蹟 は二本松驛を距る數町、阿武隈川を隔て、東の沿岸に在り、平兼盛の「みちのくの安達ヶ原の黒塚に鬼こもれりと聞くはまことか」と咏せしは此所なり、此處には數多の巖石むら立ち其下に岩窟あり、昔し鬼の住めるといふは此の岩窟なりと、石に南無觀世音菩薩、南無阿彌陀佛など刻つけあり、是は享保の頃新たに造りしものといふ、

近傍觀音寺といふ寺に鬼の釜、又人を殺たる刀など存しあり何人のつくり設けしものによ、安達ヶ原は大方田畑に開かれ古しへの名残もなし唯た黒塚の古蹟あるのみ

嶽の湯温泉 は二本松を距る西方半里許り永田村に在り、土地高燥にして空氣清流、最も夏時の遊浴に適す、泉質は硫黄泉にして温度百十度を保ち風濕、痔疾、疥癬、雁瘡、火傷其他に効驗ありといふ
安達太郎山 又の名二本松岳といふ、安達太郎山と訓むは誤れり、此地有名の高山にして海面を抜く三千尺、二本松の西方三里に直立す、満山岩石峭立して古松楓樹其間に繁茂し、溪水之を環り潺湲聲あり、山中に前記の嶽の温泉あり、風景頗る佳なるを以て杖を曳くもの多く、殊に霜葉の頃を以て遊人多しと爲す

●松川停車場 (福島縣岩代國信夫郡松川村)

松川は信夫郡に入り始めての驛なり、戸數七百餘、人口二千五百八十三

を有す、驛に菅神の祠あり文正中筑紫太宰府より勸請する所といふ、社前の飛梅と稱する古木は安永中忍幢律師の植る所なりと、是より延長七百九十二呎の隧道を経て福島に至る

●福島停車場 (福島縣岩代國信夫郡福島町)

○福島町 は板倉氏の舊城市にして今は福島縣廳の所在地なり、城址は街南阿武隈川に枕む、傳へ聞く治承中杉妻行信此に居りしを以て杉妻城と稱し、蒲生氏の時福島と改たむ城主數々換りて一ならず、廢藩置縣の時此地に縣廳を置けり、縣廳は舊城内に在り阿武隈川に枕み結構壯大なり、其他裁判所、信夫郡役所、警察署、郵便電信局、師範學校、及び病院等闕内に散在す、市は東阿武隈川に沿ひ南に須川を帯ひ之に石橋を架し信夫橋といふ、驛の廣袤東西十餘町、南北二十餘町、市坊四十二、戸數五千餘、人口一萬七千七百十五を有し市街の繁昌なる實に東京以北の一都會と爲す、旅亭の名ある者は停車場前上安、松島屋、太田屋及び本通り

の藤金、郡役所前の松葉館、其他手塚屋、鹽六、横山、伊勢屋等なり、又此地より米澤に至る街道あり

信夫文字摺石

福島を去る東南半里許り利根山の麓山口村に在り河原

左大臣は「陸奥の信夫もいずり誰ゆゑに亂れをめにし我ならなくに」と詠じたり○大森城趾は街南二十町許り太平寺村の西十五町に在り、天

文中伊達晴宗の築くところ、後蒲生氏郷、上杉景勝等是に居り、今は廢して田圃となり敗壁殘濠尙ほ存す○信夫山公園は街北十四丁の所に在

り、黒沼神社招魂社及び観音堂あり眺望ただ佳なり、此あたりにしのお草多かりしかと今は少なし、當地名産の信夫文字摺布は此の草にて製す

となり○紅葉山は驛の東端にあり老樹蒼鬱として堤上に挺で、阿武隈川の清流其下に在り、之に架するは船橋にして長さ六十餘間、之を渡り

て紅葉山に至る○石那坂古戰場は驛の東北一里餘伏拜村に在り、文治の古戰場なり佐藤庄司以下十八士の爲めに三基の碑を建つ

北畠顯家の故蹟

福島驛の東北三里半、伊達郡大石村に靈山と呼ぶ高

山あり又の名を不忘の山といふ、東北伊具宇多二郡に亘り頂まで一里二千町、直立一千百八十尺なり、山勢嶄峯にして皆な石壁なり老樹蒼鬱清

涼掬すべし、遂に城墟あり南北朝の時北畠顯家陸奥の州守に任じ鎮守府

大將軍を兼ね義良親王を奉じて本州及び出羽を兼知す、親王始め國府に居り後此城に移る、足利尊氏の反するに及び顯家西國に死し其弟顯信州

の介に任じ白川に鎮す、興國四年足利尊氏の將畠山高國此の山の諸壘を陷すといふ、山上に顯家の靈社あり宮幣社に列せらる又樂翁公の建つる

碑あり其事を記す
飯阪温泉 是福島町の北二里十町、信夫郡飯坂町に在り、町の廣袤東

西十町南北八町、戸數七百餘あり其内商家二百餘戸、温泉を以て生活する者多し、先づ市に入り入口の坂を登れば右に摺上川を隔て、愛宕山を望み左折右曲して十綱橋の前に至る、橋は柱脚を用ひず銅綱を以て之を

繫ぐ人呼で釣橋と云ふ、此の地温泉の古きは鱒湖、透達の二泉にして共
 に町の中央に在り、相傳ふ昔し日本武尊東夷征伐の時此地を過らせたま
 ひ御身に恙あらせしかば此の鱒泉に浴し給ひしに立どころに御惱み平愈
 せる故に地名の鱒湖を其まゝ湯の名に命せられたりと今は浴場の傍らに
 瑠璃尊を勸請し左側に「あかすして別れし人のすむ里はさばこの見ゆ
 る山のあなたか」と白川樂翁公自筆の古歌を刻せる碑石を建つ、其他十
 綱町の岸に在るを波古の湯と云ひ、瀧の町に在るを瀧の湯と云ふ、又温
 泉宿は鱒湖、透達二泉の邊りに在るを和久屋(佐藤うめ)誘引屋(佐藤仁
 兵衛)樹屋(半田太五右衛門)堀江屋(堀江政藏)網屋(渡邊長太郎)佐藤屋
 (佐藤繁右衛門)と云ひ瀧の湯近傍に在るを花水館(石堂寛助)角屋(中山
 辰五郎)樹屋(片岡とし)堀江屋(堀江常右衛門)といふ皆な二層三層の高
 樓を構へ客室數十を有す然れども家屋は概ね昔し風にして内湯の設けあ
 る者少なく浴客をして合浴所に通はしむるを常とす、獨り花水館は家屋

を當世向に新築し空中に架せる如き長廊を媒して客を崖下の内湯に導
 き、樓上四十疊の室を大廣間とし猶ほ足らざる時は界の張壁を取外して
 一大會室を造るの準備あり、町内別に料理店、小間物屋、呉服店、寫眞
 師あり、其他警察署あり、郵便電信局等ありて不便を感ずる事なし
 大鳥城趾 飯坂市街の西北に大作山あり是れ所謂大鳥城址なり治承
 年間佐藤庄司元治の據る所故に之を佐藤の館又は丸山城址ともいふ、元
 治は湯の庄司と呼び繼信忠信の父なり、右大將頼朝の泰衡を伐つや石那
 坂に戦ひて死せり、山上に至れば信夫、安達の野歴々指點すべく風色頗
 る佳なり

湯野村温泉 は伊達郡湯野村に在り摺上川の一帯水を隔て飯阪温泉場
 と相對して呼べば將に應へんとす、温泉宿は多く摺上川の岸に崖造りの
 家を構へ、其重なるものを叶屋文作、綿屋常七、河股屋みち、和泉屋い
 し、松葉屋大次郎と云ふ、温泉の湧口都て三つあり橋本湯、狐湯、切湯

といふ。摺上川の岸に混浴場を設けて之に入らしむ其泉質は飯坂と同じく弱性鹽類泉にして温度は攝氏四十八度を保ち無臭無味なれども少しく白粉色に濁れり、又湯野村より摺上川の右岸に沿ひて登ると十五町にして穴原温泉あり北原村に屬す、温泉宿二戸あり吉川屋多利造、和泉屋倉吉といふ、この地風景好ければ浴後散策する者多し

吾妻山 福島停車場の西凡そ五里、信夫郡の微温湯温泉場より凡そ一里に在り、吾妻富士と一の高原を隔て、相對し盛んに水蒸氣を噴出し時としては鳴動して熱灰を降らすとあり耶麻郡の磐梯山と共に近年新たに爆裂せし新火山なるを以て地質學者等の登山して其の實況を視察する者多しと云ふ、噴口は一切經山の中腹にして字硫黃谷といふ處に在り

●長岡停車場 (福島縣岩代國伊達郡長岡村)

長岡は陸羽街道の一村落にして戸數凡そ三百、人口凡そ千四百あり、東壹里餘にして保原に達すべく三里半にして梁川町に到るを得へし、又前

記の湯野村、飯坂温泉に遊ぶには此停車場より瀧車を下るを以て最も近しとす、其他近傍に名勝なし

●桑折停車場 (福島縣岩代國伊達郡桑折町)

○桑折町 は國道中の一驛にして半田銀山の東南阿武隈川に枕み鐵道は町に沿ふて西方を通過す、戸數一千餘、人口三千七百五十九、伊達郡中屈指の地なり、驛に無能寺と呼ぶ古刹あり、明治九年聖駕東北に巡り駕を茲に止めらる一古松あるを御覽あり侍臣をして名を撰ばしめ御蔭の松といふ、其他近傍に名所古蹟多し順次案内すべし

半田銀山 有名の半田銀山は桑折町の北端より左折し三十町許りにして至るべし、山は數村に跨がり刈田郡の境に連亘す、高さ三百尺、銀坑は大同年間の創開にして近世幕府に於て之を保管し明治に至り民間の私有に歸せり、工場器械其他の壯大なる殆んど尾尾銅山に亞ぐといふ、山上に沼あり押の池といふ、又押關の遺跡あり往昔官道の通せし所なり、

又山南に葛の橋原あり

阿都賀志山 是桑折町の北方一里藤田驛の北、國道の傍に聳立す山上

より州内を一望するを以て古來國見峠の名あり、海面を抜く壹千三百七

十尺、此所もまた昔し官道の通せし所にして、藤原泰衡城塞を築き源右

府の兵を防ぎたり、要害白河の關の上に出づ今は道を開きて行く者輒を

知らず、又この山下に下紐の關趾あり、坂上田村磨の置く所なり

伊達大木戸 是藤田驛と貝田驛との間に在り、國見峠は巍然として

其在に峙つ、山下に國見神社あり、社南に古松一株あり義經腰掛の松と

いふ、傳へ聞く文治五年源賴朝伊達郡に至る、泰衡之を聞き壘を厚檜山

(阿津賀志山とも書す)に築き國見驛と此との間に五丈の長塹を鑿ち阿武

隈河流を堰て西木戸太郎國衡をして之を守らしむと即ち大木戸なり、是

より福島宮城の縣界を経て磐城國刈田郡に入り越河停車場に至る

●越河停車場 (宮城縣磐城國刈田郡越河村)

○越河村 是宮城縣内に入りて始めての驛なり、戸數七百二十餘、人

口二千七百五十七、稍々繁昌の地なり此驛に鐵井の清水あり、龜井六郎

義經に従つて此地に來り渴して此の泉を掬すと、傍らに蘆あり皆な偏葉

を生ず郷人片葉の芦といふ

●白石停車場 (宮城縣磐城國刈田郡白石町)

○白石町 是伊達家の重臣片倉小十郎の城邑たり、初め長尾景勝の家

人甘糟備后の居城なりしが慶長五年伊達政宗の爲めに陥され、爾後片倉

小十郎をして城を守らしむ、今は翻して桑田となし僅かに殘壘を止むる

のみ、戸數一千九百餘、人口七千零八十三、市に郵便電信局、警察署等

あり、旅舎は阿子島を以て最とす、街西に巍然として聳立するは官城縣

内第二の高山刈田岳なり、又の名を不忘岳又は藏王岳と呼ぶ、近傍古蹟

に富み調子山、刈田神社、菊面石、一本樹、三樹怪松、古將堂、無影池

等人の知る所なり

鎌先温泉

は白石停車場を距る西方一里廿八町、宮城縣下刈田郡福岡村大字藏本に在り、人力車賃一人曳十五錢内外にして至る、道は新道にして稍々平坦なれども始終爪頭あがりにて車の進む遅し、温泉場は人家三十戸許り兒捨川の上流に在りて四面山を繞らし頗る閑静の地なり、鎌泉は鎌先山の半腹より湧出し、湧口にては無色透明なれども浴池に入る時は黄白色を帯びて不透明に變じ鹽味と硫氣とを含む、此の湧口より極を設けて温泉を浴池に導く、浴池は長さ三間幅二間ばかりのもの二個、皆な石にて疊み一を總湯と云ひ、一を留湯と稱す、而して湯は湯瀧となりて樋より落來る、効能は肥胖病、慢性便秘、多血及び逆上症、腸加答兒、胃加答兒其他に宜しといふ、温泉宿は湯主一條一平、鈴木屋幸右衛門、最上屋助平、木村屋源八の四戸にて宿料は二十錢より四十錢までの間とす、此の温泉は年代頗る古く正長年間に開け康正年間洪水の爲めに一旦埋滅し百廿五年の後に再び温泉湧出せしかど地震の爲めに其口を塞

かれ享保年間三たび湧出して今日に至れりといふ

青根温泉

は白石停車場（仙臺地方より來る人は大河原停車場より往くも好し）を距る西北六里三十町、陸前國柴田郡前川村刈田岳の麓に在り、宮城縣下第一等の温泉と稱せらる、白石停車場より人力車を驅れば四時間許りに達すべし、此地海面を抜くと三千三百尺三面山を繞らし唯其一方を開きて杳々松島、金華の遠景を水天彷彿の間に認むべし、鑛泉湧口は大湯、名號の湯、新湯の三ヶ所あり、泉質は鹽類泉なるも固形分少なく少量の食鹽、格魯貌如留母、硫酸曹達等を含むのみなれば浴客中には此泉を汲みて煮焚の用に供する者あり、効能は上衝、頭痛、肺勞、精神病、婦人血の道、脚氣などに宜しといふ、温泉宿は都て五戸あり就中不忘閣（佐藤仁右衛門）醉嶂館（丹野七兵衛）の二戸最も宏壯にして何れも室數一百餘を有す、是より西三里を登れば刈田嶽の頂に至る

刈田嶽

一名不忘山は山中に役の行者開基の藏王權現を安す、山は休

火山にして海面を抜くこと六千五百尺、頂上に藏王沼あり即ち舊噴火坑の湖水と變じたるものにして其水藍の如く炎天と雖も涸ることなし、山下に古刹あり金峯山藏王寺と號す、又山中に奇岩怪石多し、烏帽子形屏風岳、熊野峯、杉峯、箕輪、魔魂山、賽河原、劔峯等あり就中劔峯は巉岩峭立誠に其名の如く、熊欲の昇るところ之を竈の口といふ、飛灰の積る所之を灰塚といふ、下に河あり之を三途の川といふ、多くは地獄の名を以て之を命す、此地丹土を出し河水紅きを以て之を血の池に擬す又水晶石六方石の産する所之を物見岩又の名水晶山と稱す風景殊に佳なり、山頂の舊噴火坑より發して冷水堂の下に至り清川と合し宮驛にて白石川に溢ぐを濁川といふ水質は多くの硫氣を含み其色白濁にして一の魚類を産せず、其上流は直下して瀑布となり、流れて奔流となり兩岸に奇景多し、是より岨々温泉に至る

岨々温泉　は青根を距る一里餘の山奥に在り、其道取は青根に寄らず

して遠刈田より直行するも好し、又青根よりするも好し、青根を距ると幾何もなくして山を挟み南北より流れ合する河あり即ち一は清川にして一は濁川なり、危き獨木橋を渡り匍匐して崖を攀登り峯づたひに行くこと遠からずして、忽ち幽境に入り奇岩起伏樹木鬱蒼の間を過ぎ、途上三瀨大瀨など、稱する大瀑布を觀つゝ行くと半里、峻坂を降りて濁川の水溪に入れば岨々温泉なり、地獄石大黒石等岨々として雲表に緋の激流奔湍岩に激して玉を碎き雪をちらし、奇觀殆んど見山に譲らず、客舎は宏壯清潔にして避暑の客を待てり

小原温泉　は刈田郡小原村桂澤山の麓に在り、白石停車場より西三里斷崖絶壁の溪間に位し溪流潺々として聲あり頗る山水の風景に富む、温泉湧出は古湯と稱し石を截りて浴室を造り、泉質は鹽類泉の一種なれども其中に硫化水素を含むが故に久しく浴地に溜滯すれば稍や暗黒色を帯び眼病、腺病、肺病、梅毒、其他婦人一切の病に効あり、明治十八年前

は道路險惡漸やく人を通ずる程なりしが十九年九月大工事を起して新道を開き道路平坦馬車、人力車を通ず湯主は四竈太郎兵衛、同利、新湯主は齋藤員衛其他一二戸にして家屋は概ね二階建にて室内清潔なり

●大河原停車場 (宮城縣陸前國柴田郡大河原町)

○大河原町 是國道の一驛にして停車場を降り西の方白石川を渡りたる所に在り、其驛の繁昌白石に亞ぐ、戸數一千百餘人口四千三百八十六市に柴田刈田郡役所、裁判所宮城支廳、警察署等あり、旅舎は高山庄七有名なり、近傍に古蹟多し源二位泰衡古戰場、西木戸國衡の塚等驛西に在り、又有也無也の關は驛西六七里に在り古歌に「頼み來し人の心も變るやと問ふても見ばやうやむやの關」とあるは此の所なり

遠刈田温泉 古へは湯刈田と書す、大河原停車場より青根温泉に赴く途中刈田郡宮村に在り(白石停車場より行くも里程に相違なし)温泉場は刈田岳、青麻山等の峯巒に圍まれ松川の溪流を繞して頗る閑雅なり温泉

湧口は都て五ヶ所あり上の湯、東の湯、目の湯、下の湯、新湯といふ、泉質は鹽類泉にして無色透明中性の反應あり、温度は攝氏五十度内外を保ち精神病、皮膚病又は腸胃病、疝氣、脚氣、婦人血の道子宮病等に効あり、温泉宿は佐藤源兵衛、吾妻長吉、遠藤勘五郎、大沼勘十郎、小室市之丞、佐藤勘太郎等數十戸あり

●槻木停車場 (宮城縣陸前國柴田郡槻木村)

槻木驛、鐵路は槻木の南に於て白石川と國道を横ぎり、驛の西に至りて槻木停車場あり、白石川は此地に來りて阿武隈川に合し、驛は東南に川を帶び、槻木は柴田郡中の大村にして人口六千六百五十二を有し驛また甚だ賑はへり、是より岩沼驛に至るの途中右の方に入りて道祖神社といふあり、實方中將の馬の斃れし所にて一説に中將も此に死せりといふ(中將の事は後に詳記す)

●岩沼停車場 (宮城縣陸前國各取郡岩沼町)

○岩沼町 ○は名取郡中第一の名邑にして戸數一千二百餘、人口五千四百四十五あり、陸羽街道陸前濱街道の要衝に當るを以て百貨玆に輻輳す驛に竹駒神社あり稻荷を祭る、聞老志に此地故武隈、文字或は竹駒に易訓音相通ず幸に寺號に爲すとあり、或は然らん此の地古へは國守の居る所謂阿武隈の館是なり、市内旅店の重なるは蓮田屋善兵衛其他二三戸あり、又近傍觀るべき所少なからず、驛の以東海濱に至れば遠望浦といふ所あり大洋渺茫眺望極めて可なり、能因法師が「武隈の松は此度跡もなし千歳を経てや我は來つらん」と咏せし鼻輪の松の故蹟も亦近きに在りと云ふ

●増田停車場 (宮城縣陸前國名取郡増田村)

増田驛は仙台を距る六哩三十八鎖の所に在り、岩沼に亞ぐの市驛にして人口三千八百六十餘を有す、明治九年東北御巡幸の時名を賜はりし衣笠の松は沿道唯一の名木と稱せらる

實方中將の墓 は増田驛を距る西方一里許り鹽手村の竹叢の中に在り實方朝臣は一條院の御宇殿上にて恨みある行成卿の冠を打落せし罪にて陸奥へ配流せられし御方なり「さくらかり雨は降り來ぬおなしくはぬるとも花の影に宿らん」又「都には聞きありぬらん時鳥關のこなたの身こそつらけれ」皆な中將の咏なり

埋木 増田驛より中田村を経て名取川を渡る、有名の埋木は此の川より出づ硯、印材に用ひて妙なり「名とり川瀬々の埋木あらはれは如何にせんとか相見ろめけん」有とても逢はぬためしの名とり川くちたに果てね瀬々の埋木」みな名取川の咏なり○高楯古城 は増田停車場を距る西北半里餘吉田村に在り、藤原秀衡の古壘とも云ひ、伊達家の家臣福田駿河守の居城とも云ふ詳かならず、是より長町を経て廣瀬川の鐵橋あり、此の川を中心を以て名取宮城の郡界と爲す、須臾にして仙臺停車場に達す

●仙臺停車場 (宮城縣陸前國宮城郡仙臺市東七番町)

○仙臺市 是曾て伊達氏の城邑にして東北の都會なり、人煙稠密車馬輻輳、全市の廣袤東西三十四町、南北三十二町、市坊三十二より成り戸數一萬三千二百餘、人口六萬零九百八十四を有す、廣瀨川其北を流れて宮城野其東南に連なり、師團本營を青葉城址に、分營を躑躅岡に置き宮城縣廳、控訴院、裁判所、遞信管理局、大林區署、市役所、警察署、集治監、監獄署及び第二高等中學校、師範學校、農學校、公私各種の學校、病院、書籍館、議事堂等各所に散在し、其他銀行諸會社、紡績場、新聞社等一として備はらざるなし、停車場は市の東端東七番町に在りて東京上野を距る街道八十九里餘、隣縣福島縣へ廿二里、巖手縣へ四十八里、山形縣へ十六里三十二町あり、又旅人宿は多く國分町に在り、其最も大なる者は安藤利兵衛、針生久助、大泉梅次郎、齋藤忠助、橋本友三郎、奥田正吉等何れも停車場前に支店を設く、其他羽陽舎(停車場前)杉山たか(南町)等之に亞で名あり

青葉城址

青葉城は伊達家の居城にて街西廣瀨川大橋を渡りたる所に在り、慶長五年藩祖黃門政宗卿の築く所なり、この城遠く西北に圍む者は和泉岳にして西南に蟠まるは不忘山なり、七疑峰其北に連なり大白嶺其南に聳ゆ、近くは茂陵越路山、經嶺の南山を右翼とし、國見岳、權現嶺、八幡山の北山を左翼とし、前面は東に向つて開け、廣瀨の河流域下を遶り、宮城の原野郊外を帶ふ、所謂龍蟠虎踞相備はるの地にして要害天下に鳴る。戊辰の亂後本城を毀ち、明治十五年九月城外火を失して灰燼に歸す、二師團の本營は實に此の城址に在り

經々峰の靈廟 是黃門正宗卿以下三氏の墳墓にして城東廣瀨川の西縁樹鬱蒼たる所に在り、廟下に一字の精舎あり、正宗山瑞鳳寺と號す、山門に入り大華表を潛り數十段の石階を登れば拜殿に至る、瑞鳳殿三字の額は佐文山の揮毫にして深殿には貞山公(政宗卿の法號)の靈像を安置す前の羽林義山公の廟を感仙殿と云ひ、後の羽林雄山公の廟を善應殿と云

ひ、共に瑞鳳殿を距る西方二十步許りの丘陵に在り宮殿廊廡何れも宮麗を盡せしに戊辰の戦亂に本殿を毀たれ今は感仙殿の深宮を存するのみ、此地河流地方を過ぎ、薛林門前を遶り、古杉老松幽邃に暗く、窓を開けば一望萬里白帆の洋中に浮ぶを觀る、實に佳境壯觀の地なり

櫻岡公園

は市の西端に在り舊巨理、岩沼、錦織の三邸宅地にして明治

四年之を開き以て士民遊覽の地と爲す、借樂園といふは是なり、園内に

櫻岡神社を祠る、華表の傍らに老梅古松二株を栽る松を般若の松、梅を

八房の梅と云ひ、共に正宗卿が朝鮮より齎し歸りしものといふ、祠前に

小池あり夏は花菖蒲を栽ゆ、池畔に一大豊碑あり林子平の事蹟を記する

者にして篆額は伊達慶邦公、選文は大槻馨溪翁なり、園内には梅、櫻、杜

丹、藤花、躑躅、菊等四時の花并絶ゆる事なし、又挹翠館、梅三亭等の割

烹店あり、茶店珈琲店などありて客を待つ

林子平の墓

は街北龍雲院といふ寺の境内に在り、明治九年車駕此地

に駐まり、子平の功を追賞せられて従五位を贈り幣帛料を賜ふ、扈從の

士金を捐して子平の爲めに紀念碑を建つ、篆額は一品有栖川親王、撰文

は重野博士たり、子平曾て書を著はして外患を警しめ、幕府の嫌忌を受

け寛政年間幽閉中に死す

榴ヶ岡

は停車場の東に在り此地昔しは躑躅の樹多く且つ此花を以て

都々玆摺なるものを製せしを以て岡の名に命けたり、今は一本の躑躅を

も見ず、却つて櫻樹多くして春時は遊人集り頗る雑沓を極む古歌に「み

ちのくの躑躅ヶ岡のくまつらつらしと君を今日そ知りぬる」又「東路や

つゝじが岡を來て見れば赤裳のすろに色ぞ通へる」とあるは此地を咏め

るなり、傍らに天神社あり六十四代圓融帝の御宇平持村なる者始めて勸

請する所にして始めは宇田郡八幡崎に在り其後屢々移轉して寛文七年

綱宗卿此の地に移せりといふ

東照宮

は城北に在り慶安三年忠宗卿將軍家の允許を得て社殿を造營

し承應三年に廟宇成る、殿堂門無壯麗を極む、傍らに一字を置きて仙岳院と號し祀事に奉ず、寺主を江都東叡山に請ふて最教院の僧正晃誨を請じ、太守道を清めて神輿を迎へ其年三月十六日夜始めて遷宮すといふ、毎年九月十七日を以て大祭を執行す

青葉神社

は市街の北端に在り後に荒卷の糶釜を負ひ南面して市街に臨めは高陵あり、眼下に七萬の人家を見おろし、遠近の秀嶽を一目に集め、東海の波濤一碧洋々たるを望み、眺望絶佳の地なり、茲に鎮座ある青葉神社は去る明治十九年始めて造立する者にして、祭神は故從三位權中納言兼陸奥守伊達政宗謚號武振彦命なり、毎年五月廿四日を以て祭典を行ふ、傍らに青葉神社の碑銘あり詳らかに政宗卿一代の偉蹟を紀す社傍に料理店、温泉場等あり境内を散策する者多し

愛宕山

は市の南に在り、茂陵の北に在りて廣瀬川の清流に臨める巖上の一高陵なり、上に愛宕の祠宇虚空藏あり喬木枝を交へ鬱々蒼々たり

兩社の傍らに茶店三四軒を並べ、巖頭に床几を備へて遊人の休息所に充つ、此處に立て眺望すれば眼下に仙臺市を見おろし東渺々たる滄海に白帆の隠見するを望み、金華山一髮海を隔て、翠色拭ふが如きを見る、四季折々のながめに飽かず最も納涼に宜し

楮市中の名所古蹟は至るところに在りて殆んど枚舉に遑あらず、せめては重立たるものを探びて記さんと欲するも是また紙數に限りありて半ばをも載せがたし最も遺憾と爲す、是より市外二三の名勝を案内して次の驛に進まん

燕澤蒙古の碑

仙臺市より東南一里餘り榴ヶ岡の北より原町に出で玉田横野を過ぎて猶ほ行くと數丁にして岐路あり、是より左に折れて案内村を過ぎ比丘尼阪を越ゆれば燕澤村に至る、路傍觀音堂の前に蒙古の碑あり、高さ六尺餘、徑三尺許り石面欄行文字五十一を刻す、多くは古跡又は梵字やうのものにして讀べからず、抑も此碑は胡元の僧祖元の立る

所ろにして初め祖元命を蒙りて我邦に來り、陽に歸化すると稱して我國の動靜を覗ひ潜かに本國に報ず、弘安四年夏五月元兵十萬我が博多の津を襲ひ、颯風に會ふて船艦悉とく覆没し屍は海を埋め能く生て還る者僅かに三人なりといふ、元大に悔い追齋して文を作り其徒清俊をして石に刻せしめ死者十萬の靈を祭る、是れ其碑なり文殊に奇異の文字を用ひたるは嫌疑を避けんが爲めなるべしといふ碑は弘安五年仲秋二十日に建つとあり

宮城野 是欄ヶ岡以東の平原をいふ、郷人活集が原ともいふ、此地古來有名の勝地にして殊に古跡多し「宮城野の萩や小鹿の妻ならん花咲きしより聲も色なる」さましくに心をとむる宮城野の花のいろく虫のこゑく」など古歌にあり、古へは此地の太守より年々宮城野の鈴虫を將軍家へ献上せしほどの事なりしが今や悉く開けて田園となり、其宮城野と稱するものは僅々五六町歩に過ぎずして陸軍練兵場となれり

茂嶺の城址 是愛宕山の南根岸村に在り、名取を前にし宮城を後にし兩郡の山脈此に盡き屹然突起して自然仙臺市を庇翼するの形勢を爲す、相傳ふ百一代後小松帝應永年中栗野大膳なる者名取の北邑三十三郷を贖して此の城に居ると、太守綱村卿此地に一寺を建立して兩足山大年寺と號す、依て卿の没後此の山中に葬る、戊辰の亂後此の寺宇を毀らたるも歴代の墳廟は今なほ存せり

秋保御湯(温泉) 是仙臺を距る西方五里、名取郡湯本村に在り温泉は名取川の上流に沿ひたる平地より湧出す、湧口三ヶ所ありて湯本、澤の湯、日の湯といふ、温泉宿四戸あり内湯を設け樋を以て導く、獨り日の湯は別に浴室を設けず僅かに頭及ひ眼を洗ふに供す、泉質は鹽類泉にして硫氣を含み温度は攝氏五十五度を保つ、疥癬、金創、疝氣等の諸病に効ありといふ

作前温泉 是仙臺市を距る西方七里、羽州山形街道の内宮城郡作並村

に在り、道は爪先上りなれども車馬を通ず、温泉は廣瀨川の上流に浴ふて數ヶ所より湧出し、就中古湯、新湯(鷹の湯ともいふ)等名高し、古湯は建久年間に發見し、新湯は近き比發見せり泉質は硫酸泉にて無色透明温度は攝氏五十度以上を保ち疥癬、脚氣、血症其他に効あり、温泉宿は古湯に岩松要、同苗傳兵衛の二戸あり、新湯に森谷、小池の二戸ありて何れも二層の高樓を構へ客室も亦清潔なり

定義温泉 是仙台市を距る西方六里餘り、宮城郡大倉村に在り道路峻險にして車を通せず、温泉は白髭山の麓に在りて字定義と稱する所の巖石の間より湧出す、泉質は青根温泉と伯仲し温度は攝氏三十七八度を有す、婦人諸病、逆上、金創、梅毒、皮膚諸病に用ひて効あり、湯守は石垣加茂之助にして浴舎も清潔なり、此地山中の溪間せんこうに在るを以て夏時避暑かじひひしよに來る者多し

●岩切停車場 (宮城縣陸前國宮城郡岩切村)

岩切驛は仙台を経て青森に至る東北鐵道線の分岐する所にして則ち直行すれば松島、小午田等を経て青森に達し、幹線より岐れて右折すれば鹽竈に至つて止む、其地は國道の一驛にして殊に松島、鹽竈に至るの要衝に在るを以て諸國の旅人茲あつに集まり頗る繁昌を爲す、此驛より至るべき古蹟は有名こせきの多賀城址なり、其他近地に末の松山、千引石、野田玉川等の名あり、聞く靈元上皇仙臺の國主に勅して奥中の名勝を條上せしめたるに時人之を審らかにせず疎漏そろうの事を記して上奏せしより遂に誤謬ごみゆを傳へたり、末の松山千引石は盛岡、青森二縣内に在りといふ

多賀城址 岩切停車場より東南二十町、市川村市川橋の東に方四百間許りの丘陵あり是れ多賀城の古址なり、今猶ほ近傍より古瓦を掘出す事ありて好事家は之を硯すゐりに造りて珍重すといふ、此城始めは多賀の柵さくと稱へたるが寶龜十一年に至りて多賀城と呼べり、今は城址の在る所を多賀城村と名く、又多賀城の碑あり昔し多賀の城門に建て四境の遠近を示し

たるものにして今は周圍に柵を結び傍らに一本の松を栽為たり、碑は高
と六尺五分、面の潤と二尺六寸四分、其の碑面の文は左の如し但し文中
の里程は六町壹里と知るべし

多賀城

- 去京一千五百里
- 去蝦夷國界一百二十里
- 去常陸國界四百十二里
- 去下野國界二百七十四里
- 去靺鞨國界三千里

此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人
之所置也天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山節度使從四位上兵部省卿
兼按察使鎮守府將軍藤原惠美朝臣朝鸞修造也

天平寶字六年十二月一日

野田の玉川 多湖の碑を距る十町ばかりの田間に小渠ありて野田の玉

川の古跡と云ひ傳ふ、橋の傍に碑あり能因法師が咏める「夕されは汝風
として陸奥の野田の玉川千鳥鳴くなり」といふを刻せり、然れども是地
は野田玉川の舊趾として見るべき據ころなし恐らく國人の附會せしもの
なるべし

十符池

多賀城址の南に在り、池中有三垂柳一柳下菅草頗多と聞老志に
見ゆ「陸奥のどふの菅薦七符には君をねさせて三符に我ねん」とは此所
を咏せしなり、或は曰ふ野邊地に在るもの眞の古跡なりと

洞雲寺

岩切停車場の西、國道の北七田驛に在り、曹洞宗にして慶雲
年中定惠僧正の開基に係り其後弘仁の頃慈覺大師再興す、塔宇壯嚴にし
て開山堂の如きは柱、扉ともに彫刻を施し古雅愛すべし、庭園には清水
流れて小河を爲し架するに十板橋を以てし、翠巒境地の四方を繞りて幽
邃極まりなし、本尊は毘盧遮那佛にして之を本堂に安し會式には賽人麁
集頗る雜踏を極むと云ふ

鹽竈停車場 (宮城縣陸前國宮城郡鹽竈町)

○鹽竈町 是岩切にて東北鐵道の幹線より岐れ僅々三十分間にして達するを得、此地は松島灣に枕み水陸の運輸兩ながら便を得て商業活潑の地なり、戸數は七百五十、人口は四千六百九十一、堀割は市の中央を横ぎりて江灣に至り船を行るに便なり、此地一名千賀の浦と稱し夙に松島と共に勝地を以て著はる、東京よりの旅客にして松島の景を賞せんと欲せば先づ鹽竈に至り是より、舟に乗りて行々ろの景を賞し、松島町に上り松島停車場に出るを順路とす、鹽竈町の旅店にて名ある者は太田屋、海老屋、齋藤の三軒にして何れも停車場前に支店を設け、鹽竈神社への案内、又は松島行小舟雇入の周旋を爲す

鹽竈神社 是停車場より西の方五町許り樹木鬱鬱たる山上に在り、表坂は石階百餘級、急にして峻なり裏坂は斜にして緩なれば之を女阪といふ、女阪の中腹に割菘店勝壽樓あり、樓に登れば海波煙雨を帯び、島影

隠見、漁舟其間に來往し、信に一幅の畫圖の如し、表阪を登り隨身門及び正門を入れれば本宮あり、相傳ふ鹽土老翁を祀ると、元祿中伊達綱村其の左宮を建て武甕槌命を祭り、右宮は經津主命、別宮は岐神を祀り神祇管領卜部兼連に請ひ其の縁起を草せしむ、或は曰く延喜式に載る所の志波彦神社即ち此の社なりと、今は志波彦神社を分つて二とす、昔しは奥州一の宮正一位鹽竈大明神と號せしが今は國幣中社鹽竈神社と敬め奉る、社内に和泉三郎忠衡納むるところの南蠻鐵の燈籠あり高さ六尺餘扉に日月の形を鐫る、忠衡は奥州押領使藤原秀衡の三男なり

神釜社 市内海老屋旅舎の前に神釜社あり所謂神釜なる者を祭れり、古釜四口あり其三は徑四尺八寸、一は四尺、傳へ云ふ太古鹽土老翁始めて鹽を此の釜に煮て其の利を民に教ふと祠と共に名を得る所以なり、本社之東南に金光明山法蓮寺と云ふ寺あり、寺下以東の沙汀を翠松磯と云ひ、籬島は海汀を去る十餘町恰も海面に浮ぶが如し皆な此地の勝なり

松島の奇景

は宮城縣陸前國宮城郡松島村に在り、東海の巨灣東北金華山に昇し西南相馬岬に至る、松島は灣の一邊に在りて更に小灣を爲す、俗に八十八島と稱する無数の島嶼點々海上に碁布し島は悉く松を生じ且つ其形に依りて各々名あり、實に日本三景の一たり（安藝の宮島、丹後の天の橋立及び松島を以て三景といふ）偕て此奇景を賞せんと欲せば鹽竈より海上三里の間舟を雇ひ行々左右の島嶼を巡覽するを可とす、先づ鹽竈の浦を漕出れば第一に目に入るを籬島とす、島中翠竹林を爲し林中に一祠ありて里人間龍明神といふ、鹽竈の景は此の島あるが爲めに一層眺めを増すものにして遊人は夏日此の島に上りて涼を納れ又貝を拾ふを常とす、舟其邊りを過ぎて千賀の浦の灣口を出れば眼界豁然忽ち無數の小島を一望す、舟は島嶼の間を縫ひ所謂灣内に至れば一步を進めて一象を顯はし、一櫓を揺かして一景を得、近き者は走り遠き者は舞ふ、實に千狀萬態變幻極りなし、元人蔭天錫の詩に曰く風光招我海山阿、拍手

吟魂奈三句何、御島烟波松島月、到此捲舌宮樓那、世稱して松島の傑作と爲す、其の沖合嶼々崎には鯛の生巢あり二町四方の海を圍みて之に海魚を貯はへ浪荒く漁獲多からざる時の用に供せり、且つ近傍に料理店吉田屋あり客若し三十五錢を投すれば一竿と餌とを與へて隨意に生洲の魚を釣らしめ其獲たるものを膾とし鹽焼として膳に上すを得へし、舟は是等の島嶼を或は遠く眺め、或は近く望み一時間乃至二時間にして松島村の波止場に着す

松島村は戸數百戸許りの一小村落にして其前は一小港灣を爲し東北に丘陵を遶らし、海岸には旅店及び名物の硯石、埋木細工、福浦竹等を賣る家軒を列ね、旅店は觀月樓を以て最とす、此家海岸に三層樓を構へ客室數十あり、其他松島館、加賀三亭、鈴木屋等之に亞ぎ皆な料理を兼業とす、宿料は一泊三十五錢の定めなり、勝區の中重なるものを探びて案内を爲すこと左の如し○觀瀾亭 村西月觀崎に在り元仙臺侯の游館也

り、傳へ云ふ藩祖政宗卿曾て豊太閤より伏見殿の一亭を賜はり之を江戸の亭中に移せしを後忠宗卿此に移して此の亭を造營す、吉村卿東坡西湖の句を摘み「雨奇晴好」の四字を書して楣端に掲ぐ、別に「觀瀾亭」の三字を書したる扁額あり、佐文山の書す所、亭は皆な榎の柱を用ひ室は廣くして雅致あり、竹垣を結ひて外圍を爲す、亭に上れば近く雄島、經島、福浦島、燒島等を望み風光松島に冠たり、其右に幽篁浦あり○幽篁浦北畔の水汀を破浪灣、荒菅汀と云へり、即ち松島八景の一にして竹浦夜雨是なり俊成卿の歌に「立かへり又も來て見ん松島やをしまの菅や浪にあらずな」とあるも亦是なり、象ヶ鼻、岩ヶ青、春磯等を経て雄島に入る○雄島 又御島、小島、千松島ともいふ全島長と百餘歩、横其半ばに居る松島の南廿餘島の内の島最も大なり、小松崎より此島へ渡る橋を渡月橋と云ふ長と十二間、俯望すれば碧淵人を呑まんとし目爲めに眩む、此島素頼賢、見佛上人等の住せし所にて島口に松吟庵といふあり其の故跡

なり、高僧の居りし故を以て死者の牙骨を埋むる者四方より來り島身爲めに穿たる者半ばに過ぐ、又坐禪堂あり寛永年中雲居禪師の建つる所とす、其南に頼賢の碑あり高さ一丈幅三尺六寸、側らに五輪の塔あり高さ一丈許り之を骨塔といふ、又見佛堂あり見佛上人の像を安す、島上に松樹あり松籟瑟瑟、晴波瀾瀾爽氣肌を襲ふて至る快云ふべからず○五六堂 松島村の東岸に斗出する小半島の名にして之に二短橋を架して陸に通ず、一は三間、一は六間橋板の間を際して空虚にしたれば其間隙より碧水の漫々たるを見るべし、此島元觀月崎と稱す阪上田村磨東征の日此を過ぎ多門天の像を安置す後に慈覺大師五大明王の像を安せしを以て五大堂とは名けたり慶長年間政宗卿名工鶴左衛門等に命じて堂宇を修造せしめ以て其の觀を新たにす、島上老松蟠屈枝葉倒まに垂る諸島其前に點々し奇景云ふべからず、昔しは此島に藤花咲亂れしと云へと今は跡だになし○瑞巖寺 は古への松島寺なり、松島村の北二町餘の所に在り、傳

り、傳へ云ふ藩祖政宗卿曾て豊太閤より伏見殿の一亭を賜はり之を江戸の亭中に移せしを後忠宗卿此に移して此の亭を造營す、吉村卿東坡西湖の句を摘み「雨奇晴好」の四字を書して楣端に掲ぐ、別に「觀瀾亭」の三字を書したる扁額あり、佐文山の書す所、亭は皆な榎の柱を用ひ室は廣くして雅致あり、竹垣を結ひて外圍を爲す、亭に上れば近く雄島、經島、福浦島、燒島等を望み風光松島に冠たり、其右に幽篁浦あり○幽篁浦北畔の水汀を破浪灣、荒筈汀と云へり、即ち松島八景の一にして竹浦夜雨是なり俊成卿の歌に「立かへり又も來て見ん松島やをしまの筈や浪にあらずな」とあるも亦是なり、象ヶ鼻、岩青、春磯等を経て雄島に入る○雄島 又御島、小島、千松島ともいふ全島長さ百餘歩、横其半ばに居る松島の南廿餘島の内の島最も大なり、小松崎より此島へ渡る橋を渡月橋と云ふ長さ十二間、俯望すれば碧淵人を呑まんとし目爲めに眩む、此島素頼賢、見佛上人等の住せし所にて島口に松吟庵といふあり其の故跡

なり、高僧の居りし故を以て死者の牙骨を埋むる者四方より來り島身爲めに穿たる者半ばに過ぐ、又坐禪堂あり寛永年中雲居禪師の建つる所とす、其南に頼賢の碑あり高さ一丈幅三尺六寸、側らに五輪の塔あり高さ一丈許り之を骨塔といふ、又見佛堂あり見佛上人の像を安す、島上に松樹あり松頼慈々、晴波滄澗爽氣肌を襲ふて至る快云ふべからず○五大堂 松島村の東岸に斗出する小半島の名にして之に二短橋を架して陸に通ず、一は三間、一は六間橋板の間を隙して空虚にしたれば其間隙より碧水の漫々たるを見るべし、此島元觀月崎と稱す阪上田村磨東征の日此を過ぎ多門天の像を安置す後に慈覺大師五大明王の像を安せしを以て五大堂とは名けたり慶長年間政宗卿名工鶴左衛門等に命じて堂宇を修造せしめ以て其の觀を新たにす、島上老松蟠屈枝葉倒まに垂る諸島其前に點々し奇景云ふべからず、昔しは此島に藤花咲亂れしと云へど今は跡だになし○瑞巖寺 是古への松島寺なり、松島村の北二町餘の所に在り、傳

へいふ仁明天皇承和五年の建立にして眞壁平四郎なる者出家して宋に入り法を經山の無準に學び歸朝して開く所なりと、一説には慈覺大師の開基にして當時は青龍山延福寺と號せしとも云へり、爾後智覺、覺滿等歸化の僧相繼で居れり、慶長十年に至り政宗卿之を改造し忠宗卿に至りて成功せり、雲居和尚を請ふて中興開祖と爲す、佛殿堅二十一間、横十二間、正面に政宗卿甲冑の像を安し又殉死者の位牌を列す、公の像は獨眼短面、兜に長大なる半月を飾り手に軍配を携へ一目其人に見ゆるが如し殿内別に奥の間、上段の間、中段の間、孔雀の間等あり、明治九年 聖駕北巡の際此の寺を行在所と定められ、上段の間に玉座を設けたり、還幸の後ち一千圓を賜ひて保存費に充られしといふ○富山 は松島の奇景を一眸に集むる所なり、山は手樽村に在りて松島を距る二里弱、先づ舟を磯山の岸に着れば茲に多くの男女ありて遊客の案内を求むるを待つ、案内料八錢を投ずれば見物し得べし、是より岸邊の小山を踰えて田圃の

間を過ぎ行くと十餘町にして手樽村に至る更に峻阪を登る七八町にして頂上に達す、山上寺あり大仰禪寺と號す、寛文中雲居禪師の創むる所、富春山の扁額を掲ぐ、東南を望めば海天一色、遙かに外洋に接し、漸やく西する所相嶺の數峯を望むべし、左眺すれば金華の翠黛高く聳ゆ、俯して瞰れば群島點々松島十里の灣も亦一泉池に異ならず、世人の松島の景は富山に在りといふは決して過賞にあらず、山上にては大仰寺にて茶を薦むるの外旅舎茶亭の設けなければ山に一日を費さんとする遊客は其用意肝要なり

○石の巻港 松島より野蒜港まで一里弱、此間運河あり新鳴瀬川と云ふ、舟行して野蒜に至り、鳴瀬川を横きり更に運河あり汽船を通ず、是れ寛永の初め政宗卿の開鑿する所、北上川より分注して鹽竈石の巻間の運輸に便す、此の間五里舟行して石の巻港に至るへし、本港は宮城縣下牡鹿郡に在り北上の河流滔々流れて海に入る所なり仙臺を距る十三里

鹽竈に至るの漁船は日々四回の發着あり、戸數千五百餘人口六千餘、郡役所、區裁判所、警察署及び郵船會社支店、第一國立銀行支店、第七十七國立銀行支店等あり、其他病院あり學校あり、劇場寄席諸興行物一として備はらざるなし、商賈軒を連ね百貨輻輳す、實に東北の要津にして船舶の出入年々三千に下らず、此地また衣袖渡口、烏帽石、日和山等の名勝あり、萩の濱は東方五里、是亦一の要津たり

金華山 は鹽竈を距る海路二十里、牡鹿郡鮎川村に在り松島の奇景を賞し石の卷港を経て至るべく、其間島嶼點々、鮎川に至る渡口を山鳥また鹿渡といふ此間僅かに二十四町、山は宛も洋中に聳立し高さ八十丈、五峯々巒六十八區、溪間四十八、山腹天女堂を立つ、寺あり金華山大金寺といふ、延喜式に載する所黃金山神社是なり、其の北岬を二王崎と云ひ、東岬を大箱崎と云ひ、南岬を蛇穴崎と云ひ、遙かに下總の犬吠崎と相對す、前に燈臺を設け航海者の便と爲す、山中麋鹿多く遊客至れば陸

續出來りて食を求む宛も家畜の如し、山水の美は今更いふまでもなく實に古今の名勝無双の靈地といふべし磐溪大槻翁詩あり曰く屹立煙霞漂渺間、海東名嶽是仙寰、千秋赫々金華句、無後人呼陸奥山、と以て其の勝を見る可し

● 利府停車場 (宮城縣陸前國宮城郡利府村)

利府は仙臺より野蒜港に至る街道の一驛にして戸數二百戸ばかりの小村落なり近傍特に案内すへき名勝舊跡なし

● 松島停車場 (宮城縣陸前國宮城郡松島村)

松島停車場は松島の海岸を距る西北三十二町に在り、金拾錢を賃すれば人力車にて至るを得へし、故に松島以北の人にして松島を見物せんと欲せば松島停車場を降り、松島浦に至り舟行して其奇景を賞しつゝ鹽竈浦に出で、鹽竈停車場に至りて汽車に乗るを便とす、其勝はすべて松島案内中に記したるが如し

●鹿島臺停車場 (宮城縣陸前國志田郡鹿島臺村)

鹿島臺は廣長、深谷、船越、平渡等諸村を合して新たに設けたる村名なり。戸數一千二百餘、人口四千四百六十、志田郡中の大村たり、村内字大迫及び廣長に亘りて湖水あり、品井沼といふ周圍凡そ五里二十四町、下流一は高木川となり、一は鳴瀨川に入る、是より鳴瀨川の鐵橋延長五百七十九呎を渡りて小牛田に達す。

●小牛田停車場 (宮城縣陸前國遠田郡小牛田村)

小牛田は江合川に瀕し、國道の古川驛を距る東方二里二十町、遠田郡中の一村にして戸數六百餘、人口二千百十八を有す、此の近傍にて有名なる節婦お辰の墓は西方二里半志田郡坂本村天性寺に在り。

温泉村八湯 小牛田停車場の西北十里餘、玉造郡の西隅に温泉八ヶ所あり皆温泉村に屬す、川渡、田中、赤梅、舊車、新車、鳴子、河原湯、中山の八湯に分ち相距る近きは數町遠きは一里餘とす、泉質は多く鹽類泉にして

各場共に浴舎數戸あり就中新車、鳴子を以て著名の地とす、八湯の近傍に小黒崎、美豆の小島、白絲の瀧、三條山、尿前關舊趾等の名勝あり土地僻遠なるか爲めに其名著はれずと雖も風景の閑雅なる殆ど陸前一國中に冠たり。

●瀨峯停車場 (宮城縣陸前國栗原郡瀨里村)

瀨峯は東野中に在る一驛にして近傍に名所古跡の記すべきなきし、停車場より東南半里許り遠田郡蕪栗村に蕪栗沼といふ湖水あり、東西一里十一町、南北一里十二町、流れて佐沼川に入る、是より長沼湖に沿ひ北浦北方五地を経て石越に至る。

●石越停車場 (宮城縣陸前國登米郡石越村)

石越は登米郡中の大村にして戸數一千四百餘、人口五千二百八十五を有し其北は陸前、陸中の州界を爲し又宮城警手の縣界たり。

●花泉停車場 (岩手縣陸前國西磐井郡花泉村)

花泉は磐手縣下に入り始めての宿驛にして全村の戸數五百十餘、人口一千八百七十七を有す、此の驛を發し有壁の隙道延長八百八十六呎を過ぎて一の關に達す

義經の墓 是停車場を距る西方一里十五町、有壁驛の西に在り、義經自盡の後沿倉小次郎高次なる者之を此の地に葬り以て其の陵墓を建つ、此地は乃ち高次は古館地にして上に山あり辨慶が峯と稱す往昔武藏坊辨慶經歷の地なりと云ひ傳ふ○津久毛橋 是有壁驛より國道を南に往く一里半許り澤邊驛に在り源賴朝泰衡を攻る時、梶原景高咏歌の所なりといふ今は僅かに一小把橋を存す

●一の關停車場 (岩手縣陸中國西磐井郡一の關町)

○一の關町 初め磐井の里と云ふ「諸人は磐井の里にまとゐして共に千歳を經べきなりけり」と夫木集にあるは此地の事なり、故に今磐井町とも云ふ、其の一の關といふは天喜康平の頃安倍貞任追討の際源義家一

二三の關砦を此の地に置く、一の關は乃ち磐井に置きしを以て爾後村名となれり(二の關三の關は江刺郡に在り)地勢東南は白山機織の諸山に對し西北に磐井川を帶ぶ、爲家卿の歌に「松かげの磐井の清水汲あげて夏なき年と思ひけるかな」とあるは此川を咏せしなりとぞ、此地維新前田村氏奕世の治績にして人煙稠密物貨概むね集まる、驛に西磐井東磐井郡役所あり、治安裁判所あり、郵便電信局あり、殊に北上川の水利用を假り石の卷港と往來交通の便あり、水路凡そ三十里、水陸の便已に斯の如くなるを以て前途多望の地と爲す、此地平泉に接するを以て頗る古蹟に富む左に之を列記すべし

平泉の由來 平泉は一の關を距る北の方二里餘國道に接するの一村落にして戸數一千餘、人口三千六百四十餘あり、今は人家落々たる一寒村に過ぎずと雖も往昔の事を原ぬれば、この地は寛治年間藤原清衡の始めて江刺豊田より居を移せし所にして、祖孫相繼で幾んど百年東北に雄

視せり、清衡は鎮守府將軍に任じ陸奥出羽の押領使となる、清衡の孫秀衡又州守に任じ威名益々輝やく、其子泰衡に及び源賴朝の爲めに亡ぼさる、其盛時に在りては豪華を極め居館の如きは之を王室に擬して伽羅樂御所と稱せり、爾來年移り物變りて遂に今日の形勢を爲す、當時この邑及び中尊寺、戸河内、達谷、衣川（衣川は今膽澤郡に屬す）四邑を衣の里と云ひ是等の諸邑皆な同郷なりしと云へり、近傍名所古蹟多かる中に第一に見るべきは中尊寺と爲す、中尊寺に至るの途中衣川の流れて北上川に落合ふ所に小丘あり是れ高館の舊蹟なり、里人之を判官館といふ判官館 又衣川館とも云へり、源義經家兄二位の忌諱に觸れ秀衡を便りて陸奥に落ち此館に住みしなり、古圖を見るに此館は東西四百六十間餘、南北百三十間餘、高さ五十間あり當時北上川東山の麓を流れたりしも今は此の館の下を流る蓋し洪水の爲めに崩壞して狹隘となるに至れりといふ、館址の西に方りて義經の祠堂あり、俗に義經堂と稱す、天

和三年仙臺侯伊達綱村郡司河東田定恒に命じて建しめしに安永九年に至りて廢頽し再び之を建つ堂は極めて小にして内に義經其他の塑像を安す、又左傍に辨慶堂といふあり内に辨慶の像を安す、長六丈餘戎衣して烏帽子を戴き、偃月刀に仗りて立つ、眼光瞋るが如く其堂宇は義經の祠堂より廣大なり

中尊寺 山號を關山と云へるは衣關に近きを以てなり、麓に地藏院あり稍々登りて本堂に至る、此寺の古志を按するに一山の境内東西十七町三十間、南北十三町、堂塔四十餘宇、坊舎三百餘宇ありしといふ、實に東國には比類なき大伽藍なり、其の結構も素より壯大なりしならん、今殘る所の金色堂の柱鴨居、其他扉承塵に金銀を鏤めたるを見ても日光などより一層壯嚴なりしを推知すへし、抑當寺は五十四代仁明天皇の御宇嘉祥三年釋圓仁（即ち慈覺大師）の開基する所にして初め經山の中央に一字の堂を建て弘臺壽院と號す、其後五十六代清和天皇貞觀元年に中尊

寺の號を賜ひ四境を定めらる、七十代後冷泉天皇の御宇天喜五年源賴義
 安倍貞任を征伐し凱旋の時聖凡小前澤の兩邑を寄附せらる、七十三代堀
 河天皇の御宇藤原清衡に常寺を經營すべきの勅命あり依て創めて堂塔四
 十餘宇、僧坊三百餘宇を建造せり即ち鎮護國家の靈場たるべしとて勅願
 所と爲したまふ、基衡、秀衡尋て堂塔坊舎を増建す、山谷に軒を列ね巖
 を並べ殿宇樓門光彩赫耀として眞に海内屈指の佛界靈場たりき、建武
 四年原を焚き偶ま風起りて其の猛火堂中に飛び惜むへし峻宇高門は更な
 り昆玉麗金の寶什を藏せし府庫に至るまで悉とく灰燼に歸し、僅かに經
 藏、金色堂の二字を残したり、金色堂は里人光堂と稱し方三間の小宇な
 り、内に三木檀を置き、檀下に清衡、基衡、秀衡の棺を藏め、又泉三郎
 忠衡(秀衡の季子)の首桶を藏す、經藏堂は金色堂の東北十餘歩に在り、
 結構の美金色堂と大差なし、天仁元年建る所といふ、内に一切經三部を
 藏す實に稀世の寶物なり、其他境内に古址の存する者毛越寺、常行堂、大

金堂圓隆寺、二階大塔等枚舉に違あらず就中毛越寺は堂塔四十餘の内今
 尙十七坊を存す

五串の瀧 一の關停車場の西北二里餘、嚴美村大字五串に在り、磐井
 川上流の水此處に來り兩岩の岩に迫られて瀑布を爲すものにして溪の左
 右に奇巖怪石磊砢として起伏し一危橋を岩上に架す、橋上よりは直ちに
 瀑水を望むへく其の景致の幽邃なる殆ど木曾の寢覺に似たり、詩人墨客
 の喋々其奇を賞する故なきにあらず

●前澤停車場 (岩手縣陸中國膽澤郡前澤町字島町小屋)

○前澤町 は膽澤郡中水澤驛に亞ぐの宿驛にして戸數千三百餘、人口
 五千百十一を有す驛の東に不動堂あり其境内に櫻の古木朽殘れり芭蕉の
 句に「山にふじ此みちのくの櫻かな」とあるは是なり

●水澤停車場 (岩手縣陸中國膽澤郡水澤町字新城)

○水澤町 は郡中唯一の繁昌地にして戸數二千餘、人口七千六百八十

五を有す、市に騰澤江刺郡役所、警察署、直税分署、郵便電信局等あり、其西南に聳立する高山は有名の駒ヶ嶽なり、一名駒形山とも云ふ、山上に左記の駒形神社あり

駒形神社

金ヶ崎村大字西根駒形嶽の山嶺に在り、駒形神を祭り國幣

小社に列す、其の遙拜所は水澤町の西南に在りて本社、幣殿、拜殿あり

て茲より山路に就き七里許にして山頂の本社に達すべし、本社は唯一宇にして冬季は積雪深くして途を絶ち春夏數月の間を限りて賽人の登拜を

許す、然れども道嶮路峻にして健脚の人と雖も往々中途にして歸り來る

者ありと云ふ、遙拜所は水澤町の遊園地に接近し風色頗る佳なり

鎮守府の址

水澤驛より官道を一里許り北に來て宇佐美といふ村あり

この村を左に入町許り入りて八幡社あり、即ち其地なり東に北上川、北

に膽澤川を帯び要害堅固の地なるを以て延暦二十一年に阪上田村磨平城

帝の勅を奉じて茲に城を築けり、膽澤城是なり、八幡宮には鎮守府八幡

宮の扁額を掲ぐ、藏品の存する者一もなし、境内凡ろ方一町、官道より

八幡社前に至るまで方八町許りは當事常備團兵五千餘人を置きたりとい

ふ、境内に安永七年に建たる碑、あれど唯だ八幡宮の事のみを紀して城

と府の事に及ばず、按ずるに鎮守府を置き將軍を任じたるは聖武帝の御

宇大野東人を東海東山節度使兼鎮守府將軍と爲し奥州に使はずより始ま

りしかば此地は蓋し創始の所なるべし

● 黒澤尻停車場

(岩手縣陸中國東和賀郡黒澤尻町字十八割地)

○ 黒澤尻町 是東和賀郡の繁昌地なり、この地昔しは黒澤尻五郎正任

なる者の住みし所にて一城、廓ありしが源賴義陸奥征伐の時攻落されし

○ 花卷町

● 花卷停車場 (岩手縣陸中國稗貫郡花卷町字北萬丁目)

この地昔しは鳥谷と呼び安倍頼時の始めて城を築きし所、

然るに天正十九年淺野長政九の戸に討入り其歸りに南部信直と謀りて其

家人北秀愛をして此の城を守らしむ、此の時花巻と改めしと云、今鳥谷神社といふ村社のある所即ち其の城址なり、現今戸數六百餘、人口二千五百六十六を有し、柳貫郡に於ては里川口に亞で繁昌す

●石鳥谷停車場 (岩手縣陸中國柳貫郡好地村)

石鳥谷は近頃停車場を設けし所、北數町にして紫波郡に接し日詰驛と相距る二哩餘に過ぎず、山間の一小村落のみ

●日詰停車場 (岩手縣陸中國紫波郡赤石村字日詰)

日詰は國道を界として南北二町に分る、戸數六百、人口二千零十二を有す、驛の西に陣ヶ岡あり康平中源賴義、義家阿部貞任征討の時陣營を置きし今尚ほ遺濠あり、又東北上川に枕みて志波城の古址あり、坂上田村磨の築く所なりと

高水寺 日詰より北の方國道を行く里餘にして高水寺村あり、此村の古刹高水寺は稱徳天皇の御宇一丈の觀世音を諸國に安置せられし其の一

にして當時四十餘坊あり、其後文治五年源賴朝走湯權現を勸請せり、斯く名高き佛寺たりしが世の變遷と共に漸々敗頽して今は唯一宇草庵の名残を止めたり

●盛岡停車場 (岩手縣陸中國南岩手郡厨川村字木伏)

○盛岡市 停車場を降り東に向つて行くと數十歩、北上川に架したる標梁あり明治橋といふ、舊は船橋なりしを明治七年始めて橋を架けたり、石の巻港より此の橋の下に至る凡そ五十里、汽船を通じて運搬の便を開く、盛岡の繁昌は此の川の便あるに依るといふ、此の橋を渡れば即ち盛岡市なり、此地舊南部氏の城邑にして今は巖手縣廳の所在地たり、市の廣袤東西一里南北十八町、市坊四十七、戸數八千二百餘、人口三萬千九百二十五あり、商戸軒を並べ、物貨輻輳、縣下第一の繁昌地たり、官衙にては縣廳を始め裁判所、警察署、監獄署其他學校諸會社銀行等一として具はらざるなし、旅店の重なるものは村田藏之助(十三日町)清風館、

陸奥館(停車場前)杉本與兵衛、成瀬米吉(着町)高田屋與吉(六日町)佐藤正八(吳服町)等なり

安倍館

又厨河の柵といふ、安部貞任の居城址なりといふ、最上川に

沿ふて西縣廳を距る二十町、南岩手郡厨河村に在り、傳へ聞く康平五年

九月十七日源賴義貞任をこゝに攻めて之を誅す、文治五年源賴朝藤原秀

衡を伐ち九月二日平泉を出で此に赴き義祖の故事に因り泰衡の首を此に

獲んとを期す、後工藤次郎なる者之に居り其孫光家に至り南部信長に屬

す、文祿元年南部氏其の故柵を毀ち今僅かに濠を存せり、柵の南西方に

方八町と稱ふる所あり、賴義此の柵を攻むる時屯營せし所なりと

○南部富士 は盛岡市の西方六里許りに聳立する高山を云ふ、岩手山と

も岩鷲山とも二へり、其の形甚だ富士に肖たるを以て南部富士の名あ

り、山頂に岩手山神社あり、祭神は大己貴命にして倉稻魂命、日本武

尊を合祀す、盛岡市街より望めば遠翠空を摩し其景美なり○見馴の松

は市の富豪菊池金吾の庭前に在り、明治九年東巡の時此家を行在とし庭松に名を賜ふて見馴の松といふ○石割櫻 市内字内丸地方裁判所の門内に在り、一株の古櫻長さ二丈幅一丈ばかりの巨石中より生し根の生長するに従ひ其石を割きたるものにして頗る奇觀なり○外山牧場 市を距る南方七里に在り場の廣さ凡そ四千町歩、牧牛馬數百頭、専ら洋種を撰んで改良を圖り居れり

綱張温泉

は盛岡市を距る西北六里許り南部富士の麓に在り昔しは道路險惡なりしも三四年前其道を修繕して今は自在に車馬を通ず、地は東

西南の三方に南部富士の峰巒をめぐらし北は僅かに開けて一の棧道を通

じ遠くは盛岡の市街を望み近くは車石川の清流を下瞰し廣漠なる原野は

足下より起りて數里の間寂ら緑の毛氈を布きたるに異ならず亦一奇異な

り、抑も當温泉は昔し和銅年間奥州の猶ほ夷と稱せしころ一人の獵師道

に迷ひて此の山奥に分け入りし時遙かあなたにて水音聞えければ皆は瀧

に迷ひて此の山奥に分け入りし時遙かあなたにて水音聞えければ皆は瀧

などの落るにやと近づき見れば岩の間より鑛泉三丈あまりも噴出し其湯溢れて一の流れを爲しぬ獵師は明る日里に歸りて此事を物語り遂に此湯の病に効能ある事をいひつたへ聞つたへて浴客も非常に増加せしが當時は近傍宿るへき家もなかりしかば土人等は茅葺の類を集めて屋根となし丸木を伐りて柱となしつ、茲に幾棟かの小舎を造り漸やく雨露を凌ぐの便りとはなしけると目下は温泉宿大數十戸ありて湯守を澤村龜之助といふ泉質は鹽類泉なり

●好摩停車場 (岩手縣陸中國北岩手郡巻畑村)

好摩驛 は盛岡市を去る十二哩七十七鎖、山中の一寒村にして北上川の沿岸に在り、溪水の潺湲たる木樵る音の丁々たるを聞くの外更に又觀るべきものなし

●沼宮内停車場 (岩手縣陸中國北岩手郡沼宮内村)

沼宮内は北岩手郡中第一の市驛なれども素より山間荒僻の地にして絶え

て水田なく里人概ね稗粟の類を食し、貧しき者は芋栗を常食とするに至る、且つ山岳阻絶海を距つる十餘里、終身魚味を知らざる者多かりしほとにて近時鐵道の便開けて漸く都會の美を知るに至れり、現在戸數五六百、人口二千四百四十餘あれども概ね老屋にして古風を存す、夏時蚊多しと雖も蚊帳を用ひず蚊やり火を焚て避る者多しとなり、此地古へ沼宮内少輔の居りし所にて古城址あれども今は存せず、是より延長七百六十二呎の大塚谷の隧道を抜けて中山停車場に達す

弓弾清水 は沼宮内より北上川に沿ひ官道を北に行き早拔山と府金山との間を経ると二里餘にして御堂村に在り、路の左傍に觀音堂あり、源頼義の護身佛なりといふ、之を安置する寺を北上山新通法寺正覺院と號す、寺内に老杉あり、一は圍四丈、上四幹を分つ、一は圍三丈許り皆な寺背の小阜の上に生ず、堂右に岩ありて清水湧出し弓弾の清水といふ是れ北上川の源なり、相傳ふ天喜五年源頼義安倍頼時を討つ、時に炎暑

燦が如く兵みな渴を苦しみしかは頼義遙かに帝京を拜し、自から弓彈を以て岩を突きしに清水立るに湧く、後賊平らぐに及び一寺を創立し、義家戦時誓に納めて被ふる所の河内國通法寺の觀音を安置す因て新通法寺と號すといふ、釜あり古色掬すへし、謂ふ義家飯を炊きたるものと、又近傍摺練村、馬不喰村等あり里人の説に往時烈戦の時馬疲れて練を食ふこと能はず故に是の名ありと

●中山停車場 (岩手縣陸奥國二戸郡小島谷村)

中山驛は陸奥國に入り始めての驛にして、實に山中の一驛たり、西行法師の歌に「東路のあひの中山ほと狭み心の奥の見えはこそあらめ」とは此所を云ふなり

●小島谷停車場 (全 上)

小島谷驛 も亦山中と一般唯だ山間の奇景を賞するに過ぎず更に觀るべきものなければ直ちに一ノ戸に進むべし

●一ノ戸停車場 (岩手縣陸奥國二戸郡一戸町)

一ノ戸町 は二戸郡中福岡に亞々の宿驛にして戸數七百餘人口二千五百二十餘あり、茲にて有名なる古蹟は末の松山なり

末の松山 又浪打嶺といふ、一ノ戸町より國道を北に行くと半里餘りにして達すべし、阪路羊腸頗ぶる險阻を極む、鐵道は西の山麓の稍と平坦なる所を通過するなり、昔し此山を浪越せしとて路傍の岩石に浪の跡あり、又貝の化石せしもの山上より出るとて浪打峠とは名けしなり、其事の當れるや否を知らず「年浪の末の松山かすむなり松立こえて春や來ぬらん」又「見渡せば沖つ鹽風吹なへに霞こえ行く末の松山」みな此所を咏せしなり、是より石切所を経て福岡に至る

●福岡停車場 (岩手縣陸奥國二戸郡石切所村)

○福岡驛 は戸數八百許り、人口二千九百六十九ありて山中の小都會なり、驛の南に古城址あり、是は九戸左近將監政實なる者の城址にて、

政實は豊臣氏に反き屢々兵を交へ、遂に僧隆天なる者に欺ひかれて豊臣氏の爲めに亡ぼされたりといふ。是より金田一を経て釜澤村あり、此所を以て岩手青森の縣界とす。縣界より一里餘りにして三ノ戸に達す

●三ノ戸停車場 (青森縣陸奥國三戸郡大向村)

○三ノ戸町 是三戸郡中八の戸町に亞ぐの宿驛にして戸數一千百餘、人口四千零四十五あり、驛東に鬱然たる者之を三戸城址といふ、何人の層城なりしや知るべからず、又東一里許りに名久井岳といふあり、四方岳とも稱す、其山上に長慶天皇行宮の址及び其山陵、長谷寺の遺趾等あり、然れども未だ信疑を詳かにせず、又三戸町より國道を行く一里許り路傍に唐馬塚といふあり、是は綱吉將軍清人伊孚九が獻する所の波斯國(所謂亞刺比亞)産の二馬を南部家に預け放飼にして其の種を殖せしめしに其内の一馬死したれば此に埋めたりといふ、是より沖田面、斗賀等を過ぎ十二哩五十五鎖の長路を一氣に馳せて尻内驛に着す

●尻内停車場 (青森縣陸奥國北上郡尻内村)

尻内驛は三戸郡の東部に在る一小村落にして停車場は馬淵川の沿岸に在り、出で、數十歩にして其の橋梁(長さ八十四間)を渡り一里餘りにして八戸町に至る此處より支線あり東走して尻内港に達す

●八戸停車場 (青森縣陸奥國三戸郡八戸町)

○八戸町 是東北に於る一の港灣にして南部氏の舊城市たり、市街は三日町、十三日町、廿三日町(以上上町)八日町、十八日町、廿八日町(以上下町)朔日町、六日町、十六日町、二十六日町、大工町、鍛冶町、荒町、鹽町等の十數町より成り、戸數二千八百餘、人口壹萬零九百餘を有す、三戸郡役所、治安裁判所、警察署、及び病院、中學校、銀行諸會社あり、商賈軒を連ね、物貨輻輳す、港灣には大小の船舶常に出入して帆檣林立たり、此地今を去る七百餘年前源義經衣川の館を逃れて來りし頃は海岸に陋屋三四戸ありしのみにて、山中に入りても蝦夷人のみ住み居りし處なりしが

承久年間より人家漸く増加し寛文四年に及び南部直房此地二萬石を領せしより遂に今日の繁昌を見るに至れり、是を以て里人この地を小南部と云ひ、盛岡を以て大南部と稱へたりき、産物は馬を以て第一とし、昆布、鮭其他海産物頗る多し

長者山の風景 長者山は八戸城址に接する小丘にして下に新羅神社を祀れり、以前は三社の稱あり、中央に新羅三郎及び源義經、右に虚空藏菩薩、左に愛宕大権現を安置せしが明治六年神佛混淆を廢せられてより新羅のみとせり、山上に馬場を設け祭典の時は騎射、流鏑馬、打毬、相撲等を催す、この山北に鯨ヶ浦(即ち八戸灣)を望み、東階上山を帯び老杉鬱爾として空を蔽ひ、櫻楓梅桃其間を點綴して風光頗る佳なり、傳へ云ふ文治年中藤原秀衡の三男和泉三郎忠衡が股肱の臣板橋長治なる者義經主従を護して此の地に來り、長治一高地を選び假に芝を積んで垣となし、粗屋を其内に構へて竊かに居らしむ之を長治山と名く、後轉訛して長者山と云ふに至れりと

源義經の遺物

義經その後小田の山に居館を構へ之を高館と云ひ居る數年(今の小田村なり八戸より西北一里許)賴朝義經の死せざるを聞き人を此の地に遣はし之を探らしむと聞き急に遁れて蝦夷に渡りしといふ、此の小田に入幡社あり義經の創する所にして今に其遺物なりとて大般若波羅密多經の書寫せしもの百五十卷を存す、義經及び辨慶、龜井、片岡等の書寫せしものといふ信偽は知るべからず

櫛引八幡

は市の西南半里許りに在り、近傍第一の大社と稱せられ舊曆八月十四日大祭を行ひ、此日は神輿を出して八戸町に渡御し御前神社の川向ひに來り互ひに奉幣を献するの古例あり、殊に當日は博奕を公許し各所に團樂して輸贏を争ひしが明治の聖代に至り此事を禁じ、祭典亦昔日の如く盛大ならず社殿の如きも大破に及びて今は唯だ名残をのみ止めたるに過ぎず

● 下田停車場 (青森縣陸奥國北上郡下田村)

下田は奥入瀬川に沿ひ三戸、上北の郡界に存る一村落にして全村の戸數五百五十餘人口二千零六十四あり、八の戸以北野邊地近傍に至るまで凡ろ十里間、廣遼たる原野にして恰も那須野に鬐鬣たり、之を二本木野と稱す、下田は實にこの曠原中の村落なるを以て更に見るべきものなし、是より五ノ戸まで里程三里半

● 古間木停車場 (青森縣陸奥國北上郡三澤村)

● 沼崎停車場 (青森縣陸奥國北上郡浦野館村)

沼崎は下田驛を距る十二哩五十八鎖、是又曠原中の一村落なり停車場に接して有名の小河原沼あり、車窓より右方に望むを得べし、水波濼瀧鴨鷺浮遊す、風光極めて佳なり、この沼又の名を倉内沼と云ひ周回十三里二十四間、東西二里十町、南北三里十八町あり、五の戸川を容れ東して海に入る

牧場

小河原沼のほとりに故廣瀬安任氏の牧場あり、氏は頗る牧畜熱心の人たりしを以て牧老人の名あり、馬群草野に戯ふれ伯樂の一遇を俟つもの、如し、其の他曠野に牧場多し、伯樂たらん人はこの地徒過すべからず「東路の奥の牧なるあら馬をなつくるものは春の若草」

○壺の碑 沼崎停車場より西北、坪村といふ官道に接する村落に其古蹟ありといふ、碑は今土中に埋却して知れず、或は仙台に在る多賀城の碑を以て壺の碑となすものあれと誤れり「陸奥のいはてしのふは得予知らぬかきつくして壺のいしぶみ」

● 野邊地停車場 (青森縣陸奥國上北郡野邊地町)

○野邊地 沼崎より此の地に至る人家稀疎平々坦々の道を進むと更に十三哩零六鎖にして此の地に達す、この地全村の戸數一千八百餘、人口六千三百十餘にして上北郡中第一の大村たり、港灣には大小の船舶常に出入し、驛は人家數百戸檐を並べ内に富商豪家頗る多く公園などもあり

て頗る賑はへる土地なり

○十符の菅薦 野邊地近傍の浦を十符の浦と呼びしとて此の地今も十符の菅薦を産せり、多賀城近傍にもある由前に記したるが何れが眞なるや
○馬門の戰場 野邊地より北官道を半里許り行き馬門と云ふ所あり、この邊戊辰の役津輕兵と南部兵と激戦せし所にて路上鳥居平に戦死者の墓あり○温泉 又馬門村に温泉二ヶ所あり馬門温泉といふ疥癬、眼病、金創等に効ありとて浴客常に多しといふ○花鳥の塚 は野邊地驛常光寺境内に在り、明治九年東北御巡幸の時御馬花鳥の斃れしを此に埋めしなり花鳥は米利堅産にて頗る駿足の名ありき

●小湊停車場 (青森縣陸奥國東津輕郡小湊村)

小湊驛は野邊地灣の西北方に位し海岸を距る十五町許り、漁業を以て生活爲す者多し、驛の右手に雷電神社あり、傳へ云ふ延曆中坂上田村麿の創立する所と、祀るところ何の神なるやを知らず、是より延長一千零

五十四呎の土屋隧道を経て淺虫に着す

●淺虫停車場 (青森縣陸奥國東津輕郡淺虫村)

淺虫驛は當地方有名の温泉場にして山を負ひ海に臨み風景絶佳の地なりむかし温泉にて麻を蒸せしに依り麻蒸と云ひしが後淺虫と書するに至れり、温泉は浴池凡そ十八所あり、泉質は硫黄泉にて効能は聞洩したり、其内鶴湯、椿湯最も清潔にして且つ効ありといふ、前灣に湯島、鷗島、裸島、など大小の島嶼甚布散在し奇景小松島といふも可なり、盛夏に方り避暑の遊人遊舫を浮べて島廻りを爲す殊に興ありといふ
唐味棧橋 は淺虫の驛端に在り、むかし怒濤山根を嚙み行旅道なきを以て纜かに棧橋を架けて往來すといふ、今尚ほ古蹟を存す山上に古城址あり空濠尚ほ存す里人之を蝦夷館といふ大河兼任の據て天下の兵に抗せし所なり、兼任は藤原泰衡の舊臣なり詰つて源義經と稱し建久元年陸奥に入り足利義兼、千葉常胤其他の諸豪雄と戦ひ屢ば敵兵を敗り、後遂に

敗られて逃れて龜山に至り樵夫の爲めに斧殺せらる（淺蟲より青森までの間に野内、浦町の二停車場あり）

●青森停車場（青森縣陸奥國東津輕郡青森安方町）

○青森町 是東北鐵道終極の市街にして青森縣廳の在る所、堤川は東境を環流し北は内海に灣面し縣下第一の良港たり、横濱、函館其他に定期航海船ありて大船小船常に港灣に碇泊し殊に北海渡航の要地と爲す、市街の廣袤東西二十五町、南北七町餘、市坊十七より成り戸數五千餘、人口一萬八千九百九十七を有す、商賈橋を連ね物貨輻輳し其の繁昌弘前市に譲らず、縣廳は市中新町の西に在り、尋常師範學校、警察署、裁判所、病院、銀行、新聞社其他劇場、寄席等の諸興業物一として具はらざるはなし、又旅人宿は中島政吉、中村多助、津島彦太郎、田澤市太郎、宮川慶五郎等名あり、例に依り此の地より至るべき有名地の里程を左に記す

函館へ海上五十九里○弘前へ十里半餘○黒石へ八里二十六町○田名部へ二十四里三十町○七

戸へ十六里十四町○八戸へ廿九里廿三町

善知鳥神社

は市内安方町に在り、

縣社にして市杵島姫命、

多紀理姫

命、多岐都姫命を祭り大同年間の創建なり、社殿の壯麗にして古雅なる此地方稀に見る所あり、善知鳥神社の由來に就ては古來種々の傳説あり或は允恭天皇の御宇鳥頭中納言安瀉なる者罪を獲て此地に遠流せられ初めて宗像三女神を祭るとも云ひ又安部貞任の遺臣鶴藤某貞任の遺子を奉じて此地に潜伏し後ち獵師となり其靈魂化して鳥となりしを土人此社に祭りしとも言へり、前説稍や信ずるに足るものゝ如し外ヶ濱 是は青森灣内上磯より野邊地までをいふ、此の瀕海頗る名勝に富み風光明媚古來歌人の咏唱する所なり、蓋し外ヶ濱の字は宛字にて古へは卒土ヶ濱に作り開は詩經の普天之下無レ非ニ王土、卒土之濱無レ非ニ王臣の句より起りしものにて當海岸は王土の果にして是より以外は徃昔化外として王土に入れられざりし故なりと曰ふ、又馬琴の玄同放言に